いま開かれる七つの扉

# 太古日本驚異の秘宝

高橋良典著

#### 驚愕!

日本人の祖先は世界の王だった

欧米の秘密結社が長いあいだ探し求めてきた伝説の黄金都市が実在した! アンデスの地下都市から出土した謎の黄金板の文字を解読してみると。

驚くべきことに、われわれ日本人の祖先は

かつてクルの宝と呼ばれた世界の王のしるしをもち、

七つの大陸に雄飛して輝かしい文明を築いていたことがわかった。

太古日本の驚異の宝は、いまどこにあるのか。i

その秘密を解き明かす鍵とは何か。

本書は、太古目本の失われた文明の真相に迫る、

スリリングな知的冒険の書である。

# いま開かれる七つの扉 太古日本・驚異の秘宝

高橋良典

### 第一の扉 遥かなる思い

あのインディージョーンズロバートワッツとの出会い 21世紀時代にはばたく者につたえねばなにぬ物語 ワッツは地下都市の存在に気づいていた

### 第二の扉 謎に挑んだ先人たちの軌跡

大戦中に開かれたルーズベルトの謎の秘密会談インカ文明をつくったのは地下から出現した古代人グァテマラには五十キロの地下トンネルが存在するインディオがほらあなと呼ぶ地下都市への入り口秘宝発見のために組織されたペルー政府特別調査団南米の古代文明はアトランティス、ムー文明の一部ブラジルはアトランティスの植民地だった廃壕、の都市に現れた金髪で白い肌をした男たち33地下都市には失われた文明の子孫が今も住んでいる35

### 第三扉 南米地下都市をめぐる独米の暗躍

廃櫨のベルリンで発見された、謎の"チベット人死体"38 高度文明の遺産で世界支配を夢見た独米 42 ヒトラーの才能に注目した、ひとりの魔術師 44 オカルティスト団体"アーネンエルベ"の研究目的とは? ナチの科学者を驚愕させたラマ教寺院の文献 46 ・ヴィマナ # 建造に向け動きだしたドイツの作戦計画 49 ヒトラーが夢想した千年王国の鍵は南米地下都市に 消えたフォーセット大佐のゆくえに興味を示した科学者たち 53 古地図で明かされた古代アマゾン海を囲む七つの都市 57

### 第四の扉 謎の黄金板に残された太古日本人の痕跡

七つの都の建設者はわれわれ日本人の祖先だった……64 南米各地の古代文字碑文が日本の古代文字で読めた……67 探検家モーリスがインディオの聖地で見たものは……70 金属図書館をまのあたりにした作家デニケンの驚きと興奮……73 地下都市で発見された黄金板の文字は宇宙人が残したもの……78 日本の古代文字で解読された黄金板、驚異のメッセージ……83

### 第五の扉 高度文明民族・クルの正体

太古の祖先が後世に伝えようとした"クルの宝"とは……88 日本人とヘブライ人の祖先は同じクル族か……90 日ユ同祖論の原典は、あのマックレオドの仮説……94 仮説を肉づけする二人のホホデミの存在……97

一致した!日本神話と旧約聖書の人物エピソード……99 ヘブライ人と日本人は同じ祖先から分かれた兄弟民族? 古代インドの叙事詩『マハーバーラタ』で活躍したクル族 日本人の習慣・伝統にみる"ヘブライの匂い" 古代ヘブライと日本の祖語は同じクル語? 古代イスラエル人が日本に古代文字をもたらした? "クルの宝"を狙って侵入してきたアーリヤ人 120

### 第六の扉 NASA 驚愕のハイテク飛行物体

"クルの宝"はシュメール語でムーと呼ばれた「飛行物体」? アラビアに伝わるシバの女王の飛行物体伝説 クシュ王家の叙事詩が語るエチオピアの宇宙船伝説 トトメス三世の年代記にみるエジプトの太陽円盤伝説 パレンケ遺跡の石蓋に描かれていた!古代の宇宙パイロット? 奇妙な形をした模型に秘められたハイテクノロジー 古代の飛行機は水中も航行できた" 模型とスペース・シャトルの形の類似は偶然の一致か? 尾翼には"クルの宝"を解き明かすヒントが刻まれていた

### 第七の扉 鍵は古代文字…謎は解けた!

神代文字がわかれば"クルの宝"はその姿を現す 「文字かもしれない」が、いきなり「いつわりの文字」に 古代文字研究に致命傷を与えた本居宣長のひと言 碑文に当たらずして古代史研究は始まらない 現代まで生き続ける伊勢神宮の古代文字 アヒルクサ文字は甲骨文字の草書体 縄文晩期の土器に描かれた文様は古代人の文字遊び? 病気を治す呪力をもっていたイヅモ文字 トヨクニ文字はカタカナの原型だった? 世界各地で使われていた北海道異体文字 神代文字抹殺の秘密は『日本書紀』の中に隠されていた 高句麗=日本王国の解体をはかった漢人 『古事記』編纂に関与した稗田阿礼は神代文字の通訳だった 宮崎県の碑文「ヒエタノアレモコロサレキ」の謎 神代文字抹殺の歴史を認めようとしない学者たち 秘密裏に繰り返し調査されているエクアドルの地下都市 神代文字解読に必死で取り組む欧米の碑文学者たち 今も南米の地下に眠る、手つかずの六つの都市町 あとがき

### 太古日本・驚異の秘室

### 夢

熱き思い。蘇る太古日本人の記憶。記憶は鮮明な像となり、今我々を導いてくれる。時は満ちた。扉は開かれるためにために存在する。

### あの『インディ・ジョーンズ』ロバート・ワッツとの

### 出会い

今から数年前のある日。私は東京の赤坂にあるホテル・オークラのロビーで一人の男に 会った。

彼の名は、ロバート・ワッツ。一九七〇年代に『パピヨン』を製作したあと、ジョージ. ルーカスとスピルバーグを育てて、『未知との遭遇』『レイダース』『スター・ウォーズ』などの大作を次々に世に送りだしたハリウッド映画界の巨匠だという。

私は、ロバート・ワッツについて何も知らなかった。前もって聞いていたことは、ある イギリス人が南米の地下都市と UFO に興味をもっていて、ナスカの地上絵とミステリー・ サークルの関係を知りたがっている、ということだけだった。

ふだんは誰にも会わないで書きものや調査を続けていた私も、このときばかりは、親しい友人の紹介ということで、オークラでの早朝の食事をともにすることにした。

簡単な挨拶のあと、さっそく彼が切りだした質問は次のようなものだった。

「私は今、日本の UFO 研究に大変興味をもっています。日本にもミステワー・サークル の研究者がいて、何か重要な発見をしたらしい、ということを聞いたのですが、何か面白 いことを見つけましたか?」

そう言いながら彼が取りだした本は、つい最近イギリスで出版されたばかりだという『ミステリー・サークル報告』だった。

私がその本を手にしていくつかの奇妙なサークルの形を見比べていると、彼はすかさず こう尋ねてきた。

「これらの謎の地上絵には、私の考えでは、異星人のメッセージがこめられていると思う のですが、あなたはどう思いますか?」

私は、それらのサークルを見た瞬間、これこそ私の兄弟たちが天界からわれわれに送ってきた未来へのメッセージだと思った。それぞれのサークルが私に語りかけているのは、近い将来、日本から世界に向かって発信されるムー文明のスーパーサイエンスに関する情報だった。

そして、ある種のミステリー・サークルがペルーのナスカ高原に近いアンデス山脈の斜面に描かれた地上絵と同じものである、ということを話そうとしたところ、彼は私の想念

をキャッチしたかのようにうなずきながら、私をさえぎって話を続けた。

「私は、これらのサークルがいろいろなタイプの宇宙船をあらわしていると思っています。 問題は、それぞれの宇宙船がどの星から来たか、どんな役割をはたしたか、ということで す。そうではありませんか?」

私もロバート・ワッツの考えに異論はなかった。彼が知りたがっているのは何か、ということもよくわかっていた。彼が今ここにいて、これから何をしようと望んでいるかもようやくわかってきた。

「そうです。私もそう思っています。が、これらのサークルに秘められているのは、単に テクノロジーについての情報だけではない。別のものが地上絵の形をとって表現されてい ると思います。たとえば、ナスカの地上絵は太古の宇宙船の着陸標識として造られただけ ではなく、日本の古代文字をいくつか組み合わせて、別のメッセージを伝えているからで す。」

そう答えながら、私は思った「時はまだ満ちていないのではないか」と。

これらのサークルを地上の各地に残したわれわれの兄弟は、すべての日本人に、太古の神々の記憶をとりもどすよう求めていた。その手がかりは、日本に古くから伝わる神代文字にあった。が、そのことをミスター・ワッツにはわかってもらえるだろうか。

「日本の古代文字?このサークルが日本の神代文字で読み解ける?まさか……そんな ことはないでしょう η これは異星人の宇宙船の構造をあらわした設計図以外のなにもの でもないと思いますがね……」

私は、ロバート・ワッツが日本の古代文字に興味がないことを知ると、別の話に話題を変えた。けれども、彼にだけはいつの日か「クル王をまつりなば来る」という太古の神々のメッセージを伝えたかった。

そのメッセージは、遠い昔の記憶を現在のわれわれによみがえらせようとした天界の兄弟が、今から二七〇〇年前にこの地上を去るにあたって残した言葉である。

#### 21世紀の宇宙時代にはばたく者に伝えねばならぬ物語

「いま私は、これまでに作ったどの映画より面白いものを作りたいと思っています。そう、『スター・ウォーズ』よりもっとリアルで、もっと広がりのあるものをね。タイトルはまだ決まってないけど、たとえば『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ユニバース』といったものをね……」

私は彼ならきっと、われわれが心から望んでいるような、魂をゆさぶる宇宙的なドラマ を映画化してくれると思った。

ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ザ・ユニバース。

その昔、われわれの住む悲しみの星、サラス(地球)をめぐって戦われた宇宙規模の愛と戦争の物語。

私は、日本からそのような映画を世界に向かって発表できる監督や俳優たちが一日も早く育ってほしいと願っている。

私とロバート・ワッツは、父と子の間柄ほど、年齢においても、経験においても、格段にちがいがある。けれども、これから 21 世紀の宇宙時代にはばたく子供や孫たちには、どうしても伝えなければならない物語がある、という点でまったく同じ考えだった。 独の優しいまなずしを深びながら、楽しい創金をとっている間に、これまで利が地上で

彼の優しいまなざしを浴びながら、楽しい朝食をとっている間に、これまで私が地上で 過ごしたいろいろな経験とともに、遠い昔の記憶がよみがえってきた。

それは " クルの宝 " が、やがて約束された日に、この地上に姿をあらわすだろうという 秘密の預言にかかわるものだった。

「私はこれからロサンジェルスに戻ったあと、急いで新しい映画のロケ地として予定しているアンデスに向かわなければならないんだ。また連絡するからね。グッド・ラック!」ワッツは地下都市の存在に気づいていた。

それから何日かして、ロサンジェルスにあるミスター・ワッツのオフィスから私に電話がかかってきた。

「ハローミスター・タカハシ。私は今度のロケ地をチリのアリカに近いアンデス山中に しようと思っている。どこかそのあたりに地下都市があるって言ってたね。それはどこだ ろう?例の岩の上に書いてある目印の文字の意味は?」

私が東京を留守にしている間にかかってきた電話は、彼がまちがいなくブラバツキー夫人の『ヴェールを脱いだイシス』を読んでいることを示していた。

そのアリカの郊外にあるピラミッド型をした岩の表面には、日本に古くから伝わる神代文字で、アンデス山中にある地下都市の位置が記されている。そしてこの地下都市には、欧米の秘密結社が長いあいだ求めてきた秘密の宝が隠されているのを私は知っていた。私は一瞬ためらった「ミスター・ワッツはたしかにすばらしい人だ。が、彼はそれを知ってどうしようというのだろう。私が発見したものの価値をわかってくれるのはうれしいけれど、その地下都市は、ジョージ・ルーカスの映画の中に登場する洞窟とはわけがちがう。れっきとして実在するほんものの地下都市だ。それを知りながら、なぜ……」。私はロバート・ワッツの真意をはかりかねた。もしかしたら、その電話は、彼が直接かけてきたものではなかったかもしれない。かりにそうだとしても、私が現地に同行しないで、重要な秘密を洩らすことなどありえない。それなのに、これほど大切なことを電話1本で聞いてくるとは、どうしたわけだろう。

結局、私はロサンジェルスに電話をしなかった。電話をしても、私は「アイム・ソーリィ」としか言えなかっただろう。「時が満ちるまで、この秘密を誰にも明かしてはならない」という声がどこからか聞こえてきた。

#### 18

それから何年かたった今、私は再びミスター・ワッツとの間でかわされたなつかしい会話を思い出しながら、この本を書いている。いよいよ「時が満ちた」という感じだ。



ロバート・ワッツ (右)と、著者(左)

ロバート・ワッツ

第一の扉はすでに開かれた。

読者もまた、これからいよいよ新しい世界への旅立ちだ!

"クルの宝"、すなわち、われわれ日本人の祖先が世界各地に隠した秘宝を求めて、皆さんと私のこれまでにない地球探検、歴史探検の旅が始まろうとしている!

すでに時は満ちた

わが呼びかけに応える者は ただちに名乗りをあげよ そしてわが天の軍勢にも負けぬ 地の大軍を組織して 地球のはてまで "クルの栄光"を輝かしめよ

# 第二の扉 謎に挑んだ先人たちの軌跡 探

謎が謎を呼ぶ。地下都市はどこに?失われた文明の秘密とは?消えた

探検家たちの行方は?我々に後退は許されない

### 大戦中に開かれたルーズベルト"謎の秘密会談"

一九四二年三月。アメリカが第二次大戦に突入してちょうど三か月たったある日、ルーズベルト大統領は忙しいスケジュールの合間をぬってラム夫妻と会った。

デイヴィド・ラムと妻のパトリシアは、ヨーロッパでヒトラーが行動を開始した一九三 九年以来、ひそかにメキシコのチアパス州を偵察し、ロサンジェルスの自宅に戻ったばか りだった。

三人がいっしょに過ごす予定の時間は、あっという間に過ぎた。

ラム夫妻は早くから、チアパス州の奥地にマヤの失われた都市があり、その下を走る地下のトンネル網には莫大な財宝が隠されているという話を聞きつけ、探検を行なった。 ラム夫妻の話によれば、チアパス州の奥深いジャングルを横切ったとき、突然、肌が青白く、背の低い男たちの→団に取り囲まれた。インディオの通訳によると、彼らはこの先にある"大いなる寺院"の衛兵で、そこには彼らの崇拝する"聖人"が住んでいる、そして外部の者は誰一人、この聖地に近づくことはできない、あえてそうする者は殺されてしまう、というのだ。

夫妻は、いま目の前に立っているのが、確かに、かつて中央アメリカに壮大な文明を築いたマヤの生き残り、ラカンドン族だ、という事実を確認すると満足し、とりあえずもとの道を引き返した。

イギリスの探検家ハロルド・ウィルキンスは、第二次大戦直後の一九四六年に出版された『古代南アメリカの謎』の中で、ルーズベルト大統領とラム夫妻の会見について簡単にふれている。さらに彼は、生涯の多くをメキシコとアルゼンチンで過ごし、一九三八年にこの世を去ったあるイギリス人技師から、シエラマドレ山脈の南側、ハリスコ州内のカボ・デ・コリエンテス東方約一二一キロの地点に先史時代の地下都市がある、という話を聞いたと記している。

### インカ文明をつくったのは地下から出現した古代人?

一九四二年のルーズベルトの謎の会見以来、すでに五○余年の歳月が過ぎ去った。そしてこの当時、ドイツのスパイがアメリカで活発な工作を開始し、ヒトラーが中南米に眠る

マヤ.インカの黄金文明の秘密を必死に捜し求めていたことや、アメリカとドイツを中心に地下都市"シャンバラ"の秘宝をめぐる情報戦がくりひろげられた実態を知る者も少なくなった。

この時代にルーズベルトやヒトラーは、なぜ南アメリカの地下回廊を極秘のうちに調査させたのか?また地底世界"シャンバラッとは何なのか?これらの実体に迫る前に、

アメリカの知られざる地下回廊の発見の歴史をたどってみることにしよう。

南アメリカの地下都市について調べてみると、アジアと同様、特にインド、チベットと同じように、古くから数多くのシャンバラ伝説が伝わっていることに気づく。

"古代世界の最古の文明の発祥地"ともみられるアメリカ大陸には、アジアに勝るとも劣らない多くの地下都市に関する証拠位置を突きとめられた回廊が存在するばかりでなく、それらに関する注目すべき報告も多い。

24

また、それらのトンネルは太平洋によって隔てられているが、アジアの中心にある "シャンバラ"へとつながり、かつて地球全体にはりめぐらされていた地底王国の広大なトンネル網の→部を形成していた可能性さえあるのだ。

かつてアンデスに栄えたインカ帝国の黄金文明は、南アメリカの地下都市から姿を現したプレ・インカの古代人によってつくられたという伝説がある。この伝説の起源は遠い過去の中に埋もれているが、民話の形で今も生きている。

### グァテマラには五〇キロの地下トンネルが存在する!?

われわれは、南アメリカの地下回廊に関するはっきりした情報を、スペイン人のペルー 侵略の記録の中に見つけることができる。

一五二六年、フランシスコ・ピサロに率いられたスペイン人の一隊は、南アメリカの北 西海岸に上陸し、インカ人に攻撃を加えながら内陸へと進んでいった。ピサロはどこから か、インカには秘密の巨大な宝物庫があり、それはインカ帝国の地下に数十キロにわたっ て延びたトンネルの中にある、という噂を聞きこんでいたのだ。

ピサロたち征服者は、莫大な量の黄金でつくられたインカの工芸品を求めて、数年間に わたりアンデスの住民と文明に大破壊を加えた。

ピサロ以来、隠されたインカの財宝を求めて、世界中から南アメリカの未開地へと探検 家たちがやって来たが、彼らの試みはすべて徒労に終わってしまった。

南アメリカで再び地下トンネルが注目を浴びたのは、それから一〇〇年以上たってからのことだ。トンネルを発見したのは、フランシスコ・アントニオ・フェントス・イ・グスマンという長い名前を持つスペイン人伝道司祭だった。彼は長い間グァテマラで暮らし、一六八九年に興味深い歴史書を残した。

フェントスの記述によると、グァテマラには、今はもういないインディオたちがかつて

住んでいたと思われる遺跡がたくさんあり、遺跡の住民は、おそらく前にふれたラカンドン族だったに違いないという。これらの遺跡の下をそれぞれトンネルが走っているのだが、その中のひとつは長さが五〇キロもあったと記されている。

### インディオが"ほら穴"と呼ぶ地下都市への入口

それから一五○年間、

グァテマラと南アメリカの地下回廊は話題にのぽることがなかった。

しかし、次に現れたアメリカ人ジョン・ロイド・ステファンスは貴重な報告とイラストをわれわれに残してくれた。

ジョン・ロイド・ステファンスは、一九世紀のはじめ、世界をくまなく旅行してまわったユダヤ人の著名な法律家で、中央アメリカにひきつけられる前は、ヨーロッパと中近東の遺跡をよく訪れていた。

しかし彼は、アメリカの未知の遺跡、特にユカタン半島の密林に眠る失われた黄金都市 の伝説を聞いて以来、古代オルメカ・マヤ文明の秘密に心を奪われるようになった。

ステファンスが中央アメリカの探検を決意したのは、グァテマラ西部のサンタ・クルス. デル・キチエに住む一人のスペイン人老司祭から「ある建物の下に、インディオが』ほら 穴"と呼ぶ入口がある。ここから入れば、メキシコまで一時間たらずで行ける。」という話 を打ち明けられたときだった。そして彼は、親友のフレデリック・キャサウッドとともに、 一八三〇年代のある日、メキシコ、グァテマラの探検へと旅立ったのである。

親友のキャサウッドはイギリス育ちの有能な画家だった。彼は以前、現地人と同じ格好をしてエジプトの遺跡を歩きまわった男だった。

旅行中、ステファンスは自分の目で確かめた事実を記録し、キャサウッドが遺跡の細部 を版画に残す役割を受け持った。

こうして一八三八年、二人の画期的な著書『チアパス・ユカタン事記』が出版されることになった。

『チアパス・ユカタン事記』の第一巻は、ステファンスが現地で集めた情報を、遺跡ごとに整理したもので、かつてユカタン半島を中心に栄えたマヤ文明の全貌を解明する第一歩となった。ステファンスはこのときすでに、ラム夫妻より一○○年も早く、マヤ文明の秘密の地下回廊が持つ重大な意味に気づいていたのである。

### 秘宝発見のために組織されたペルー政府特別調査団

ステファンスが失われた謎の黄金都市と秘密の地下通路の話を公表して以来、インカ帝 国の最後の女王が隠したと噂される財宝捜しが盛んになったことはいうまでもない。 なかでもペルー政府は、一八四四年に発生したある事件をきっかけに、秘密の地下通路 へと続く入口捜しを始めた。

イギリスの探検家ウィルキンスは、その著『古代南アメリカの謎』の中で、インカ帝国

直系の子孫といわれるケチュア族のインディオが死にぎわにカトリックの老神父に告げた 秘密を、たまたま『人のイタリア人が神父から聞き出すことに成功したと記している。 死にぎわにインディオが老神父に語ったというのは、地下への入口を示す秘密の記号だ った。

このイタリア人はさっそく巨額の報酬を期待して、聞き出した話をそのままペルー政府 に持ちこんだ。

そし一八四四年、ペルー政府の特別調査団が組織され、大がかりな入口捜しに取りかかったのである。

ロシア生まれの神秘主義者 H・P・ブラバツキー夫人は、このイタリア人から直接聞いたという秘密の地下回廊について、『ヴェールを脱いだイシス』の中で、ペルーのリマからクスコへと向かう巨大な地下道は、ボリビアの国境近くにあるティアワナコへと、またさらにチリのアリカに到ることを示している。

ここで読者は地図を広げて確認していただきたい。クスコからリマまでの距離は約六〇〇キロ.またティアワナコまでは約四五〇キロ。両者をあわせると実に一〇〇〇キロ以上の大トンネルがアンデスの地下を走っていることになる。

箱四の扉で詳しく述べるが、スイスの作家デ<sup>+</sup><sub>i</sub>;ンほ、エクアドルで発見されたある地 下都市を調査し、その著『神々の黄金』(一九七二年)の中でペルーの国境に近い秘密の入 口から、地下都市に入ったと書いている。

彼はブラバツキー夫人の推測をさらに発展させ、「その地下道は数千キロにわたって延び、 過去の知られざる時代に、知られざる者によって、南アメリカ大陸全体の地下につくられ た」と考えた。

### 南米の古代文明はアトランティス・ムー文明の一部

アーサー・コナン・ドイルの偉大な小説『緑の館』によって不滅の存在となった"失われた世界"、アマゾンのジャングルを擁するブラジル。

一五〇〇年にポルトガルの航海者ペドロ・カブラルが、この国の東海岸に到着して以来、ブラジルの広大な奥地に眠る古代の都市を見つけ出そうと、多くの探検が試みられた。 探検家たちは、そもそものはじめから、原住民たちの語り伝える"失われた都市"と、そこに待ち受ける莫大な金銀財宝に心を燃え立たせていた。

これらの探検の中でも、今世紀のはじめ、ドイツのユダヤ系財閥クルップが一〇万ポンドの費用をかけて派遣した探検隊は、ブラジルの奥地に関する特に貴重な情報をもたらすことになった。

現在すでに定説となっている大陸移動説によれば、かつてアメリカ大陸とヨーロッパ、 アフリカ大陸は陸続きであった。そして太古の時代に、大西洋にアトランティス大陸があったとすれば、南アメリカの古代文明が失われたアトランティス・ムー文明の一部であったことはまちがいない。事実、クルップ探検隊の当時、すでに大西洋の両側(アフリカ大 陸と南米)で発見されていた遺跡と遺物に認められる同一性は、このことを裏づけるよう に思われた。

この時期までに確かめられた資料によれば、アトランティス・ムー文明の時代に世界中につくられた地下都市と地下トンネル網の一部は南アメリカにもあり、このブラジルからアフリカを経てアジアに達するトンネルは、蒙古からシベリアを経てアラスカをめぐり、ロッキー、アンデスの地下を走って再びブラジルに戻る。シャンバラの聖なる輪"を形づくっていた可能性がある。

### ブラジルはアトランティスの植民地だった?

アメリカの伝説と神話の巨大な宝庫ともいうべきキチエ族の聖書『ポポル・ヴフ』は、かつて東方の海上にあった土地について多くを語っている。その場所は、われわれがプラトン以来、二千数百年にわたって議論を続けてきた伝説の大陸アトランティスの位置を指し示している。

この書物は、「人々の父たちが来た」のはこの土地からであり、彼らは東方の陸地を呑みこんでしまった"突然の大異変"を生きのびたと伝えている。

ウィルキンスは、『ポポル・ヴフ』の記録をもとに、彼自身の調査結果も加えて、アトランティスと南アメリカの結びつきが古くからあり、おそらくブラジルはアトランティスの植民地のひとつであったろうと結論づけている。

アトランティスとムーを崩壊させた大洪水の直前、白い肌をした伝道者の一団が活躍したという言い伝えが南アメリカ全土に残されている。その中心人物はケツァルコアトルという神官で、のちに人類学者から文化英雄神とみられるようになった。

一六世紀後半にオルドネ・ド・アギラが残した『シエラの歴史』によれば、ケツァルコアトルは東の島(アトランティス)からブラジルへ何回も来ており、かの地にある"天国の岩"へ地下の通路を通って行くことを許されていた。

さらにウィルキンスによれば、ケツァルコアトルはブラジルから未開の中央アメリカに 文明をもたらすため、また、来るべきアトランティスの崩壊を警告するためにやって来た。 そして、彼のたび重なる警告のとおり、アトランティス大陸を海底の深みに沈めてしまった"突然の大異変"が発生したのだ。

しかしながら、この恐ろしい大破壊の生存者はいた。われわれは、先にメキシコで発見 された白い肌のインディオや、グァテマラ、ペルーの地下都市を守る青白い肌をした原住 民の存在から、彼らこそアトランティス・ムー文明の末期の大異変を生きのびた人々の子 孫であろうと推測することができる。

また、ブラジルの土着インディオ、タプア族の伝説を紹介したアトランティス学の最高権威の一人、ルイス・スペンスは、彼らの特徴を「肌は白く、髪の毛は金色かとび色で、その手足と体つきはとても繊細な印象を与える」と記している。

### 廃嘘の都市に現れた金髪で白い肌をした男たち

われわれがアトランティスとムーの大いなる遺産を継承するブラジルの謎、特に失われた種族や古い滅亡した都市について本格的に研究しようとするなら、一九二五年にマットグロッソ地域で消息を絶ったフォーセット大佐の有名な探検に注目しなければならない。フォーセット大佐の探検の事実については、彼の次男ブライアンが『フォーセット探検隊』(一九五三年)の中で、事件の細かい記録を紹介している。

フォーセットの探検の動機は次の二つの特別な事実に導かれていた。

すなわち第一は、ジャングルの中に信じられないほど古い廃墟がいくつもあることが知られていたこと。

そして第二は、リオデジャネイロの国立公文書館から発見された歴史的記録である。その記録には、一七三四年にマットグロッソ地域において失われた文明が発見されたことが記されていた。

その年、ポルトガル人の探検隊はマットグロッソの山中で小さな通路を発見し、そこを たどって行って、明らかに何らかの大変動によって荒廃した都市の廃虚を発見した。その 廃墟で、彼らは財宝や金貨がいたるところに放り出されているのを見つけたのだ。 探検家たちはさらに、白い肌で金髪の二人の男に出くわして驚いた。ポルトガル人たち はその発見を記録するためにとどまる一方、自分たちの発見のニュースを至急リオデジャ ネイロに知らせるべく現地人を走らせた。しかし、探検隊はとうとう文明社会に戻ること はなかった。

フォーセット大佐は長男のジャックと友人ラリー・リンメルとの運命的な旅行に出発する前、このようなブラジルの記録や伝説について緻密な研究を行なっていた。

### 地下都市には失われた文明の子孫が今も住んでいる

かつてアメリカからブラジルに移住した哲学者で考古学者、そして地底伝説に関する最高権威の一人であるレイモンドバーナード博士は、論文『地下の世界』(一九六〇年)の中で、「彼(フォーセット)が捜していたアトランティスの都市は、地上にある滅亡した都市の廃壇ではなく、依然としてアトランティス人がその居住者として住んでいる地下都市である」と断言している。

また、マットグロッソ地域に居住しながら、この地の種族とトンネル伝説との関連について独特の研究を行なったアメリカの博物学者力―ル・フニは、ロンカドルの地下回廊が勇猛なムルセゴ(バット)・インディアンによって守られており、洞窟を捜しに行くとしたら、フォーセットのように消息不明になることを覚悟しなければならない、と彼の著書『南アメリカの謎のトンネルと地下都市』(一九六〇年)の中で述べている。

バーナード博士は、多くの話を慎重に検討した結果、未知の人々がその昔アマゾンのマ

ットグロッソに都市を建設し、突然の大変動が彼らの土地を襲う前に、「シャンバラの地底世界へ移住するため」に、いくつかのトンネルをつくっておいたのではないかと推測した。 そして博士は、アトランティス・ムー文明の時代、地球はトンネル網で蜂の巣のようになっていたという驚くべき結論を得た。

バーナード博士をはじめとする多くの人々の探究は、少なくともかつてアトランティスとアメリカ大陸との問に深い文化的なつながりがあったこと、そして同様に、失われたムー大陸とアメリカにおけるその"植民地"とを結んでいたと思われる古代のトンネルが存在したこと、などを明らかにしたのはまちがいない。

われわれがいま問題にしているのは、その地下都市に今もなお失われた文明の建設者の 子孫が生きているのか、また、滅び去ったアトランティス・ムー文明の秘密が隠されてい るのか、ということだ。

おそらくこのテーマこそ、冒頭に紹介したルーズベルトを興奮させ、ヒトラーに地底世界シャンバラの探検を決意させたものであり、今なお、われわれの目の前に世界最大の謎として横たわっているといえるのである。

### 第三の扉

### 南米地下都市をめぐる独米の暗躍

志半ばで倒れたヒットラーの夢は幻。だが 我々の目前に迫っているのはカラ帝国七つの都。 手がかりは南氷エクアドルにあり!?

### 廃嘘のベルリンで発見された、謎の"チベット人死体"

第二次大戦で瓦礫がれきの山と化したベルリンの街を注意深く捜索していたソ連軍兵士の一隊が、第二次大戦を通じて最も驚くべき発見をしたのは、一九四五年四月二五日の朝のことだった。

その日、荒れ果てたナチス・ドイツの首都ベルリンに突入し、六年に及んだ血なまぐさい戦争を数日のうちに終わらせようとしていたソ連軍の兵士たちは、アドルフ・ヒトラーの"千年王国"の夢を今なお実現しようと抗戦をしかけてくるグループを摘発するため、絶えずパトロールを続けていた。

ソ連兵たちは、崩れ落ちたビルを次から次へと念を入れて点検し、瓦礫の詰まった部屋 や屋根裏に誰か隠れている者はいないか、ひとつ残らず見てまわった。

爆弾で破壊された街を捜索するには、戦争でとぎすまされた直観に頼らざるを得なかった。ひとつの通りがどこで終わり、別の通りがどこで始まるのかさえ、全く見当がつかなかったからだ。ソ連軍兵士の一隊にとっては、いま自分たちが東ベルリン地区のどこかにいるということ以外、詳しいことは何もわからなかった。

兵士たちが最大の発見をしたのは、かつて三階建てのビルだったと思われる残骸の中であった。一階の部屋のひとつで、六人の男の死体が小さな円を描いて横たわっているのが見つかったのだ。円の中心には、別の仰向けの死体があり、その両手はまるで祈っているかのようにしっかりと組まれていた。

一見これらの死体は、廃墟と化した街の中でそれまで何度も出くわしてきた他の死体と 何ら変わりないように思われた。しかしよく見ると、ふつうの死体と違って、全く異様で あることが次々にわかった。死体は、色あせた古ぼけたドイツの軍服を着ていたが、その 顔は明らかに東洋人であった。

事実、彼らはチベット人だった。というのは、ソ連兵の中にモンゴル方面の出身者がいて、その若い兵士がチベット人にまちがいないと即座に断定したからである。

彼は、円の中心にある死体が、しっかり組んだ両手に明るい緑色の手袋をはめているのに気づいた。横たわったチベット人の服装からすると、彼らは戦闘で死んだのではなく、明らかに儀式的な自殺らしきものを図ったに違いなかった。おそらく円の中央にいる緑色の手袋をした男がその命令を下したのだ。

母国から数千キロも離れたベルリンで、チベット人たちはいったい何をしていたのだろうか?しかも戦争の真っ最中に……。チベットはナチス・ドイツといかなる関係があったというのだろうか。

話はそれだけではない。ソ連軍が西側から侵入する連合軍と呼応して東側からベルリンに侵入した四月二五日から、五月二日にナチス・ドイツの首都が陥落するまでの間に、数百人以上一説によれば数千人のチベット人が同じような状態で死んでいるのが見つかった。

彼らの中には、かつて壮大な都だったこのベルリンを廃塩に変えた爆弾や激しい戦闘で 死んだことが明らかな者もいた。しかし、ほとんどの者が自殺による死だった。 チベット人たちの死体がなぜそんなにたくさんあったのか?それはしばらくのあいだ



アドルフ・ヒトラー

アドルフ・ヒトラー

全くの謎だった。しかし、死んだチベット人についての情報が次第に集められるにつれ、 ドイツの総統アドルフ・ヒトラーが極秘のうちに進めてきた計画が明らかになってきたの である。

### 高度文明の遺産で世界支配を夢見た独米

この時代にアメリカはチベットに向かったレーリッヒ探検隊を応援し、イギリスは南米 に向かったフォーセット探検隊を支援した。そして、ナチス・ドイツの総統ヒトラーもま た、親衛隊長のヒムラーに命じて、世界各地の地下都市を調査させた。

彼ら欧米の指導者が進めていたものは、表向き、失われた古代文明の遺跡を調査することだった。

が、われわれ日本人の知らないところで進められてきたこれらの探検調査の最終目的は、 紀元前のはるか昔に滅び去ったアトランティス文明、ムー文明の遺産を手に入れることだった。

かつてニュートンやゲーテを生み出したヨーロッパの秘密結社バラ十字会は、その創設者クリスチャン・ローゼンクロイツの時代から、中世のアラビアとトルコに繁栄をもたらした秘密の知識が、太古の失われた地下都市からもたらされたものであることをよく知っていた。

有名な『アラビアン・ナイト』の中に登場するアラジンの魔法のランプや空飛ぶじゅう たんの話は、決して古代人の空想ではなかった。

それらは、アリババが四〇人の盗賊をだまして手に入れた、秘密の地下都市に隠された 太古の神々の遺産だった。

このことをみずからの経験によって熟知していたローゼンクロイツとその後継者は、一 八世紀のイギリスにフリーメーソン結社を再興し、フランスやドイツにグラントリアン(偉 大なる東洋)、トゥーレ(伝説の北方大陸)といった秘密結社を次々に組織して、失われた古 代の神々の遺産をひそかに入手しようとした。

その目的は世界支配にあった。つまり、太古の高度な文明の遺産を手にした者だけが、 最終的に世界の支配者になれる、というおそるべき野望のとりことなったのである。 そのようなヨーロッパ各国のエリートの野心を最も端的にあらわしたのが、アーリヤ民 族による世界支配の完成と千年王国の実現をめざしたヒトラーであった。

### ヒトラーの才能に注目した、ひとりの魔術師

ヒトラーは、一九二三年にミュンヘン一揆を組織したときは、愛国心あふれる貧乏な画家にすぎなかった。

ところが、彼がこの事件で逮捕され、ランズベルクの刑務所に服役しているとき、ひと りの魔術師が彼の才能に注目して近づいた。

そして彼は、失意のヒトラーにフリーメーソンとバラ十字会に伝わる秘密の知識を伝授 し、刑務所を出たあと、ヨーロッパの総統として世界帝国の完成をめざすよう導いたのだ。 その魔術師の名は、カール・ハウスホッファー。 彼は、第一次大戦前のドイツで若くして将軍になると、フリーメーソン結社ドイツ支部の指導者となり、トゥーレ思想を鼓吹してアーリヤ民族の世界支配を実現しようとした。その当時ヨーロッパの学界で最高のインド学者として尊敬されていたマック・スミュラーー博士の影響下にあったハウスホッファーは、インドが生んだ世界最大の叙事詩『マハーバーラタ』の中で活躍するクル族の英雄たちが、インド・ヨーロッパ語族のもとになったアーリヤ人であると思いこんでいた。

そのクル族がかつて世界を支配した時代に駆使していた高度な文明の遺産を手に入れれば、ドイツは再びヨーロッパ・アーリヤ民族のリーダーとして世界支配を実現することが可能になる、という考えを彼はもつようになったのだ。

失われたクル文明の遺産は、『マハーバーラタ』に記された大異変の時代に、北極地方にあったトゥーレ大陸から別の場所に移され、今もどこかに隠されている、と彼は思った。 そのトゥーレは、北欧に伝わる神々の物語『エッダ』の中に登場するオーディンの都、アースガルズがあったところだ。

もしもドイツ人がこのアースガルズの神々の地下宮殿を見つけだすことに成功すれば、 ドイツの指導者は神々の遺産を再び手にして世界にはばたけるはずだった。

### オカルティスト団体"アーネンエルベ"の研究目的とは?

ハウスホッファーの野望は、第一次大戦におけるドイツ帝国の敗北とともに消え去ると ころだった。が、彼はミュンヘン一揆の指導者となったヒトラーに並々ならぬ才能をかぎ つけ、ヒトラーを自分の後継者にしようと決めたのだ。

ヒトラーは、ランズベルクの刑務所から解放されると、ただちにハウスホッファーの指導を受けて、アーネンエルベという秘密組織をつくった。

その正式な名称をドイッチェス・アーネン・エルベと称するこの組織は、「ドイツの太古 の遺産」を継承することを目的としたオカルティストたちの研究団体だった。

ハウスホッファーとヒトラーがめざした「太古の遺産」とは、いうまでもなく、大異変前にアースガルズの神々とアーリヤの英雄たちが自在に駆使していた高度な文明の利器だった。

ミュラーによれば、古代インドの神々はチベット・ヒマラヤ山脈のかなたにある神々の 都シャンバラから世界を治めたことになっていた。

シャンバラは、異変前のユーラシア大陸に巨大な内海を形づくっていたゴビ海の中央島にあった太古の輝かしい都だ。

一九二〇年代にアメリカのレーリッヒやスウェーデンの **O・**スタインが、ゴビ砂漠の手前にあるシルクロードと中央アジア、チベットを探検したのは、アーリヤ学を唱えたミュラーの教えに負うところが大きかった。

### ナチの科学者を驚愕させたラマ教寺院の文献

一九二六年に始まるナチのシャンバラ探検隊は、一九三六年になると毎年のように定期 的に世界の各地に派遣された。

ヒトラーの指導のもと、親衛隊長ヒムラーの責任において派遣されたアーネンエルベの 科学者たちは、イタリアやスペイン、トルコばかりでなく、チベットやブラジルの彼方ま で調査に出かけた。

それらの探検隊のうち、ブラジルに派遣されたグループは、北東マットグロッソのロンカドル高地で無数の地下道からなる迷宮を調査した。

また、この地からパラグァイ、ボリビア、アルゼンチンへと向かった分遣隊は、チリで別のトンネル網を発見した。このときの調査に加わった $V \cdot M$ という隊員は、のちにペルーからエクアドルに向かい、クエンカの近くで巨大な地下都市を発見している。

こうして世界の各地から続々ともたらされ始めた情報と資料は、ナチの記録保管所に集められ、別の科学者たちによって分析されていった。

その結果、ヒトラーとナチの幹部が手にしたものは、まさにシャンバラの驚異としか言いようのないものだった!ナチの科学者は、次のような記録の一部を手に入れた。

- ●ビシュバカルマとチャーヤーパルシャ、マヌとマヤ、ならびにその他の建造者を見習 うこと。これは各種の航空機の製造を可能にするであろう。
- ●『バーヤバーハラカラナ』に示したように、ヤーサー、ビヤーサー、プラヤーサの力を大気圏の第八層で用いよ。これは太陽光線の闇の部分を機体に引きよせ、敵の視界からヴィマナを隠すために使うことができる。
- 『シャクティータントラ』に従えば、ロイネー光線を投射することにより、ヴィマナ の前方にある物体を目に見えるものとすることができる。
- ●ダンダバクトラをはじめ、大気の他の七つの力を引きつけ、太陽光線を照射したうえでヴィマナの中心に送り、断続器を作動させよ。これによりヴィマナは蛇のごとくジグザグ飛行するであろう。

はたしてこれらの記述は何を意味しているのだろうか。"ヴィマナ"とは何なのか。そして、この情報はどこから得られたのだろうか?

ここに記されたものは、明らかに、それまでナチの科学者たちが全く知らなかった新型の航空機だった。この文書は"ヴィマナ"と呼ばれる未知の航空機の性能と操作法について書かれたものらしかった。チベットのラマ教寺院から発見されたこの文書は、学識のある高僧にしか読めない文字で書かれていた。

### "ヴィマナ"建造に向け動きだしたドイツの作戦計画

ヒトラーは、この報告を受けるとただちにナチの科学者を招集し、全力をあげて"ヴィマナ" の秘密を解明するよう指示した。この文書に記された意味不明な語句を解読できそうなチ

ベットの高僧が次々と首都ベルリンに招かれた。

博学なラマ僧とドイツ最高の言語学者、物理学者、航空技術者が何度も極秘のうちに会合を重ね、不明な語句の意味をひとつずつ明らかにしていく過程ではっきりしてきたことは、この"ヴィマナ"が未知のエネルギーを用いて大気圏の内外を自由に飛行できる超速の航空機であるということだった。ナチの科学者が手にした文書は、チベットに古くから伝わるタントラ関係の写本で、インドの叙事詩『マハーバーラタ』に記された戦争と異変で滅び去ったといわれるクル族の高度な文明の遺産だった。

一九三九年までに多くのインド・チベット資料を手に入れたナチのアーネンエルベが その後ヒトラーの作戦計画に合わせて"ヴィマナ"の建造に取り組んだことはいうまでも ない。

彼らの得た文献には"ヴィマナの建造法が具体的に記されていた。その基本構造は、 車輪(回転ギヤ)のついた床の中心に空洞軸(磁極)と機械室をすえ、上部を丸天井でお おった円盤であった。

フォン・ブラウンをはじめとするナチの科学者たちは、この"円盤"をつくるに先立って、ロケットやミサイルの実験をしなければならなかった。また、レーダーの開発を急がなければならなかった。そして、アメリカのルーズベルトがオッペンハイマーやアインシュタインらに極秘に進めさせていた"マンハッタン計画"と呼ばれる核兵器製造計画に対抗して、早急に原水爆の開発を進める必要があった。

しかし、これらすべての開発計画を完壁に進めるためには、さらに多くの秘密情報が必要だった。彼らが求めた技術情報は、インド・チベット資料に記された「神々の地下の館」にあるはずだった。

### ヒトラーが夢想した千年王国の鍵は南米地下都市に

アーネンエルベの科学者たちは、その当時アメリカやイギリスの情報部がひそかに調査 していたヒマラヤ山脈と南米の地下都市に注目した。

彼らは、イギリスの探検家フォーセット大佐が向かったアマゾンの黄金都市の所在に大きな関心をはらっただけでなく、『失われたムー大陸』の著者として一躍有名になったチャーチワードの秘密の古地図を手に入れたヒマラヤ山脈の洞窟にも注意をおこたらなかった。ロシヤの探検家オセンドウスキーの報告書『神・人・野獣』(一九二五年)によれば、ヒマラヤ山中にある場所には、シャンバラと呼ばれる地底王国への入り口があり、その都は地価のトンネルでつながっているはずだった。

ヒットラーとナチの幹部は地球のどこかにあるシャンバラの都を見つけだすことができればそこに今も手つかずに眠っている太古の神々の高度な文明の遺産を受け継ぐことが出来ると考えた。

アーネンエルべの"空飛ぶ円盤<sup>\*</sup>開発計画の中で南米の地下都市が占める位置は格別だった。 そこにはひょっとしたら、地下世界シャンバラへと至る別の入口があるだけでなく、 アトラテイス・ムー文明の遺産ともいうべき紀元前の神々の遺産、ヴィマナが無傷の 状態で隠されている可能性があった。

ヒトラーは考えた一もしも南米の地下都市に太古の神々の乗りものが今も残っているなら、それをすみやかに手に入れよう。そして、その地下都市に親衛隊の若いエリートたちを移住させ、黙示録に預言された最終戦争を生きのびて、アーリヤ民族のゆるぎない世界帝国をつくろう、と。

ヒットラーが夢想した千年王国の王は、地球の上空にある宇宙空間からこの地上のすべて を支配することになっていた。その王とは、もちろん、よみがえったアーリヤ民族の王、 ヒトラー自身にほかならなかった。

彼は、みずからの壮大な計画を実現するため、実際に南米各地にナチス・ドイツの若い エリートたちを派遣した。そして、太古の神々の遺産が隠されている地下都市を発見した あかつきには、その地下都市を"エスタンジア"と名づけ、アーネンエルベの精鋭をそこ に結集して、最終戦争の勝利者となるべきラスト・バタリオン、つまり最後の部隊の戦士 として鍛えなおすことになっていた。

ナチス・ドイツの幹部たちが極秘のうちに南米につくろうとしたラスト・バタリオンの ための秘密の地下基地エスタンジアは、当初、ペルーとチリの国境に近いアリカのあ たりにあるとみられた地下都市の内部に設けられるはずだった。

しかし、その地下都市は、ナチス・ドイツの親衛隊 SS のメンバーが必死で捜索したにもかかわらず、なかなか見つからなかった。

### 消えたフォーセット大佐のゆくえに興味を示した科学者た

### 5

そんな時に発表されたのが、一九二五年にブラジル・マットグロッソ州の奥地にある黄金都市 "マノア"へ向かって消息を絶ったイギリスの探検家フォーセット大佐の手記と、彼の息子ブライアンがまとめたフォーセット探検隊のゆくえに関する情報である。ブライアン・フォーセットが、アマゾンのジャングルに消え去った父親や兄たちのゆくえを求めて、マットグロッソの州都クヤバから旅立った記録の中には、次の一節があった。道もない奥地へ動物に荷をつけてはいっていくのは困難だった。川や沼がいたるところにあって、飼葉になる草は少ないし、その上に吸血コウモリに絶えず襲われて、動物はまもなく全滅するのを免れなかった。…… [略]・

彼らがどこへ行ったかはようやく最近になって私にわかった。それはだいたい、北 へ向かってだった------[略]-----

一行は沼地や灌木地帯を通っていったが、ある日のこと、所々に森林地帯がある緑の平原の向こうに、とつぜん切り立った連山が現れた。……〔略〕…… 山の斜面は絶壁になって切り立っていた。彼らはどこか登れる場所はないかと一日 じゅう捜して、大きな岩や割れ目を越えて歩きつづけた。ガラガラヘビがいたるところにいた。…… [略] …

登るのがたいへんで、まわりの平原を見おろす高い崖の上に出るまでに三時間かかった。しかしそこから山の尾根までの道は平らで、一同はやがて肩を並べて尾根に立ち、そこから向こうのながめに息を呑んでいた。

山の麓から四マイルばかりのところに、巨大な都市が横たわっていた。…… [略] … 彼らが草木におおわれた城壁に近づくと、土人たちが出迎えて、やはりそこにはだれも住んでいないと報告したので、一同はいくらか安心して進み、巨大な石材でできた三つのアーチのある門を潜った。この宏壮な建築は一それはペルーのサクサワマンで今日でも見られるものに似ていたに違いないが一、一同にひじょうな印象を与えた。だれも一言も口がきけず、まっ黒になった石の下を、泥棒ネコのように忍び足で通り過ぎた。

まん中のアーチのずっと上のほうには、風雨にさらされて古びた石になにかの文字が深く刻みこまれていた。……〔略〕…:

三つのアーチはまだだいたいそのままの形で残っていたが、巨大な支柱のうちには その礎の上でいくぶんねじ曲げられているのがあった。一同はそこを過ぎ去って、かつて は広い通りだったらしいところを進んでいったが、今はそこには一面に壊れた石の柱や石 の角材が散らばり、その上を熱帯の寄生植物がおおっていた。通りの両側にしつくいは二 階建ての家が続いていた。これは漆喰を使わずに驚くほど正確に石材と石材を継ぎ合わせ てできており、上のほうに向かってだんだん狭くなっていく入り口には、一同にとって悪 魔と思われるような複雑な彫刻がしてあった。[略]

広場と本通りの向こうは一面完全な廃嘘になっていて、土の山の下に埋まっているところもあった。しかしその山には一本の草もはえていなかった。地面が方々で割れていて……そのなかに岩を落としてみても、底を打つ音はしなかった。この都市がなんでこのようになったかは明らかだった……ここに地震が起こったのだ。建物がまるごと呑まれても、あとに彫刻した石材が少しでも残っていれば、それでそこに建物が建っていたことがわずかにわかるのだった。この壮麗な都市を破壊し、おそらく一つあたり五十トンもある石柱や角材を倒し、一千年にわたる丹念な労働の成果をほんの数分間かで廃墟と化した大異変がどんなものだったかは、容易に想像することができた。(吉田健一訳)

大異変で滅び去った南米の古代都市。それは、フォーセットにとって、「一日と悲惨な一 夜のうちに消え去った」といわれる太古アトランティス文明の偉大な植民都市、"黄金のマ ノア"そのものだった。

この都市が、アンデスの標高四〇〇〇メートルの高地にあるボリビアのティアワナコ遺跡と同じように、異変によって滅亡した古代の廃墟であることを右の報告で知ったナチの科学者たちは、異変前の神々の都がいずれも地下トンネルで結ばれていたといわれていることを思い出し、"マノア"もまた、太古の神々がつくった地下都市ではないかと考えた。

そして、もしかしたら、フォーセットがめざしたアマゾンの黄金都市こそ、総統が命じた秘密の地底王国シャンバラにつながる地下都市ではないかと思ったのだ。

### 古地図で明かされた古代アマゾン海を囲む七つの都市

アーネンエルベの幹部たちは、当時すでに欧米の秘密結社でよく知られていた一枚の古地図のほかに、イギリスのチャーチワードがヒマラヤ山中のある寺院から新たに入手した別の古地図のことも知っていた。

そこで彼らは、これら二枚の古地図をつき合わせ、全力をあげて古代南アメリカの地下都市の位置を割りだそうとした。

チャーチワードが『ムー大陸の子孫たち』の中で発表した古地図には、現在の地図と異なった異変前のアメリカ大陸が描かれていた。

その地図には、南米のアマゾン河がかつてアマゾン海と呼ばれる美しい内海を形づくっていた頃、この巨大なアマゾン海の周囲に、カラ族と呼ばれる未知の種族が"七つの都市"を築いたことが記されていた。

チャーチワードは、そのアマゾン海についてこう語っている。

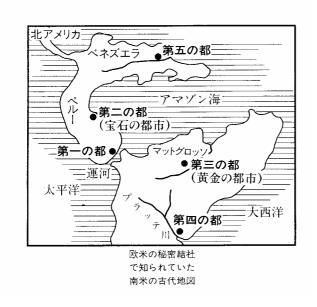
アマゾン海は美しい海であった。太平洋の荒波を乗り越えてきた船乗りたちにとって、この波おだやかな内海は、楽園のようにも感じられたことだろう。

熱帯の空の下、水の色は手を入れれば染まりそうに青く、白い波の砕ける海岸に朝日や夕日がさすと、濡れた岩の表面が水晶や石英のために虹色に輝くのだった。緑の熱帯樹にふちどられた岸辺には、壮麗な石造りの都市が色さまざまな石で築かれた神殿や宮殿の影を水に映し、それは旅人たちに遠く離れた母なる国ムーを懐しく思い起こさせた。

今日の南米大陸の地形を見ると、アマゾン海の輪郭をおおよそ想像することができる。北岸は現在のベネズエラの高地の裾あたりで、この地方には今でも美しい石英の層を見出すことができる。南岸はパン・アルト山脈の麓あたり。東岸はパン・アルト山脈につらなる支脈の山地。そして西岸はアンデスの東麓であった。

太平洋を越えてきた船が、広々とした幅のある水路に入ると、やがて左手、つまり、 北の方に立派な都市が見えてくる。それがなんと呼ばれたか、今では知るすべもない が、チベットの古地図によれば、その位置は現在のティアワナコの遺跡の位置とぴっ たり符合する。

この地図には、そのほかにも四つの都市が書きこまれてある。その一つは、アマゾ



#### 欧米の秘密結社

で知られていた

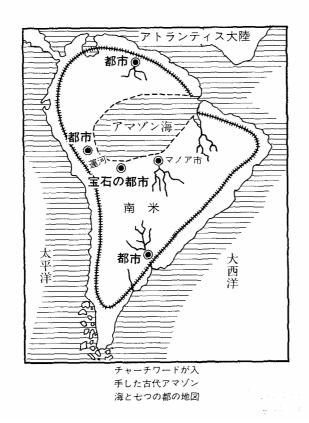
#### 南米の古代地図

ン海の南西岸にあって、「宝石の都市」の名がつけられている。南岸のちょうど半ばあ たりから、ちょっと内陸に入ったところ、アマゾン海に注ぐ川に沿って、もう一つの 都市があり、「黄金の都市」と名付けられている。疑いもなく、伝説に伝わる黄金都市マ ノアである。

さらにこの南岸からずっと南へ下って、大西洋岸に出ようとするあたり、大西洋に注ぐ河に沿って一つの都市がある。現在のアルゼンチン、ラプラタ河のあたりである。もう一つはずっと北にあって、カリブ海の東端、現在のベネズエラ、オリノコ河の河口から少し入ったあたりである。これら五っの都市が、アマゾン海周辺に栄えたカラ族によって建設されたことは明らかである。

母なる国ムー大陸には、七つの大都市があったという。プエブロ・インディアンの間にも、「シボラの七都市」の伝説がある。当時、ムー大陸の植民地は、母国になぞらえる風習があった。カラ族もこの南米大陸に、七つの大都市をつくるつもりだったのかもしれない。(小泉源太郎訳)

チャーチワードの古地図には、南米のカラ帝国にあった「七つの都市」のうち、五つし



チャーチワードが入 手した古代アマゾン 海と七つの都の地図

か記されていない。このため、古代アマゾン海に沿って建設されたカラ族の都の数は、実際には五つしかなかったとみなされがちである。

が、ヨーロッパの秘密結社に伝わるもうひとつの古地図には、「宝石の都」と呼ばれた別の都が「第二の都市」として記されている。

そして、これら二つの古地図に見える六つの都市のほかに、ブラジル東部のピアウイ州 にあるセテ・シダデス、つまりその名も「七つの都市」として古くから現地のインディオ に伝承されてきた巨大な都市の廃塩を「第七の都市」としてつけ加えれば、太古の南アメリカには、カラ族の七つの都市が実在したとみられるのである。

第二次大戦前にヒトラーやルーズベルトが極秘のうちに調査させたこれらの都市は、異変前に高度な文明を誇った太古の神々のすみかだった。

そして、冒頭でふれたロバート・ワッツが私にアンデスの地下都市に関する情報を求めてきた背景には、以上のような経過があったのだ。

## 第四の扉

# 謎の黄金板に残された太古日本人

## の痕跡

### 象

日本と南米を結ぶ点と線。線はやがて面と なる。太古、我らが狙先の神代文字は世界共通だった!? 解読の時は近づいている!?

### 七つの都の建設者はわれわれ日本人の祖先だっ

### to?

一九七○年代に私自身が二つの古地図にもとづいて割りだした南米カラ帝国の

"七つの都 " の位置は、おおよそ次のようなものだった。

第一の都 ボリビアのティアワナコ遺跡

第二の都 エクアドルとペルーの国境付近にある未知の遺跡

第三の都 ブラジル・マットグロッソ州の南部にある未知の遺跡

第四の都 ブラジルのサンタカタリナ州とパラナ州の境界にある未知の遺跡

第五の都 ブラジルとベネズエラの国境地帯にある未知の遺跡

第六の都 ボリビアのラパスの東方、第一の都と第三の都のほぽ中間にある未知の遺跡

第七の都 ブラジルのピアウイ州にあるセテ・シダデス遺跡

これらの七つの都のうち、チャーチワードがカラ族の都として具体的に明らかにしたのは、 ボリビアのティアワナコだけだった。

しかし、第七の都セテ・シダデスを除くその他の五つの都市については、イギリスのフォーセット大佐とフランスのマルセル・オメ教授が、すでにかなり精度の高い情報を得ている。一九二五年にフォーセットがめざしたブラジル・マットグロッソ州の失われた都市は、二つの古地図にそれぞれ「マノア」「黄金の都」と記されたカラ族の第三の都をさしている。

また、一九五〇年にオメ教授がめざしたブラジルとベネズエラの国境にある未知の遺跡は、カラ族の第五の都に相当する。

マルセル・オメは、フォーセットが捜し求めたカラ帝国第三の都のマノアを第五の都の 位置に求めるというかんちがいをした。が、ブラジル北部の密林地帯に人知れず埋もれて いた古代カラ族の聖地、ペドラ・ピンタダ遺跡を調査して、これを欧米の知識人に紹介し た功績は大きい。

私は、オメ教授の探検報告書に記されたペドラ・ピンタダの岩絵のひとつを見たとき、 そこに描かれた文字の形が、日本の伊勢神宮に古くから伝わる神代文字のひとつと全く同 じ形をしているのにびっくりした。

そのとき、私はペドラ・ピンタダの岩絵に何が書かれているかわからなかった。が、この時から、私は、紀元前のアメリカ大陸に栄えた古代文明と、異変によって滅び去ったカラ帝国の七つの都に興味をもち、機会があれば、フォーセットやオメのあとを追って、彼らが発見できなかった伝説の都を見つけたいと思うようになったのである。

私は考えた「その昔、南米のアマゾン海のほとりに栄えたカラ帝国の七つの都の建 設者は、ひょっとしたら、われわれ日本人の祖先だったのではないか」と。

これまで欧米の探検家たちは、古代の南アメリカがアトランティスの植民地だったと考え、そこに築かれた七つの都は、大異変で滅び去ったアトランティス人が残したものだと思いこんできた。

が、もしもアトランティスそのものがチャーチワードのいうようにムー王国の植民地で あり、古代の南アメリカに伝説の七つの都を築いたカラ族の文字が、日本に伝わる神代文 字で読めるなら、古代南アメリカ文明の建設者は、太古の日本人だったと考えられる。

### 南米各地の古代文字碑文が日本の古代文字で読めた!

私はさっそく、南米大陸の各地から報告され始めた文字資料を手あたり次第に集め、それらの文字と日本に伝わる神代文字とを見比べて、両者のあいだに何かつながりはないか調べてみた。すると……。

その結果は、驚くべきものだった。まず、図1を見てほしい。

これは、スイスの作家デニケンがエクアドルの地下都市から見つかったものとして紹介している石板に刻まれた文字だ。

その文字は、デニケンによれば宇宙人が書き残した未知の文字だといわれている。

ところが、実はこれと同じ形をした文字が古くから日本にある。

その文字はトヨクニ文字と呼ばれ、日本の古代文字研究者の間で、カタカナのもとになった文字ではないかとみられている神代文字だ。

図の左右の文字を比べてみると、エクアドルの石板には、「ニヘナムタテマツル」と書いてあることが読みとれる。

「ニヘ」とは、古代の日本人が神々に捧げた身がわりの動物をさしている。

そして石板の文字の上に刻まれた神らしき人物とその下に描かれた三匹の動物の絵は、 これらの動物が、まさしく神に対するいけにえとして神に捧げられたことを示している。 最近になって日本の各地から見つかり始めたトヨクニ文字碑文と同じ文字を使った石板 が、太平洋のはるかかなたにあるエクアドルの地下都市からも見つかったことは意外だっ た。が、南米における日本の神代文字碑文の存在はこれにとどまらない。

図 2 は、さきに見たカラ帝国第七の都の跡とみられるブラジル・ピアウイ州のセテ・シ ダデス遺跡で見つかった碑文のひとつだ。

また、図3は、一九三〇年代にアンデス山中のチチカカ湖畔の洞窟から見つかった遺物 の足元に刻まれた文字である。

図2の文字は、日本の北海道各地から明治初年に報告され始めた「アイヌ文字」にそっくりだ。図3の文字は、日本の神代文字の宝庫といわれている皇祖皇太神宮(茨城県北茨城市磯原)の古い記録に載っている天越根文字あめのこしねもじそのものだ。

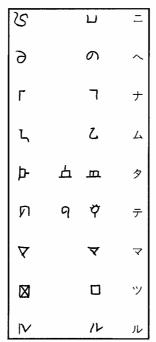
南米各地の古代文字碑文が、日本に伝わる神代文字で読めるとは、私自身、予想もしな



〈図 2 〉 ブラジル・ピアウイ州の セテ・シダデスで見つかった碑文

<b> 1 1 1 1 1 1 1 1 1 </b>
圣两个玉币
四夫可叶重
个

〈図 3〉 遺物に刻まれていた文字 (山根キク著『キリストは日本で死 んでいる』たま出版より)



〈図!〉石板の文字 (左)は、トヨク二文 字(右)で解読できる

く図1〉石板の文字

(左)は、トヨクニ文

字(右)で解読できる

<図 2>ブラジル・ピアウイ州の

セテ・シダデスで見つかった碑文

く図3〉遺物に刻まれていた文字

(山根キク著『キリストは日本で死

んでいる』たま出版より)

かった。それらの碑文が日本の文字で書かれ、しかも古代の日本語で意味をなすとは思いもよらなかった。

ところが、である。それよりもっと驚いたのは、図1の石板が出土した場所に注目した時である。そのエクアドルの地下都市は、ヨーロッパの秘密結社が長いあいだ捜し求めてきた南米カラ帝国の「第二の都」「宝石の都市」そのものではないか!

この地下都市は、あのヒトラーがつくった秘密組織、のちにヒムラーの率いるナチの親 衛隊 SS の中核となったアーネンエルベのメンバーがひそかに調査していたカラ族の黄金 都市であることを知ったとき、私は背筋が寒くなった。

ここには何かがある。欧米の指導部が戦前から異常なほどの関心を注いで捜し求めてき たアメリカ大陸の地下都市には、きっとわれわれの知らない重大な秘密が隠されているに ちがいないのだ。

探検家モーリスがインディオの聖地で見たものは……

一九六○年代のなかばに見つかったエクアドルの地下都市は、まちがいなく、私がその 位置を復元したカラ帝国の「七つの都市」のひとつだった。

一九六五年にハンガリー生まれの探検家ファン・モーリスによって確認され、一九七二年にスイスの作家デニケンの著作で広く世に知られるようになったこの地下都市は、エクアドル東部の密林地帯にあって、古くからインディオの間で神々の"光り物"が飛びだす「ロス・タョス(太陽鳥洞窟)」と呼ばれていた。

そのインディオの聖地に足を踏み入れたファン・モーリスは、はたしてここで何を見つけたのだろうか。

デニケンは、その著『神々の黄金』の中でこう書いている。

このことはわたしにとって今世紀最大とも言えるまったく信じられない、けっして ありそうもない実話である。

わたしがこの信じられないものをこの目で見、写真にとらなかったならば、この実話は SF めいたものとされたであろう。わたしが目撃したものは夢でも空想でもなく、現実である。

南米大陸の地下深く、いつかだれかによってつくられた数千キロメートルの長さを もつ巨大なトンネル網がある。ペルーとエクアドルではそのうちの数百キロメートル が測量された。これは小さな端緒であり、世間はこのことについて何も知らなかった。 一九六九年七月二一日、アルゼンチン人のファン・モーリスは、グアヤキルの公証 人グスタヴォ・ファルコー二博士に、多くの証人の署名がのった証明文書をあずけた。 それはモーリスを、エクアドル国政府ならびに後世の人びとに対し、あのトンネル網 の発見者であることを保証する文書であった。わたしはスペイン語で書かれたこの文 書を国連の翻訳官に通訳してもらった。そのもっとも重要な部分が不可思議なわたし の記録の冒頭を飾ることになる。

ファン・モーリス。ハンガリー生まれ。居住によりアルゼンチン国籍を獲得。パスポート番号四三六一六八五…

私モーリスはエクアドル共和国国境内の東部地区モロナ・サンチャゴ地方で人類にとって巨大な文化的歴史的価値のある貴重な諸対象を発見した。これらはとくに金属板からできていた。これらは従来予想もされず、証明されてもいない失われた文明の歴史的集大成をなすものと予想される。これらは、種々の洞窟のなかにあるが、いずれも各種各様の形をとっている。私は恵まれた状態のもとにその発見をなしとげた。私はエクアドル諸民族の民俗、人間性、言語を研究する学者の特質を生かして探究した。

私が発見した諸対象は、次の性質を示している。

- 一、各種の大きさと色彩をもつ石および金属製品。
- 二、記号や文字が描かれている金属板(葉)。これらは、人類史の集大成をなすばかりか、地上における人類の由来、ならびに失われた文明に関する知識を集めている本格的金属図書館にかかわりがある。

(金森誠也訳)

### 金属図書館をまのあたりにした作家デニケンの驚きと興奮

ペルーとの国境に近いエクアドルのモロナ・サンチャゴ地方といえば、これまで文明人を寄せつけない凶暴な首狩り族が住むところとして長いあいだ恐れられていた土地だ。 今は、軍のヘリコプター基地が設けられている高地からサンアントニオへ向かう途中にあるロス・タヨスの地下都市で見つかったものは、ファン・モーリスの言葉によれば、「各種の石と金属製品」「文字が刻まれた金属板」とあるだけで、何のことかわからない。が、一九七二年にファン・モーリスの案内でこの地下都市に入ったデニケンは、そこに何があったのか、次のように報告している。

洞窟のなかに入りこむ前に、われわれは、深い睡眠をとった。早朝の空に、酷暑の 一日の到来が告示されたとき、わが生涯最大の冒険が始まった。

一歩一歩踏みしめてゆくうちに、突然、入口からさしこむ日光がまっくらな闇へと 変化した。

われわれの頭上を鳥が過ぎ去っていった。われわれは風の息吹を感じて身をすくめた。ヘルメットにつけた投光器と懐中電灯の光が輝くと、われわれの眼前には坑道の 入口がぽっかり大きな口をあけていた。

八○メートルの深さまで達するザイルを用いて、われわれは最初の露台にすべり降りた。この露台から、二度にわたりそれぞれ八○メートルも深いところに下降した。かくして、異様な未知の種族がつくった何千年もの歴史をもつ人工地下街への行進がはじまった。

洞窟のなかの通路はいずれもタテ、ヨコ直角であり、壁面は平滑で、まるでみがきをかけたようであった。いっぽう天井もエナメルのようにすべすべしていた。こうした通路はもちろん天然自然に発生したのではない現代の防空壕のような形をしている……「略」……

われわれは、まるでジャンボ・ジェット機の格納庫のような大広間の入口の前に来た。ここは配給所、物資集積場だったにちがいないと私は考えた。ここに種々の方向に向かう坑道の出口ないし入口がある。どの方向に向かっているかたしかめようとしたが羅針儀がいうことをきかなくなっていた。……〔略〕・

側坑の入口の地面に、まるで解剖学者が学生たちに教えるべく用意したかのように、 きわめて整然と一体の骸骨がおいてあった。だが、この骸骨、まるで噴霧器をつかっ てまぶしたように金粉だらけになっていた。投光器で照らしだすと、骨がいずれも純 金のように輝いた。…… [略] …・

われわれは呆然として立ちすくんだ。巨大な広間のただなかで棒立ちになったままであった。…… [略] …・

第七の通路が通じているこの名無しの広間は、不安にさせるほど広く、沈んだ美しさと、けだかい釣り合いがあった。輪郭は一一〇×一三〇メートルということであった。これではまるで、テオティワカンの太陽のピラミッドの大きさだ、と私は感じた。しかも両者とも建造者つまり卓越した技術者の名はわかっていない。

これはテーブルだろうか?

広間の中央にテーブルがある。

なぜなら、これにそって七脚の椅子がおいてあるからだ。…… [略] …… 椅子の背後にはもろもろの動物が立っている。爬虫類、象、獅子、ワニ、ジャガー、ラクダ、熊、サル、バイソン、狼、地をはうトカゲ、カタツムリ、ザリガニ。…… [略]

動物園に向かいあい、会議テーブルの後ろの左側に金属図書室があった。一部は何 ミリメートルという薄い金属葉といってもよいこれらの金属板の大部分は、タテ九六 センチ、ヨコ四八センチという寸法である。

長いあいだ批判的に観察したあとでも、このように薄手でしかも大きな金属片を維持させえたような硬度をもつ物質がなんであるか私にはわからなかった。これらの金属板は、いずれもまるで巨大な書物の形に製本されたように、ならんで立っていた。どの板にも文字が書いてあり、はんこが押されている。これがまるで機械で作業したように一様なのだ。…… [略]・

金属板に書かれた文字は未知のものであるけれども、もし専門の学者が今後このまたとないものの存在を知ったとすれば、なんとしてもこれらの文字を他の文字と比較できる可能性の多いところから、比較的短期間に解読されることになろうと私は確信している。

この図書館をつくり、組織した者がだれであろうとも、その偉大なる知られざる者は、おのれと助手たちとともに、単に、金属葉をあのように多量に、「寸法通り」に製作する技術を制御していただけではない・・・・・・仕事は現にあるのだ!・・・・・・彼はさらに遠い将来の者たちに、重要なことを伝える文字をもわきまえていたのだ。この金属図書館がつくられたのは、それが時代を生きながらえ、永遠に読まれるようにするためであった・・・・・・。

現代人が、このように壮大な規模のもろもろの秘密を解明することに、心から関心をよせるかどうかはやがて判明するだろう。

たしかに美しいが、あまりにも疑問の多い世界秩序を頭からひっくりかえしてしま うような真相を明るみに出す基本文献の解読に、現代人は興味があるだろうか? (金森誠也訳)

少々長い引用になってしまったが、実際にその場へ行って、自分の目で見てきた者の話 に耳を傾けるのが一番だ。その時の驚きと興奮がストレートに伝わってくる。

### 地下都市で発見された黄金板の文字は宇宙人が残したもの?

デニケンが潜入したロス・タヨス地下都市は、黄金製品の宝庫だった。いつの時代に誰が残したかわからないそれらの品々は、まさしく「神々の黄金」といえるものだった。 そこに残された奇妙な遺物は、第二次大戦前から、欧米の秘密結社員が必死に捜し求めてきたものだった。

ロス・タヨスの地下都市から見つかったものは、おそらく、第二次大戦前にフォーセットがめざしていたアトランティスの遺産か、チャーチワードが夢見ていたムー文明の遺産ではないかと思う。

私は、デニケンの報告を読んだとき、このロス・タヨス地下都市こそ、紀元前の大異変によって滅び去った南米カラ帝国の「黄金都市」そのものに違いないと思った。 デニケンは、さらにこう書いている。 今日では私は暗い洞窟から出てきた最大の黄金の宝は、南米の博物館では見受けられないことを知っている。これらの至宝は、巡礼が赴く教会である海抜二五〇〇メートルのエクアドルのクエンカにあるマリア・アウキシリアドーレという貧しい教会の裏庭のなかにおかれている。

カルロ・クレスピ神父は----その黄金の純粋な価値からしても----とても評価できないような貴重な品々を守護している。

彼は四十五年前からクエンカに住んでいる。彼はインディオの信頼できる友人とい う名声をえている。彼らは何十年も前から今日に至るまで、少しずつ、高価な金銀の 製品をかくし場所からはこび出しては神父に贈っている。

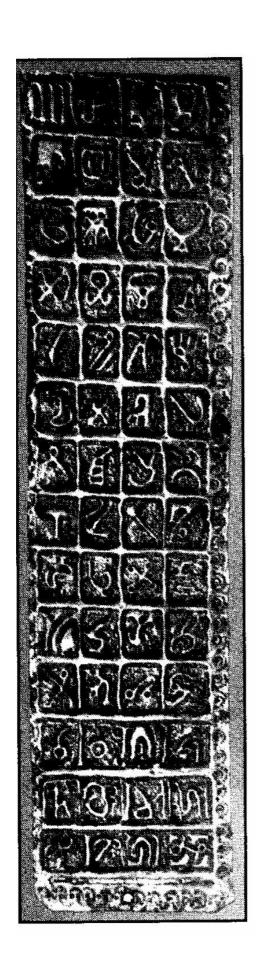
クレスピ神父の黄金の宝について報道するのは私がはじめてである。それにこれら の宝は写真にとられたことがこれまでなかった。

神父が、私に彼の手足になっているインディオ二人を都合してくれたのはうれしかった。敬虔なこの人のそばではのんびり呼吸もできない。彼は純粋に童貞を守り、おのれの罪深い肉体にいささかの快楽をもあたえようとはしない。それに彼の吐息も、彼にあまりにも接近しようとする人びとから確実に彼を守ってくれる。

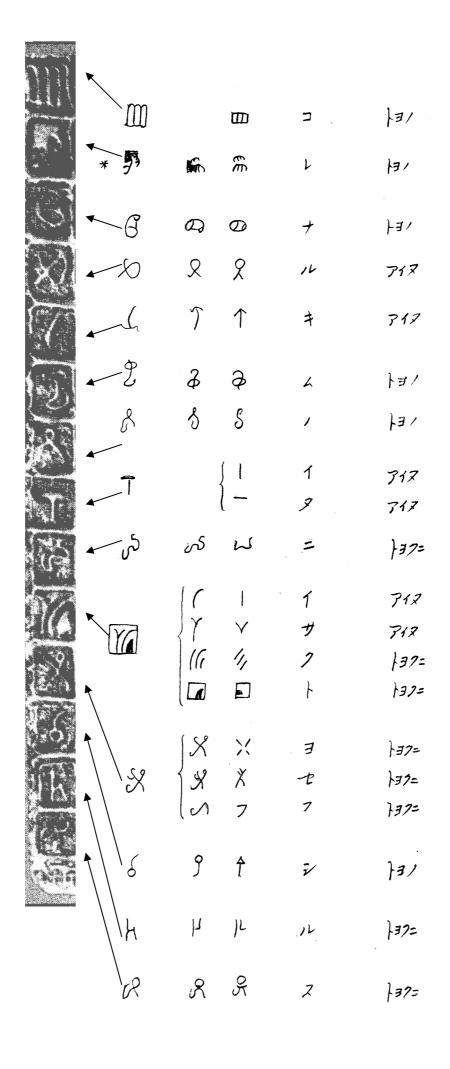
インディオたちは黄金の板や棒やかたまりをマリア教会の裏庭から、わたしの カメラの前まではこんでくれた。そこでとうとう私は、あのトンネル網のなかでも見 うけられたような黄金の山なす収集の写真をとることができた。

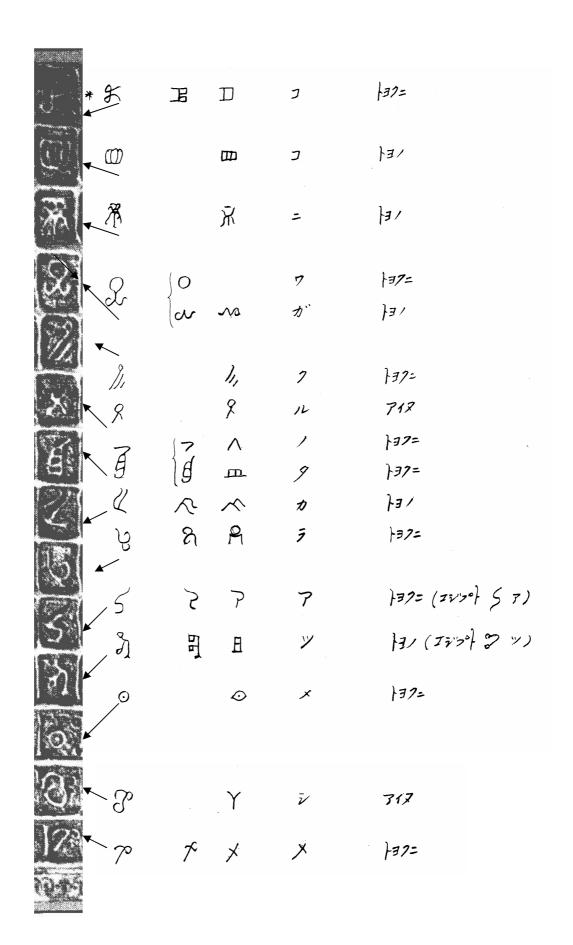
そうしたことからしても、今後とも、金について、それも、純金について私が述べたときは、あらゆる場合において、それを言葉通りにとっていただきたい。私のカメラを通じて、はじめて驚駭し、予想通り、嘘ではないかと疑う世間の人びとのまえに展開されるのはまさしく純金である。

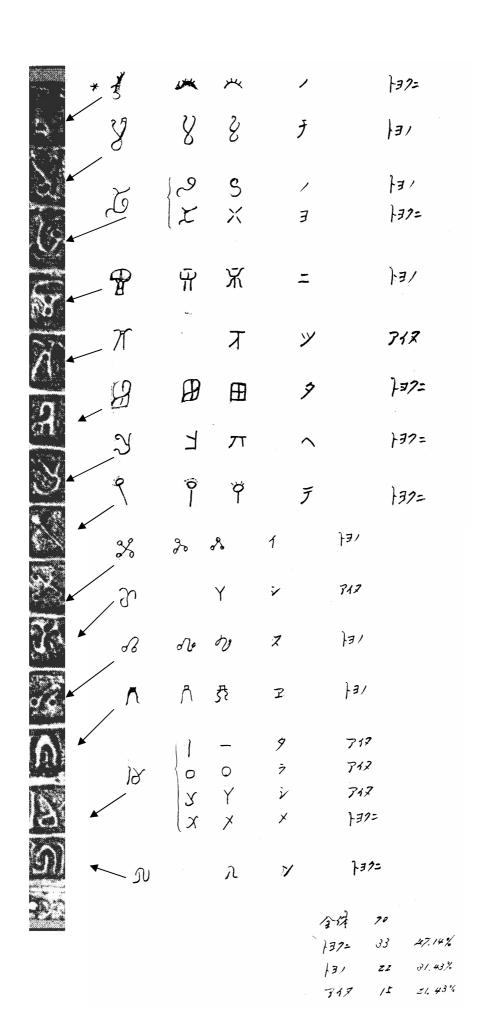
高さ五二センチ、幅一四センチ、厚さ四センチのきらびやかな黄金の柱がある(次 頁)。五十六個の正方形には、それぞれ五十六の文字が「印刷してある」。地下大広間の金 属図書館の本のなかに見うけられたのと、まったく同じ文字であることがわかった!



アンデスの黄金板に 刻まれた謎の碑文に は驚くべきメッセー ジが秘められていた (写真提供/南山宏)







# 夏54cm· あまなといい幅14cmの黄金の板に到まれた文

意味: これなる全の板に イサクとヨセフ記す ここにわかクルの宝 集めしめ のなの世に伝へて 石板を(雑)たらしめん ヤアウェ そわれるの神と 紫めよ

# 直径ZZcm。黄金制円盤、到引加份文文

この黄金の柱の製作者は五十六文字、あるいは文字にそれぞれ適応する象徴を解読するカギ(アルファベット)を熟知していたのだ。このことは従来、南米文化圏(インカ、マヤなど)では、アルファベットに似た文字がなかったと主張されてきただけに、ますます注目すべきことである。(金森誠也訳)

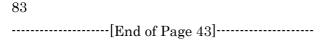
デニケンは、いきなり目の前に展開した世界に驚がくした。彼のように、これまでの知識やいわゆる常識といった概念をはるかに逸脱したものに取り囲まれたとしたら、誰しもそうだろう。自分の理解を越えたものに遭遇したとき、彼はこう考えた----これはこの世のものではない。きっと、いつの時代とも知れぬ太古の昔に、別の星から飛来した宇宙人がこの地下都市を造り、これらの遺物を残したのだ。だからこの膨大な黄金板に刻まれた文字は、宇宙人が残した宇宙文字に違いない、と。

デニケンの判断を笑える者はいない。この世のものとも思えないもの、理解の範囲をは るかに越えたものを見たとき、人はそう考えざるを得ないだろう。

宇宙人という発想が突飛だというなら、今の地球人が及ばない高度な文明をもっていて、 まるで別の星に住んでいたとしか考えられないような人たち、とでも表現したらいいのだ ろうか。とにかくデニケンをして宇宙人のしわざと思わせたような人たちの残したもので あったことは確かである。

しかし、宇宙人が残したものであると考えたとはいえ、彼も何とかその文字を読みたいと思った。そこでアメリカやヨーロッパの学者に写しを送って検討してもらった。その結果、これは二三〇〇年前のインドのブラーフミー文字とよく似ていることがわかった。この黄金板の文字は、もしかしたらブラーフミー文字で読めるかもしれない。欧米の学者はこう思って、アンデス黄金板の解読に取り組んだ。が、その文字の一部はたしかにブラーフミー文字で読めたものの、全体の意味をつかむことはできなかった。私がその黄金板の写真をはじめて目にしたのは一九七〇年代後半のことだった。高さ五二センチ、幅一四センチ、厚さ四センチの不思議な黄金板に書かれた文字を見たとき、私は雷に打たれたような衝撃を受けた。

その柱に刻まれた五六の文字。ファン・モーリスとデニケンを驚かせた未知の文字は、 私の見慣れた文字だった。その文字は、江戸時代に平田篤胤という学者が書いた『神字日



文伝』かむなひふみのつたえという本の付録に収められているものと同じ、日本の古代文字だったのである。私は自分の目を疑った。心臓が高鳴った。落ちつけ、落ちつけ、落ちついてこれを読むんだ。数千年の沈黙を破って、この文字が私に何かを語り始めようとしていた。 五六の文字を私は一つひとつなぞるようにして読み解いていった。一部にむずかしい字 はあったものの、全体としてスラスラと読めていった。私は自分のやっていることが信じられなかった。解読の結果、そこに現れたものは次のようなメッセージだった。

コレナルキンノイタニ

イサクトヨセフシルス

ココニワガクルノタカラアツメシメ

ノチノヨニツタヘテ

イシスヱタラシメム

ヤハウェヲワレラノカムイトアガメヨ

五六の文字が七一文字として読み解かれているのは、合体字になっている部分が数か所 あったためである。

もう意味はおわかりだろうか。これを現在の漢字仮名混じり文で表すと、次のようになる。

これなる金の板に

イサクとヨセフしるす

ここにわがクルの宝あつめしめ

のちの世に伝へて

いしすゑ(礎)たらしめむ

カムイ

ヤハウェをわれらの神とあがめよ

エクアドルの地下都市から出土したこの黄金板には、日本の古代文字で、

日本語で意味をなす、驚くべき文章が書かれていたのだ。

しかも古代の日本語で意味をなす、驚くべき文章が書かれていたのだ。

## 第五の扉

## 高度文明民族・クルの正体

### 散

黄金板に記された碑文の意味は? 『古事記』『日本書紀』『旧約聖書』『マハーバーラタ』を読め! 解る者には解る、クル族の悲劇

### 太古の祖先が後世に伝えようとした"クル の宝とは

これなる金の板にイサクとヨセフしるす(一行目)

ここにわがクルの宝あつめしめ(二行目)

のちの世に伝へていしすゑたらしめむ(三行目)

ヤハウェをわれらの神カムイとあがめよ(四行目)

エクアドルの地下都市から出土した謎の黄金板。現在、クエンカの聖母マリア教会に保管されている奇妙な黄金板に刻まれた"暗号"を日本の古代文字で読み解くと、右のような文が浮かびあがってきた。それは、ごらんのとおり、われわれ日本人が使っている言葉で十分に理解できる。

アンデスの黄金板に刻まれた文字が日本の古代文字で読め、しかも日本語として立派に 通用する1ということは、いったい何を意味しているのか。

それは、われわれ日本人の祖先がかつてクル族とよばれ、またカラ族とよばれて、南米 エクアドルの山中にロス・タヨスの地下都市を造ったことを意味しているのだろうか。 ここで明らかなことは、クエンカの黄金板を残した人物が、われわれと同じ日本語を使 っていた、ということだ。

この人物がはたしてロス・タヨス地下都市の建設者であったかどうかはわからない。が、彼らがロス・タヨスに"クルの宝"を隠し、後世のわれわれ日本人にその宝を伝えて、何かの役に立てたいと願っていたことは確かだ。

が、それでは、その"クルの宝"とは何なのか。クルの宝とは、一九六○年代に、ファン・モーリスがロス・タヨスで発見した大量の黄金製品と謎の金属文字板のことをさしているのか。

それとも、この地下都市に隠された何か別のもの、あるいは日本の古代文字で書かれた 金属板に記されている第三の特別な何かなのだろうか。 アンデス黄金板の解読結果は、私をはてしない迷宮探検への旅に駆りたてようとしていた。ここには、とんでもない落とし穴が待ち受けているのではないか……。

### 日本人とヘブライ人の祖先は同じクル族か

私は、はやる心をおさえながら、何度も何度も、自分の解読結果を確かめてみた。 もしも私の読み方が正しければ、アンデスの地下都市に莫大な黄金製品を隠したのはわれわれの祖先だということになる。そして、何千枚という大量の金属板に秘密の情報を刻みこんで、将来の役に立てようとした人物は、まちがいなく、クル族とよばれた太古の日本人を指導した王であり、彼らは途方もない秘密をわれわれに残した、ということになる。しかし、よく考えてみると、おかしいのではないか。この黄金板の第一行に書かれている作者の名が「イサク」と「ヨセフ」であるというのは。

「イサク」や「ヨセフ」は、日本人の名前ではない。旧約聖書に登場する古代へブライ人 の名前である。そのヘブライ人が、どうして日本語を話したり、日本の古代文字でこの碑 文を残さなければならないのか。

私はイサクとヨセフのことがどうしても気になった。彼らがヘブライ人であれば、第四 行目に登場する「ヤハウェ」を彼らの神として祀ったことはヘブライの伝統にかなってい る。

が、そのヘブライ人が日本の文字を使ったり、日本の言葉を話していたというのは、ど うみてもおかしい。

私は、自分の解読結果を疑った。そして再びあれこれ考えているうちに、ふとひらめく ものがあった。

そうだ!これはひょっとしたら、日本人の祖先とヘブライ人の祖先が同じであったことを意味しているのではないか。

第二行目に「わがクルの宝」と記されているからには、日本人とヘブライ人の祖先は、 どちらも同じクル族だったといえはしないか。

古代の日本人がヘブライ人、すなわち古代のイスラエル人と同じように「ヤハウェ」を祀っていたかどうかは、調べてみなければわからない。

けれども、私は日本人の祖先の一部に「呉人くれひと」とよばれるグループがいたことや、 卑弥呼の時代に朝鮮半島にあった高句麗こうくりという国の言葉が古代の日本語やヘブライ 語とそっくりなことを思い出して、日本からイスラエルに到る地域のいろいろなつながり を調べてみた。その結果は、とてもおもしろい。たとえば、平安時代の初めに書かれた『新 撰姓氏録』という日本の有力氏族の家系由来記には、こんなことが書いてあった。

八坂造出自狛国人久留川麻乃意利佐也

これをわかりやすく説明すると、

八坂造やさかのみやつこは久留くる川麻乃せんまえ意利佐おりさの狛国こまこく人

#### (高句麗人)の出身である

ということになる。

ここで久留と書かれているのは、今の中国・江南地方(長江の南の浙江省・福建省・広東省など)にあったクル、つまり呉のことだ。

意利佐は、そのまま読めばオリサ、つまりインドの東部にあるオリッサ州のオリサに意(オ)利(リ)佐(サ)という漢字をあてはめたものだ。

川麻乃は、インドのオリッサと中国の呉地方の中間にあって、オリッサや呉とならぶ稲 作の中心地として知られるタイのチェンマイをさしている(拙著『謎の新撰姓氏録』徳間書 店刊・参照)。

われわれの祖先の出身地を記した『新撰姓氏録』によれば、京都の八坂神社の社家として千数百年も前から祇園祭りの伝統を守ってきた高句麗人の八坂一族は、インドのオリッサ州からタイのチェンマイ、中国のクレを経て朝鮮や日本にやってきたクル国(高麗国/ 須国)の人であるという。

そして、その八坂氏の「ヤサカ」とは、ヘブライ語で、「神ヤハウェへの信仰」を意味する「ヤ・サクハ」に由来するらしいのだ。

とすれば、われわれは、アンデスの黄金板に記された"クルの宝"の正体をつきとめる ために、ひとまず日本からインド、中近東のイスラエルへと目を向けてみなければならな いのではないか。

そのキーワードは、いうまでもなく「イサクとヨセフ」である。

つまり、このイサクとヨセフが活躍した紀元前のイスラエル王国の歴史を調べてみると、 われわれがこれまで知らなかった途方もない秘密がわかるのではないだろうか。

### 日ユ同祖論の原典は、あのマックレオドの仮説

通説によれば、今から三○○○年前、ソロモン王の時代に繁栄したイスラエルは、王の 死後、北のイスラエル王国と南のユダ王国に分裂。北の十部族は紀元前七二一年ころ、ア ッシリヤに滅ぼされて行方不明となった。そのときの最後の王がホセアであった、という ことになっている。そして、古代イスラエルの歴史は一応ここで途絶えている。

行方不明となった北の十部族はその後どうなったのか。

実は、この最後の王ホセアが日本と深いかかわりがあるという説を唱えている学者がいる。彼の名はマックレオド。イギリス生まれの宣教師であった彼は、幕末の日本にやって来て、イスラエルと日本の関係を長年にわたって調査した。そしてその成果をまとめたのが『日本古代史の縮図』(一八七五年)である。

欧米で大変な反響を呼んだその本のことを知り、私は国会図書館に一冊しかなかったその原本を取り寄せて検討してみた(拙著『日本とユダヤ謎の三千年史』自由国民社刊・参照)。

これは今日の日ユ同祖論ブームの発端ともなった、いわば"原典・日ユ同祖論"として

も注目すべき本であった。

マックレオドの仮説をひと言でいえば、イスラエル北王国の十部族はそっくり日本にやって来て、日本の天皇家や有力氏族になっている、というのだ。

彼の仮説のポイントは次の通りである(『日本とユダヤ謎の三千年史』より引用)。

そもそも神武天皇(神日本磐余彦かむやまといわれひこ)の東征の発端となったのは、アッシリヤによるイスラエル十部族の捕囚であった。ユダヤの言い伝えによれば、イスラエルの十部族はアッシリヤによって三回に分けて連れ去られたといわれる。

第一回 紀元前七七一年 ルベン、ガド、マナセの三部族が最初に捕えられた。

第二回 紀元前七四〇年 次いでナフタリの部族が捕えられた。

第三回 紀元前七三〇年 イスラエル十部族のうち残る六部族がすべて捕えられた。…… [略] ……

アッシリヤ王はイスラエルの民をその頃アッシリヤの支配下にあったメディアのいくつかの都市に移したと言われているので、彼らの中にはメディアの言葉を話すようになった人も大勢いたかも知れない。ユダヤの古い資料によれば、彼らはメディアに奴隷として売られ、メディア語の名前をつけられたことがわかっている。

彼らの親たちの多くは、アッシリヤ王センナケリブがユダ王国を攻め、"主の使い"によって一夜のうちに十八万五千の兵を撃ち殺されて帰ってきたとき、その報復として殺された。また、アッシリヤの王は"主(ヤハウェ)"の名を口にしたイスラエルの民に死の苦しみを課した。…… [略] …

アッシリヤの支配下で苛酷な労働に従事させられたイスラエルの民は、聖書によれば、やがてアッシリヤのくびきから解き放たれるであろうと予言されていた。 イスラエルの"いと高き者"は、かつてモーセに率いられたエジプトの囚われびとがパロの軍勢に追いつめられて紅海のふちに立たされたとき、海の水をふたつに分けて救いの手をさしのべられたように、再びイスラエルの十部族をアッシリヤから救い出されると予言していたのである。

今日の聖書には収められていないが、聖書と同じくらい古く、また聖書に比べて決して劣ることはないと見られている聖書外典のひとつにエズラ書がある。…… エズラ書によれば、イスラエルの十部族はユーフラテス川を渡ったあと、一年六ヵ月の旅をした。

これに関連して注目されるのが、ケンペルの報告である。ケンペルは、彼の時代(一六九〇年当時)にバビロンから中国まで旅行するには六カ月かかったと書いている。その道はユダヤの聖典に記されたルートと同じものだ。……〔略〕……イスラエルの民が旅路のはてにやって来たのは朝鮮だったとみられる。ここで、彼らはふたつのグループに分かれ、ひとつは中国へ、もうひとつは日本へ渡った形跡がある。

マックレオドは、最後の王ホセアに率いられたイスラエル北王国の十部族がどこへ行ったのか、そのゆくえを追っているうちに、日本にたどりついたというのである。この点を調査するために彼自身も日本に来て長く滞在し、日本人の中で生活することによって、習慣や伝統、言葉や文字、あるいは建築物など、およそいたるところに、古代イスラエルとの共通点を発見して驚いたのである。

### 仮説を肉づけする二人のホホデミの存在

彼は天皇家の系図を調べ、イスラエル最後の王ホセアは、日本神話でいうオシホミミに

相当するのではないかと考えた。そしてオシホミミの子一ニニギからホホデミ、ウガヤにいたる日向三代ののち、ウガヤの子神日本磐余彦かむやまといわれひこがイスラエルの十部族を率いて、紀元前六六八年ごろ九州に上陸し、大和に東征して初代の神武天皇になったと推定したのである。私はマックレオドの説になるほどと思った。けれども彼はせっかく日本神話の日向三代に深い関心を示しながら、この日向三代(ニニギ、ホホデミ、ウガヤ)の話が、エジプトに亡命したホセアの子孫の、エジプトから日本への転身物語であることをはっきり述べていない。

彼はホホデミがエジプトのヨセフに相当すること、ヨセフの時代にエジプトから日本への大移動がなされたこと、その時期は紀元前六八七年の最後の大異変のころであったことなどの重要な点について十分に論じなかった。そのため、歴史的に実在性を疑われている神武天皇がいきなり西アジアから日本へ移動し、九州に上陸したという記述にとまどわれた読者も多いのではないだろうか。

しかし、『日本書紀』を注意深く読めば、そこに山幸彦ホホデミと磐余彦ホホデミという二人のホホデミの名が記されているのに気づく。マックレオドは二人のホホデミの時代をはっきりと区別しなかったため、無用の誤解を招いてしまった。が、時代はそれぞれ紀元前七世紀と紀元前三世紀。つまり、天孫降臨時代のホホデミと大和征服時代のホホデミは別人物なのである。このように年代をはっきり区別してみると、マックレオドの仮説はにわかに説得力が出てくる。

たとえば、山幸彦ホホデミ、が洪水を起こした話は前七世紀末の異変を反映したものと考えられるし、磐余彦ホホデミの話は前三世紀に起こった弥生初期の文化衝突の記憶に基づくものと考えられる。すると、これまで十分にその時代背景が明らかになっていなかった海幸山幸の神話や神武東征伝説が、考古学や人類学、地質学上のデータから判明している縄文.弥生時代の概念とかなりうまく一致してくるのである。

### 一致した!日本神話と旧約聖書の人物エピソード

私は古代イスラエルと日本のつながりについてもっと知りたいと思い、日本神話と旧約 聖書を徹底的に比較してみることにした。 その結果、大変おもしろいことに気づいた。それは、日本とイスラエルの古い伝承に登場する有名な人物のエピソードがとてもよく似ている、ということである。

旧約聖書によれば、ヤコブは愛らしくて目のきれいな乙女ラケルに恋をして、彼女との結婚を申し出る。するとラケルの父ラバンは、妹を姉より先に嫁がせるわけにはいかないので、姉のレアも妻にしてくれという。ところが姉は妹と違って、それほど美しくなく、目もきれいでなかったので、ヤコブはレアを嫌った。まもなくヤコブとラケルの間にヨセフが生まれる。ヨセフは兄ルベンらに迫害されてエジプトに行く。そしてそこで宰相となり、オンの祭司ポテペラの娘アセナテと結婚し、エフライムをもうける。ヨセフは飢餓で苦しんでいる兄たちを助け、彼らの罪を許す。

一方、日本神話によれば、ニニギは天から降りてくると、麗しい乙女コノハナサクヤヒメに恋をして、彼女との結婚を申し出る。すると彼女の父オオヤマツミは、ニニギにコノハナサクヤヒメだけでなく、姉のイワナガヒメももらってくれという。ところが、イワナガヒメは妹と違って美しくなかったのでニニギは彼女を嫌い父のもとに返してしまった。もなくニニギとコノハナサクヤヒメの間にホホデミ(山幸彦)が生まれる。

ホホデミは兄のホデリ(海幸彦)に自分が貸した釣り針を返せといじめられ、海神(ワタツミノカミ)の国へ行く。そしてそこで海神の娘トヨタマヒメと結婚し、ウガヤフキアエズをも

ける。ホホデミは潮満玉しおみつと潮干玉しおひるを用いて飢饅を起こし、兄ホデリを悩ませるが、やがて彼を許す。

さらにつけ加えるなら、ヤコブの兄エサウは全身毛深いため「エサウ(=毛深い人)」と 名づけられた、という。

一方、ニニギの兄ホアカリは非常に毛深かったため、エゾの「毛人の祖」になった、というのである。

以上のように、日本神話と旧約聖書に書かれた内容が、系図的にも説話的にもこれぼど ピッタリ符合するということは、とても偶然の→致とは思えない。両者は同じ人物、同じ 出来事を扱ったものと断定できるのではないだろうか。

\*\*\*

マックレオドは、オシホミミがイサクであり、かつホセアとも呼ばれたというところまで推定するに到らなかったが、私が調べた結果、同一人物であることが判明した。ここで重要なことは、イスラエル最後の王ホセア、すなわちイサクが活躍したのは紀元前七二〇年ごろだったということである。この時代に、イスラエルはアッシリヤとの戦いのさ中、クルの宝をどこかに隠さなければならない必要性があった、ということになる。

### ヘブライ人と日本人は同じ祖先から分かれた兄弟民族?

クル族がわれわれ日本人の祖先だったことをつきとめ、そして古代イスラエルの民と日本人が深い関係にあることも明らかになったが、ここにそれを裏づける重大な証拠がもうひとつある。

それは、古代イスラエルの都があったサマリアだ。サマリアはもともとは「カルクー」とか「クルクー」「クルク」と呼ばれていたことがわかった。「クー」「ク」とは「国」という意味だから、「カルクー」は「カラ族の国」、「クルクー」は「クル族の国」ということになる。

このクル族の国からヘブライ人(ユダヤ人)が誕生する一方で、日本人の祖先とみられる 人々が分かれてきたのではないかと考えられるのだ。つまり、ヘブライ人と日本人は同じ 祖先から分かれた兄弟民族ではないか、と。

そうであれば、分かれた時点ですでにあったクルの宝というのは、古代イスラエル王国 が滅亡する以前にあった宝ということになる。たとえば栄華をきわめたソロモン王が所有 していた非常に貴重な何かであったのではないか、という推理も可能になってくるのだ。

### 古代インドの叙事詩『マハーバーラタ』で活躍したクル族

クル族の正体を追っていろいろ調べているうちに、私はもうひとつ重大な手がかりをつかんだ。

それはインドに伝わる世界的な叙事詩『マハーバーラタ』に、同じクル族という名の英雄的な種族が登場するということである。

『マハーバーラタ』は、インドのクル族の英雄パーンドゥの五人の息子たち(パーンダヴァ)と、ドリタラーシュトラの一〇〇人の息子たち(カウラヴァ)の間で、ドラウパディー、あるいはクリシュナーと呼ばれる絶世の美女をめぐってくり広げられた凄絶な戦いのようすを記した戦争叙事詩である。

ここには古代核戦争を思わせる超兵器スーパーウェポンが次々に登場する。

なかでも、アリアンと結託したパーンダヴァとクルの精鋭カウラヴァとの間で戦われた 一八日戦争(バーラタ核戦争)では、第二次世界大戦や湾岸戦争の規模をはるかにしのぐ 超兵器が使われている。そして、この戦いに敗れたクルの英雄ドローナの息子が発した最 終兵器によって、西の大陸が一瞬のうちに沈んだという、まさにアトランティスやムー大 陸の沈没を思わせる絶滅戦の描写さえみられるのは圧巻である。

その一部を紹介してみよう。

●もろもろの偉大な武器を管理していたヴァーユは、かくしてサンスアプタカの軍勢を 馬や象、戦車、武器もろとも、枯葉のごとく吹き飛ばした……。 爆風に吹き飛ばされ て、あらゆるものがまるで鳥のように……木からいっせいに飛びたった鳥のように、 高く、美しく舞いあがっていった。

●英雄アシュヴァッターマンはみずからの空艇ヴィマナにふみとどまると、水面に降りたって、神々さえも抵抗しがたいアグネアの武器を発射した……。

アグネアの武器がひとたび空中高く放たれると、その矢の東は光り輝く流星の雨となって地上に落下し、敵を圧倒した。パーンダヴァの軍勢は、突如、深い闇につつまれ、方向感覚を失ってしまった。やがて恐ろしい風が吹き始め……太陽がぐらぐら揺れて、あらゆるものが熱で焦がされ始めた。象たちはこの武器の発する熱に焼かれ、あたり一面に広がる炎から逃れようとして右往左往した。海や川の水まで蒸発し、水中にすむ生きものも死の脅威にさらされた。

- ●矢の雨はあらゆる方向から激しい風をともなって降りそそいだ。雷よりもすさまじい音をたてて爆発したこの武器のために、敵の兵士たちは猛火につつまれ、燃え木のようにバタバタと倒れた。巨大な象たちも、この武器に焼かれて狂おしい悲鳴をあげ、ドドーッと大地にくずれて重なっていった……。
- こうして戦場の生きものは戦車もろとも火に呑みこまれ……木の葉のように燃えつきてしまった。
- ●強力このうえない高速のヴィマナで空を飛んでいたクルスは、"雷電"を巧みに操作した。彼は、三つの都市がそれまでのどんな武器でも効果がないことを知ると、これらの都市に向けて、神々すら恐れていた巨大な苦しみをともなう武器を発射した。それは、太陽を一万個集めたほど明るく、輝ける炎と雲のそそり立つ柱となって巨大な死をもたらす"鉄の雷電"と呼ばれた未知の兵器だった。
- ●三つの都市の住民は、ひとり残らず焼きつくされ、灰と化した。死体は見わけがつかないほど焼けただれ、手足の爪や髪の毛はことごとく脱け落ちた。陶器はひとりでにボロボロと崩れ、鳥たちは灰でまっ白になった。そして数時間後に、すべての食物は汚染されて食べられなくなった。

これを見たクルの兵士は恐怖にかられ、命からがら戦場から逃げだした。彼らは急いで川に飛びこみ、自分たちの身体と身につけているものを洗った。

●太陽と月のまわりには、来る日も来る日も不吉なおそろしい光の環が見られた……。 クル族の王ユディシュティラは、その後まもなく、この"鉄の雷電"のために、ヴリ シュニとアンダカの民が全滅したという報告を受けた……。

ヴリシュニとアンダカの民をことごとく焼きつくしてしまった"鉄の雷電"とは何とおそるべき兵器だろうか……。王は、この武器がもたらした悲惨な結果にひどく心を痛め、ついにこのような兵器を粉々に砕いて廃棄することを決意した。(著者訳)

この戦争の結果、ドゥリョーダナに率いられたカウラヴァはほとんど全滅し、ユディシュティラが勝利者となった。そして新たにインドの高天原の王になった彼はまもなく天界

に去り、生き残ったクル族は第七代の高天原王のもとで新たな国生みをすることになったのである(拙著『謎の新撰姓氏録』参照)。

さて、この戦争を生きのびたクル族の末喬とみられるインドのドラヴィダ語族、

つまり南インドのタミル人やマラヤーラム人、クルク人といった人たちは、今では]億人以上の人口を占めているが、奇妙なことに、彼らはわれわれ日本人とそっくりの顔つきをしている。

このドラヴィダ語族と日本人の関係を調べているうちに、私は古代のタミル語と日本語が同系統の言葉であることに気づいた。そして、このことは大野晋・学習院大学名誉教授がすでに→O年以上も前に証明している。大野教授は今のところタミル語と日本語が同じクル語から派生した言葉であるとは述べていない。が私は、同じクル族から今のタミル人や日本人が分かれたのではないか、また、ヘブライ人(古代イスラエル人)、タミル人、日本人はかつてクル族と呼ばれた共通の祖先をもっていて、そこから分かれてきた兄弟民族ではなかったか、と考えている。

私がこのように考える根拠のひとつは、『マハーバーラタ』に登場するクル族の英雄たちが、 日本神話に登場する高天原の神々そのものであることが判明したことによる。

両者の対応関係を調べた結果、単に人物の名前がアナグラムという音の入れ替えによって一致するだけでなく、人物相互の関係も、彼らにまつわるエピソードもほとんど一致するのである。

インドと日本で別々に語り継がれてきたことが基本的に一致するだけでなく、伝説や物語の舞台となった土地、遺跡との対応関係までも一致することがわかってきたのだ(詳細は『謎の新撰姓氏録』)。

### 日本人の習慣・伝統にみる"へブライの匂い"

マックレオドの仮説に影響されて古代イスラエルと日本のつながりを調べた研究者の一人に、ヨセフ・アイデルバーグという人がいる。彼は日本の「神道」に興味をもって来日し、京都の神社に滞在して研究に打ちこんだ。

その彼が、「永年にわたる滞在で、日本の神社と古代へブライ神殿の驚異的類似性を知る機会を得、日本の"神々の道"は古代へブライの"神の道"から来ているのではないかと思うようになった」と述べている。

彼は日本の神道がユダヤ教とよく似ているだけでなく、日本の言葉や文字、日常生活に みられる習慣や伝統が古代のユダヤ人(ヘブライ人)のそれと同じものであることに気づ いた

アイデルバーグの著書『大和民族はユダヤ人だった』(一九八四年)の日本語版が出版される にあたって寄せられた彼のメッセージはこう記している。

一九六三年、日本を訪れようとして私は日本語の勉強をはじめた。勉強しているう

ちに、あまりにも多くの日本語が発音も意味もヘブライ語に似ているのを見つけ驚いた。

その類似性は偶然の一致とはいいきれないとの結論に達し、私は、その一生をかけて日本の古代歴史を学び、日本人が約二千年前にマカ不思議に消滅したヘブライ部族の子孫である可能性を調査しようと決めた。

事実、研究を続けるうちに、私は日本人の一部始終の生活の中に、ヘブライの匂いがあることを見つけた。大和の古代史、日本の熟語、カタカナ、ひらがな、そして俳句などはすべてヘブライの習慣を帯びている。(以下略)(中川一夫訳)

「日本人の一部始終の生活の中に、ヘブライの匂いがあることを見つけた」というアイデルバーグはその後も研究を続け、一九八六年に"語彙集"をまとめた。その中には一二○○語以上の共通語が収められており、古代日本の大和言葉にひそむヘブライとのつながりを知るうえで貴重な研究といえる。

われわれが日本人のルーツや兄弟民族を捜す場合、その宗教や言語はもとより、生活に 浸透した習慣や伝統を見過ごすわけにはいかない。なぜなら、それらは民族の生活に深く 根ざし、民族の精神生活を支えてきた"絆"きずなともいうべきものであるからだ。 アイデルバーグや先のマックレオド、その他の研究者が指摘した、日本の生活習慣にお ける"ヘブライの匂い"、つまり日本とユダヤに共通するもののうち、ここではいくつかの 生活習慣を紹介することにしよう。

#### ①入浴の習慣

日本人の入浴好きは有名である。これは単に日本に温泉が多いからというだけでなく、古くから"みそぎ"の習慣が一般化していたからだと思われる。

風呂に入る前に体を洗い、全身をきれいにしてから浴槽に入る習慣は、今のユダヤ人と全く同じである(ユダヤのラビ、M・トヶイヤーの証言)。

#### **②手水所**ちようずどころ

日本の神社には必ず参詣者が手や口を清めるための手水鉢が置いてあるが、これはユダヤのシナゴーグと呼ばれる教会堂の入り口にある洗盤せんばんと全く同じである。ユダヤ人も日本人と同じように、祈りの前に手と口をきれいにしなければならないと考えている。ヘブライ民族の"清浄"の観念が塩や榊さかき(ヒソプ)、祭司の白い服などにもあらわれているが、それらはそっくり日本についても言える。

#### ⑤履物をぬぐ・足を洗う習慣

時代劇などを見てもわかるが、日本人は宿に着くとまっ先に履物をぬいで、足を洗う。 欧米人や中国人は土足のまま家にあがるが、ヘブライ人は日本人と同じように、履物をぬいて、足を洗ってから家にあがる。

これも日本とユダヤに共通する"清め"の思想から出た清潔好きを表す例である。

#### ④お守り

日本人はお守り好きで、これを持ち歩く人も多い。また、いたるところに魔よけ札を貼

っている。

ユダヤ人も同じように、旧約聖書の言葉を書きつけたメズサと呼ばれるお守り札を家の 戸口に貼りつけている。また、「アブダ・カダブラー」というヘブライ語の呪文を書きつけたお札を身につけている。

また、日本の山伏が額につけている兜巾ひたいときんとユダヤ人が額につけているヒラクティリーは共通の起源を有するとみられる。

#### ⑤おじぎ・拍手

日本人はひとに会ったとき頭を下げて挨拶する。屋内で目上の人に挨拶するときは、膝を折りまげ、両手をつき、頭を深く下げて挨拶するが、このような挨拶のしかたは古風な ユダヤ人と同じであり、ヘブライ民族に特有のものである。

また、日本語のハクシュ(拍手)はヘブライ語のハカシャ=HAKASHA(拍手)と同じ起源をもつ。

#### ⑥結婚式の習慣

日本の結婚式とユダヤの結婚式はよく似ている。花嫁が"つの隠し"と呼ばれる白い布 を頭につけたり、式のあと花婿の父の家へ連れられていくことなども、ユダヤのしきたり と同じである。

#### **⑦サムライ**

日本の侍は平安時代に生まれた。それは有力貴族や大地主が土地や財産を盗賊から守るために雇った者たちであった。その後"護衛する者"となり、ついには武士階級を表すことになった。

一方、サムライというのは古代へブル語のシャマル(守ること)から派生したシャムライ(護衛)が訛なまったものではないかとみられる。サムライはイスラエルの都サマリアという言葉に似ていて、ほとんど同じ意味を表すところから、神武天皇に率いられたサムライたちがイスラエルの都サマリアから日本へやってきた可能性は大きい。

### 古代へブライと日本の祖語は同じクル語?

戦前、ヘブライ語研究の第一人者といわれた川守田英二博士は、古代イスラエル語(ヘブル語)と日本語の間にあるいくつかの共通点に気づいていた。

彼は『ヘブル詩歌の研究』(一九五六年)の中で、ヘブライ語と日本語が対応する例をたくさん取りあげている。

それを見ると、「ばれる」「だべる」(話をする)のようにズバリ同じ語がある。 また、

香るとルカホ

歩くとラアク

もらうとモヘラ

かびるとルカビ

のように、音の入れ替えによって一見ちがった形に見える同義語がたくさん紹介されている。音の入れ替えによる変化は、アナグラムという言語学上のれっきとした法則に基づいて行なわれているので、多少変化した語も本来は同じ語であったことが無理なく証明できるのである。

古代へブライ語と日本語が多くの共通語をもつという事実は、両者がともにクル語ともいうべき祖語から分かれた兄弟語だ、ということを物語っているのではないだろうか。 ここでついでに述べるなら、先に紹介した『マハーバーラタ』に登場するクル族の英雄たちが活躍したインドにおいても、日本語と共通する語がたくさんあることが明らかになっている。

インドのクルク語・タミル語(ドラヴィダ語)と日本語に共通点が多いことにいち早く注目して、「日本語・タミル語同源説」を唱えているのは、先にも述べた言語研究の第]人者、大野晋教授である。教授は両者の対応する語を五〇〇例以上あげているだけでなく、インドと日本に同じような祭りの習慣や伝統がいくつもあることを、数回にわたる現地調査の結果、確認している。

また、甕棺かめかんや俗に"子持ち土器"といわれてきた楽器などの生活用具にも、そっくり同じ形をしたものがインドと日本(主に九州地方)で発見されていることを、私が主催する探検協会のシンポジウム(東京国立博物館大講堂)で発表している。

こうしてみると、クル族という種族は、エジプト地中海方面からインド、中国、日本まで広範囲にまたがって活躍していたのではないかと考えられる。そして紀元前の世界でこのように活躍していたクル族の実体をもっとくわしく知りたいと思っていたとき、私は、古代ギリシアの歴史家へロドトスが『歴史』の中で言及しているカーリア人こそクル族ではなかったかと思い当った。

ヘロドトスによれば、カーリア人という種族が紀元前の世界各地に輝かしい文明を築いたという。そのカーリア人こそ、エジプト、シュメール、インダス、中国の世界四大文明を建設したクル族ではなかったかとみられるのである。

私がこのように言うのは、単なる推測ではない。実際にこれらの文明が栄えた地域の遺跡から出土した碑文の多くが、古代クル族の文字、すなわち日本の古代文字で読み解けるという、信じられないような事実に基づいているのだ。

このことから、私は太古にインド・ヨーロッパ語族に匹敵するクル語族ともいうべきー 大語族が存在していたのではないかと考えている。この点に関しては今のところ十分に明 らかになっていないが、関心のある方はぜひ研究されてみてはいかがだろうか。

### 古代イスラエル人が日本に古代文字をもたらした?

古代イスラエルの人々が使っていたヘブライ語と日本語には共通する語がかなりあるこ

とが明らかになってきた。

では、その言葉を書き表す文字はどうだろうか。文字といっても応神天皇のころ伝来した漢字や、それ以後に作られた仮名のことではない。古代イスラエルの人々が日本にやってきた頃の文字のことである。その頃の日本の神代文字とヘブライ文字に共通するものがあるかどうか調べてみよう。

この点に関して、先のマックレオドは次のように語っている。

日本には遠い昔、明らかにヘブライの民が住んでいた証拠がある。彼らが日本に残したものは数多くあるが、いわゆる"神代文字"はその有力な証拠のひとつである。

#### :…〔略〕• …:

たとえば日本の象形文字カタカナは、一七九九年にナポレオンの部下がエジプトで発見した ロゼッタ・ストーンと多くの点で一致している。

また、奈良時代に吉備真備きびのまきびがつくったといわれる片仮名は、一八六八年に死海の 東岸から見つかったモアブ石の文字と多くの点で似かよっている。一見すると似ていな い文字も、向きを変えればよく似ていることがわかる。

さらにまた、純粋のメディアの言葉が片仮名の音節で表記できるのは注目すべきことである。

私は日本の各地を調べまわった結果、この国には、漢字が伝わるはるか以前の古い 時代から、漢字以外の文字が何種類か使われていた証拠を見つけた。

そしてこれらの日本の古代文字は、今から二千年以上も前にすでに日本以外の土地 では使われなくなった古代オリエント文字とよく似ていることを知った。

さらに、それらの古代文字の中には、のちの時代に仮名を生み出すもとになったと 考えられる表音文字アルファベットがすでにあり、しかもそれらが古代エジプトの象形文字や 古代イスラエルのアルフ.アベット(ヘブライ文字)と多くの共通点をもっている事実を確か めることができた。

これまで日本人の多くは、漢字の伝来以前に日本に文字はなく、日本固有の文字である平仮名や片仮名は、中国が生み出した漢字を借りて八~九世紀につくりあげられたと考えてきた。

ところが実際に調べてみると、日本には、これらの仮名が成立するはるか以前から、 これらの仮名によく似た文字を、仮名と同じように音をあらわす符号として使う伝統 があったのである。

このことは、日本の由緒ある神社に古くから伝わる品々に、これらの古代文字で地名や神名、祈りの言葉がアルファベット式に刻まれていることを見ても明らかである。もしそれらの文字が新しいものであるなら、どうしてその文字は古代オリエントの古い文字に似ているのか。また、それらの神社の伝世品が新しいものであるなら、なぜそこにヘブライの古い言葉が記されていなければならないのか。……〔略〕……それらの文字が今から二千年以上も前にオリエントでは使われなくなった文字に似

ていることを考えると、日本の仮名文字の起源は、神武天皇が日本を建国したと伝えられる紀元前六六〇年ころまで遡ると考えた方がはるかに事実に即している。

日本に伝わる象形神字カタカナがエジプトの象形文字やモアブ石のヘブライ文字ときわめて 近い関係にあることは、この文字を日本へもたらしたのが神武天皇(ホホデミ)に率 いられたイスラエルの十部族であることを物語っていないだろうか。

文字についてなされたマックレオドのこのような指摘は、いくつかの点で注目すべきも のがある。

まず、彼が日本の各地を調べまわった結果、漢字以前の古い時代から、漢字以外の文字、つまり神代文字が使われていた証拠をいくつも発見したこと。

そして、その神代文字が、エジプトの象形文字や古代イスラエルのアルファベット(へブライ文字)と多くの共通点をもつことを確かめたことなどである。

これらの理由として、マックレオドは「神武天皇(ホホデミ)に率いられたイスラエル 十部族がこれらの文字をもたらしたのではないか」と推測している。

私もこの点に関して入念に調べてみた結果、彼のこの推測は基本的に正しいのではない かと考えるようになった。

日本の古代文字については、

あとの第七の扉で詳しく説明することにして、この章のテーマに戻ろう。

### "クルの宝"を狙って侵入してきたアーリヤ人

われわれは、アンデスの黄金板に記された"クルの宝"とは何かを追求するに先立って、 それを残したクル族の正体を探っているところである。

そして、同じ黄金板に刻まれていたイサクとヨセフの名前を有力な手がかりとして、古 代イスラエルと日本との関係をいろんな角度から調べてきた。

その結果、クル族とは地中海、エジプト方面からインド、中国大陸にかけて四大文明を 築き、世界の広範囲にわたって活躍していた種族であることがわかった。

そして、クル族である古代イスラエルの十部族が日本にやって来たこと、言いかえるなら、クル族とはわれわれ日本人の祖先であったこと、さらにまた、われわれの祖先であるクル族の王たちが、何らかの理由でクルの宝ともいうべきものをどこかに隠したことなどをつきとめてきた。

では、紀元前の世界各地で活躍していたわれわれの祖先クル族が勢力を失ってしまった のはなぜか。その理由は何だったのか。これが明らかになれば、クルの宝のありかもおの ずからわかるかもしれない。

歴史の教科書を読み返すまでもなく、クル族を滅亡に追いこんだのはアーリヤ人である。 アーリヤ人の侵入によってクル族は滅亡した。

エジプトの地に、インドに、そして中国大陸へと次々に侵入してきた異民族のアーリヤ

人たちは、それまでクル族が築き上げてきた輝かしい文明や歴史を、あるところでは抹殺し、あるところではすり変え、歪曲・矯小化しながら次第に消し去ってしまったのである。彼ら征服者は、地中海、エジプト地域ではアッシリヤ人として、インドではアーリヤ人、中国大陸では漢人あやひととして活躍した。それぞれ呼び名は多少異なるが、もともとは同じアッシリヤ人をさしている(拙著『太古日本の王は世界を治めた』徳間書店刊・参照)。通説では、インドにアーリヤ人が侵入してきたのは、今から三五〇〇年前のことだといわれている。が、実際に私が調べてみると、それは二七〇〇年前のことだった。そのことはカルカッタのインド博物館に展示されている紀元前八世紀のアッシリヤ粘土板の存在がはっきり物語っている。つまり、インドにおけるアーリヤ人の正体は、紀元前七〇〇年ごろデカン高原に侵入したアッシリヤ人だったのだ。

アッシリヤ人はクル族を滅ぽし、紀元前の世界の勢力分布をぬり変えてきた。支配する者とされる者。歴史は大なり小なり今もそれをくり返しているのであるが、アッシリヤがクル族を滅ぼした大きな理由は何だったのか。単なる領土拡張や征服支配が目的だったのだろうか。

その執拗さと残虐さを見るかぎり、私には他に隠された理由があったように思えてならない。それは何だったのか?

ひとつ考えられることは、クル族が持っていて彼らが持っていなかった、何かすばらしいもの(=宝)を奪い取りたくて襲ってきたのではないかということだ。もうおわかりだろう。彼らは"クルの宝"を狙って侵入してきたのだ。彼らが何としてでも手に入れたかったクルの宝とは何だったのか。それはおそらく世界の王たる者にふさわしい"しるし"だったに違いない。それを手にした者だけが、世界の王として認められ、尊敬を一身に集めることができるような"宝"だったに相違ない。

アーリヤ人に侵入されるまで、世界の広範囲にわたって高度な文明を築き、繁栄してい たわれわれの祖先クル族は、侵入者の魔手を逃れて、その宝を人知れず隠す必要に迫られ た。

そう考えると、冒頭の黄金板の碑文が急にいきいきと意味を持ってわれわれに語りかけ てくるようだ。

ここにわがクルの宝あつめしめ

のちの世に伝へて

いしすゑたらしめむ

われわれ子孫のために、敵の目を逃れてひそかに隠したクルの宝とは何か。そして、それは今どこにあるのか。

ヒトラーが血まなこで捜したものは何だったのか。ファン・モーリスが捜しあてた地下 都市とそこに眠っていた無数の黄金製品。これだけがクルの宝だったのか。いや、そうで はあるまい。

こう思うと、私はいてもたってもいられない気持になる。われわれがこうしている問に、

欧米の秘密指導部が今もクルの宝の秘密を探っているかと思うと……。

その正体は何か。読者も早く知りたいと思わないだろうか。クルの宝がわれわれ日本人の知らない間に、アーリヤ人とその後継者によって今なお追い求められているとしたら、われわれは一刻も早くクルの宝を侵入者の手から守らなければならないのではないか。

### 第六の扉

### NASA 驚愕のハイテク飛行物体

#### 翔

伝説は真実の記憶。世界各地の遺物は仮説

を裏付ける証拠品だった。ハイテク物体飛鈴び交う、壮犬な字宙と青い地球の物語……。

### "クルの宝"はシュメール語でムーと呼ばれた「飛行物体」?

アンデスの黄金板に記されたクルの宝。それは、欧米の秘密結社が三〇〇〇年前から求めてきたアトランティス・ムー文明の遺産だった。

かつてムー王国の植民地だったアトランティスの王がムー王国に対して反乱を起こした とき求めたもの一それは歴史上のアッシリヤがエジプトに求めたファラオの宝であり、 アーリヤ人・アヤ人(漢人ぁゃひと)がインド・中国で捜し求めた世界の王の宝だった。 そのクルの宝とはいったい何だったのか!私は、それが古代ムー・アトランティス文 明の遺産であるだけでなく、ムーという言葉がシュメール語で「飛行物体」を意味すると ころから、クルの宝とは、太古日本の宇宙文明を象徴する神々の飛行物体ではないかと考 えた(著者監修『ムー大陸探検事典』廣済堂出版刊,参照)。

が、はたしてそのような飛行物体が、紀元前の地球上に実在したのだろうか。この点を 明らかにしたいと思い、私は世界各地に残る古文献や神話・伝説などをできるかぎり調べ てみた。

すると意外や意外。私のやや無謀とも思える考え(仮説)を裏づけるような記述がいたるところで見つかった。しかもその内容は現代科学の水準をはるかに越えた高度な内容なのだ。 そのうちの特に興味深いものをいくつか紹介することにしよう。クルの宝のイメージが 次第にはっきりしてくるかもしれない。

### アラビアに伝わるシバの女王の飛行物体伝説

紀元前一〇世紀にイスラエルの王となったソロモン。ユダヤの伝説によれば、ソロモンは飛行機械をもっていたという。

同じような伝説が南アラビアにもある。その伝説は、ソロモンが愛したサバの女王ビルキス(シバの女王マケダ)とその父親の時代に、イエメンの首都サヌアの郊外に大型の宇宙船ないしは宇宙ステーションが離着陸したことを伝えている。

中世アラビアの著述家ナシワン・イブン・サーイド・エル・ヒムヤーリーがこの伝説を

まとめて、『すてきな真珠の首飾りの書』という本を著している。そこには、古代ヒムヤル 王国のハドハド王が目撃したウサバ"(ギリシア語で「神秘なるもの」の意味)とビルキス 誕生の由来が、次のように記されている。

エル・ハドハド王は狩猟が好きだった。ある日、ライオンを追って王国の国境を越え、砂漠に入ると、狼に追われたガゼルを見つけた。彼は最初の獲物をあきらめ、狼を追うことにした。そのとき狼は、山の斜面を流れる急流に足をとられたガゼルに襲いかかろうとしていた。彼は狼を殺すと、ガゼルをねらった。しかし、ガゼルはその機をとらえて逃げ去ったのである。

その足は速く、王はいつの間にか、自分の国から遠い、椋欄しゅろやすべての果樹がしげる森の中の四本の大きな銀の柱の上に立つ金属の都の前に出ていた。

彼がその柱の一つのもとで呆然としていると、都の門が開いて男が出てきた。そして彼に挨拶すると、こう言った。

「ああ、王よ。あなたは驚かれているようだが、わけを話そう。この都はあなたの都と同じ名で、マリブという。ここはジン(魔法使い)の都で、わたしはその王のヤラブ・イブン・サーブという。」

二人が話をしているあいだに、非常に美しい娘が近寄ってきて、彼らを振り返りも せずに都の中へ入っていった。

ハドハド王は心を奪われ、急いでジンの王に、あの娘は誰かとたずねた。

「わたしの娘だ。会ったことはなかったろうか。先ほどあなたが狼から救ったあとで 見失ったガゼルだ。」とサーブ王が答えた。

ハドハド王はすぐに妻にと申しこみ、承諾を得ると、一か月後に両王の家来の前で 式を挙げることに決めた。

その約束をしてハドハド王は帰路についたが、彼が都から少し離れるやいなや、そ の都は見えなくなってしまった。

\*\*\*

彼は国に帰ってもそのことは誰にも話さなかったが、結婚の準備だけは怠らないで そして、約束の日がくると、

親族と大臣をともなって最初の出会いの場所へおもむいたのである。

するとそこには、ダイヤモンドのように光り輝く大きな窓がついた、なめらかな金属で作られた城が立っていた。そして、そのまわりには、鉄製の運河の中を水が流れ、株欄やぶどうや果樹が、その甘美な香りを放っていた。

ジンの王は、すべての人々を歓迎して、城の中へと迎え入れた。招待客が席につくと、あらゆる飲みものと食べものが現れた。そして、じゅうたんには金の贈りものの山。三日間の祝いの後、結婚式が厳粛にとり行なわれ、ハドハド王はヤラブ・イブン.サーブの娘ハルラと結婚したのであった。そして、その城は二人の王宮となり、その中でビルキス(サバの女王)が生まれたのである。(坂斉新治訳/傍線・著者付加)

南アラビアの伝説を、ナシワンはこのように美しい話にまとめて紹介している。が、この伝説もこれまで『アラビアン・ナイト』の話と同じように、古代人の夢物語にすぎないと思われてきた。

#### 第六の扉 NASA 驚愕のハイテク飛行物体

しかし、サバの女王ビルキスというのは、エチオピアの女王マケダの別名であり、シバの女王マケダその人のことでもある。伝説上の女王かと思いきや、実はこれが紀元前一 O世紀に実在したエジプト第一八王朝の女王ハトシェプストと同一人物であることが最近の研究萌らかになったのだ『ヴェリコフスキー混沌時代』法政大学出版局刊参照)。今や、この伝説を全くのつくり話とみることはできなくなってしまった。特に引用文

中、次のような記述を見過ごすわけにはいかない。たとえば、「ダイヤモンドのように光り輝く大きな窓がついた、なめらかな金属で作られた」「四本の大きな銀の柱の上に立つ」ジンの都とは、"サバ"の名称のもとになった"サブハ"、すなわち四本の着陸脚をもった銀色の巨大な宇宙船のことではなかったか(『ムー大陸探検事典』参照)。

また、ビルキス(ハトシェプスト女王)の父ハドハド王(トトメス一世)が立ち去るとき、この都がまたたくまに.見えなくなってしまった」のは、天空に飛び去ったためであり、サーブ王の娘がガゼルに姿を変えて岩場に現れたのは、彼女が偵察円盤のホロヴィジョン装置からガゼルの立体映像を外部に投射したことを意味しているのではないだろうか。紀元前のこの時代に、そのようなスーパーテクノロジーがあったなんて、と誰もがいぶかるかもしれない。もちろん私もはじめは信じられなかった・

ところが、一二世紀を迎えようとしている現代ですら到達し得ないでいるスーパーサイエンスが、この時代にあったことを裏づける文献がいくつもあった。それを知って私も二度びっくりの心境なのだ。

たとえば、インドの『ヴィマニカ・シャストラ』という古文書。これは、ヴィマナ、すなわち古代の飛行機械に関するあらゆる情報が収められた不思議な本であるが、この中のヴィマナ操縦必携の第十三条「ローパーンタラ」によれば、ヴィマナは"第十九種の煙"を使うことによって、ライオンや虎、サイ、蛇などの形をとったり、山や川そのものの外観を呈することができた、というのである。

"第十九種の煙"がどんなものであったのか、具体的なことはわかっていないが、それに しても驚くべき記述である。

したがって、この『ヴィマニカ・シャストラ』に書かれたものと同じカムフラージュ法を使えば、ヴィマナは「そこに在っても見えない」状態をつくりだすことができたはずだ。とすれば、サバの王宮が見えなくなったのは、王宮を取り巻く"鉄製の運河"が、光の屈折率を変えたためだと考えることもできる。

また、イスラムの伝説によれば、かつてサヌアの郊外にグムダン城と呼ばれるヒムヤル 王の宮殿があり、それは四つの入口をもった、高さ一八三メートルもある二〇階建てのビ ルだったという。そして、当時の王は遠方にみずからの姿を投影させる機械や、敵の会話を遠くから傍受する機械をもっていた、というのである(ホワイトハウスや 007 も欲しがる高性能の秘密兵器ではないか!)。

サヌアの周辺には、長さ三五〇メートル、高さ三五メートルもあるマリブのダムをはじめ、古代の灌潰施設の廃境がいくつもある。それらが現代より進んだ水利技術をうかがわせるところなどを考え合わせると、あながち、このイスラムの伝説を単なるフィクションとみなすわけにはいかない。

思いきった見方をするなら、イエメンの魔法使い(ジン)がひとつの町と王宮全体を宙に浮かせて運んだ、というアラビアン・ナイトの有名な伝説は、この地にあったサブハ(宇宙ステーション)の記憶を伝えるものだと言えるのではないだろうか。

### クシュ王家の叙事詩が語るエチオピアの宇宙船伝説

紀元前九世紀の半ば頃、エジプトのアメンホテップ三世の時代にまとめられた、クシュ 王家の叙事詩『ケブラ・ナーガスト』にも、古代の飛行機械に関する興味深い記述がみら れる。

同書(二〇世紀初頭、カール・ベツォルトの訳でバイエルン王立科学アカデミーから出版されたもの)によれば、今から約三〇〇〇年前、エジプトにトトメス一世(ハドハド王)とハトシェプスト女王(ビルキス、またはマケダ)、トトメス三世(ヤシール王)が相次いで君臨した頃は、地球の文明が今よりはるかに高度なレベルに達していた。中でも、イスラエルに空前の繁栄をもたらしたダビデ、ソロモンの二人の王は、各種の宇宙船をもち、みずからもこれらの宇宙船を造ることができた、というのである。

さらに『ケブラ・ナーガスト』に収められた「シバの女王とその息子メネリク、および王たちの栄光の書」(W・バッジ訳)として知られる伝説の一部(同書第三〇章)によれば、ソロモン王はシバの女王に"空中を飛ぶことができる乗りもの"をプレゼントしたが、「その乗りものは、ソロモンが神から与えられた知恵によって造った」というのである。さらに、シバの女王の息子バイナレフケム(メネリク)は、父のソロモンから母に贈られたこの飛行機械を無断で使って、エルサレムの神殿から"契約の箱"を盗み出し、エジプトの上空を通過して、エチオピアの都ダブラ・マケダに着陸した、というのである。同書の第五八章には、その時のようすが次のように記されている。

(シバの女王の息子)バイナレフケムが去ったのは三日前のことだった。エチオピア 人たちは空中を走ることができる車に乗って去ったが、それは天の鷹よりも速く、あ らゆる荷物はこの車に積みこまれ、風とともに運ばれた……

エジプト人たちはソロモン王の使者に向かって、「数日前にエチオピアの人々はここを通ったが、彼らは天使のように空を飛び、あっという建通り過ぎていった。彼らの車は天の鷹よりもすばやかった」と答えた………

エチオピア人の一隊がエジプトの上空に現れたとき、この地の神々や聖なる王たち

の像は倒れて、粉々になってしまった。エジプトの市民は、多くの偶像や塔が砕け散るのを目撃した………

バイナレフケムと行動をともにしたエチオピアの兵士たちは、車の上ではいかなる 痛みも苦しみもなく、飢えや渇きに悩まされたり、汗をかいたりすることもなかった。 彼らは少しも疲れなかった……:

この車に乗れば、ふつうは三か月もかかる道のり(ギルガメシュ叙事詩に記された 速度三三キロ/日に基づけば、約三〇〇〇キロメートル)を、一日で旅することができ た………

#### (著者訳)

この記述をみるかぎりでは、ソロモンの飛行機械の性能は現代の航空機と少しも変わらない。

同書によると、古代イスラエルの航空機は速く飛べただけでなく、上空に静止して浮かぶことができたというのである。が、こうなると、もう現代の航空機もおよばない。紀元前一〇世紀にこのような高性能の航空機が本当にあったのだろうか。『ケブラ・ナーガスト』はこれでもかこれでもかというように、古代の飛行機械のようすをリアルに伝えているのであるが、私はどうしてもそのまま信じることができなかった。とはいえ、この時代(ソロモンやシバの女王が活躍した時代)にエジプトを治めていた

トトメス三世(前九五五~前九〇一年ごろ在位)の年代記を見てしまってからは、やはり

## トトメス三世の年代-記にみるエジプトの太陽円盤伝説

一九五〇年代の初めにエジプト学者のプリンス・ボリス・ドゥ・ラシュウィルツが訳したトトメス三世の年代記には、先のバイナレフケムが飛行機械を使って、イスラエルからエチオピアまで飛行したという伝説に関連して、次のような驚くべき事件が記録されている。

#### 第二二年、冬の第三月…-

事実だったことを認めざるを得なくなった。

王の年代記作者にして記録保管者でもある"生命の館"の書記たちは、空中に"火の輪"が現れるのを目撃した……

それは頭がなく、口から悪臭を放った。その長さは一ロッド、幅も一ロッドで、音 を出さなかった。

書記たちは恐れおののいて心を乱し、腰をぬかして地面にしがみついた………彼らの報告を受けて、王は命じられた……いったい何が起こったのか………それから何日かたつと、"火の輪"は以前にも増してひんぱんに現れ、見よ、それらは太陽より明るく輝いて、天の四方に広がった…:

それらが空中に浮かんで巨大な炎の環を形づくるさまは、まさに天を威圧せんばかりだった。

王の軍隊は王を取り巻きながら、ただそれを見上げるばかりだった。

炎の環はやがて昼餉ひるげのときが過ぎると、天高く上昇し、南のかなたへ消え去った。 そしてしばらくすると、天から魚や鳥が落ちてきた。これはエジプトの天地がはじまって以来、見たことも聞いたこともない出来事だった。

国民の動揺を沈めるため、王は祭壇に犠牲を捧げて香をたき、神に祈った……… そして王は、起こった出来事をすべて″生命の館″の年代記に記すよう命じた……… この事件が永久に記憶されんがために……。(著者訳)

ラシュウィルツが訳したこの年代記は、中世以来バチカンの記録保管所に眠っていたものだ。バチカンのエジプト博物館館長を務めたアルベルト・トゥーリ博士が生前に発見し研究していたところから、トゥーリ・パピルスと呼ばれている。

このパピルスがラシュウィルツの指摘するようにトトメス三世時代のものであれば、右 の事件はおそらく紀元前九三四年ごろに発生したと思われる。

ここで"火の輪"と呼ばれた光輝く飛行物体がエジプトの南方に消え去ったことは、ソロモン神殿の宝をのせたバイナレフケムの飛行機械がエチオピアに向かったことと一致している。

また"炎の環"という表現は、ハドハド王(トトメス一世)とビルキス(ハトシェプスト女王)が住んでいた"空飛ぶ宮殿"の周囲にあった"鉄製の運河"の円環に相当している。》

そしてこの事件があった年の翌年(紀元前九三三年)、ハトシェプスト女王とトトメス三世のエジプト共同統治は終わりを告げ、トトメス三世はイスラエルの征服とソロモン神殿の略奪を準備し始めた。

旧約聖書の歴代志下第一二章に記されたエジプトのシシャク(トトメス三世)の遠征とこの事件はおそらく密接な関係があったと思われる。

というのも、『ケブラ・ナーガスト』は、エルサレムの神殿から契約の箱が奪われたことを 知ったソロモン王に、.汝ら(イスラエル人)の栄光は去った。神は汝らを見捨てた」と語 らせているからである(同書第六二章)。

契約の箱がイスラエルとエジプト、エチオピアの人々にどんな意味をもっていたかは今 のところ不明であるが、トゥーリ・パピルスは、この箱の輸送に使われた飛行機械が円型 で、直径→ロッドであったと述べている。

ーロッドは古代エジプトの長さの単位で一○○キュービットに相当する。そして一キュービットは一八インチ。一インチは二・五四センチであるから、一ロッドは四五・七メートルということになる。

つまり、当時の飛行機械のひとつは、直径四六メートルの円型飛行機であったことがわ かる。

パレンケ遺跡の石蓋に描かれていた!古代の宇宙パイロッ

古代の航空機に関する言い伝えは、エジプトやエチオピアばかりではない。南米のアンデスや古代メキシコに高性能の飛行機械があったことが、一九五〇年代以降、中南米の各地で進められたいくつかの考古学調査と遺物の再評価から次第に明らかになってきた。その中でも特に目を見はるものが、"パレンケの宇宙飛行士"と呼ばれる彫刻だ。これは一九五二年にメキシコ国立人類学研究所のアルバート・ルース・ルイリエル博士がパレンケの"碑銘の神殿"と呼ばれるピラミッドの地下で発見した王の櫃ひつぎの蓋ふた石に刻まれていたものである。

長さ三・六メートル、幅二・一メートルの大きな石蓋の表面に彫刻されたこの絵は、公式的な説明によれば、大地の神を象徴する頭蓋骨の玉座にすわった王が、生命の樹(またはトウモロコシの神)の恩恵に浴しながら、樹上に舞う聖なるケツァル鳥を崇拝している姿を描いたものとされている。

しかし、専門家の多くは一九六六年にフランスのギュイ・タラードとアンドレ・ミョーが『クリペウス』誌上で明らかにした."古代パイロット説"に注目し、ほかのマヤ資料やインドの宇宙船との関連を調べている。

この説はデニケンの著作によって世界中に広まり、欧米やロシアでは今や古典的な見方になってしまった感がある。

タラードと、ミョーの二人がこの絵をどのように解釈したのか、次に紹介しよう。

この彫刻の中央に描かれた人物は、われわれの考えではパイロットだと思う。彼は ヘルメットをかぶって前方(宇宙船の船首方向)を見ながら、両手でレバー(操縦桿) を操作している。頭部を背後の装置で支え、酸素吸入器を鼻先に取りつけているのは、 明らかに彼が成層圏を飛行していることを意味している。

その形と後部の噴射ガスから判断してロケットの}種と思われるこの飛行物体は燃料タンクが見当らないので、おそらく太陽エネルギーを利用した宇宙船であろう……そのエネルギーはロケットの前方から機首に向かって流れ、九つの蓄電池をはじめとするエネルギー蓄積装置に蓄えられたあと、内部が四つに区切られた動力室に向かっている。そして、操縦席の後部にある別の推進装置とパイプで接続され、末端のノズルから炎を噴射する形で、宇宙空間における飛行を可能にしている。

#### (著者訳)

いかがだったろう。この絵を見て二人はこのように解釈したのであるが、このような解釈は、一九六一年にロシアの物理学者マテスト・アグレストが古代の地球上に残された高度な文明の痕跡を"異星人の地球訪問"と結びつけて説明して以来、世界各国の非正統的な学者や作家によって主張されてきた見方と無関係ではない。

しかし、デニケンやアグレストのように、この彫刻をあえて異星人に結びつけなくても、 すでに定説となっているマヤの高度な数学と天文学の知識をもってすれば、パレンケの王 が何らかの飛行機械をもっていた可能性は十分ある。

また、タラードとミョーは、メキシコのモンテ・アルバン遺跡の基壇がレバノンのバールベック神殿の基壇とよく似ているところから、メキシコにもバールベックと同じような宇宙船の発射台があったのではないかと考えた。

まだその点は不明であるが、モンテ・アルバンから出土した黄金板に描かれた。黄泉ょみ (地下都市)"の神ミクトランテクトリの胸像(次頁)が、ある種の超 LSI 回路図を表していることは、古代のメキシコに宇宙船の製作を可能にした高度な電子工学技術が存在したこ



メキシコのモンテ・アルバン 遺跡から出土した地下都市の 神ミクトランテクトリの胸像

メキシコのモンテ・アルバン

遺跡から出土した地下都市の

神ミクトランテクトリの胸像

.とを示しているのではないか。

一方、このパレンケの彫刻をもとにして、イギリスの航空技術専門家アイヴァン・サン ダーソンが宇宙船を復元した。興味深いことに、復元されたこのパレンケの宇宙船の構造 は、エドウィン・グレイの考案した EMA モーター(従来とは異なるエネルギ;を利用して、無限に近い連続運転を続けることができる電磁パルス式モーター。アメリカ特許番号第三八九〇五四八号)の構造とそっくりなのである。

ということは、この宇宙船が現在でも実用化されていないタキオン駆動式の飛行機であった可能性を示している。

さらに、パレンケの飛行機械はインドの古文書『ヴィマニカ・シャストラ』に記された シャクナ・ヴィマナ(図 4)という航空機の構造とよく似ている。

ということは、このパレンケの飛行機械のエネルギーが宇宙空間の超光速粒子タキオン (同書の表現では"太陽光線")であったことを物語っているのではないだろうか。

シャクナ・ヴィマナの全長と床面直径の比率が、同書の中で三対一と規定されていて、 EMA モーターやマヤの宇宙船の長さと幅の比にきわめて近いということは、三者の構造 と使用エネルギーが基本的には同じものであることを暗示している。

〈図4〉「ヴィマニカ・シャストラ」に記された"シャクナ・ヴィマナ。の設計図

### 奇妙な形をした模型に秘められたハイテクノロジー

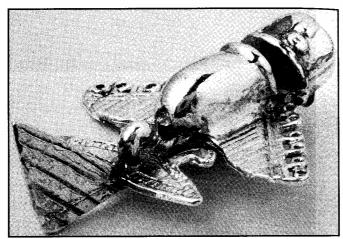
古代のアメリカ大陸には、このパレンケの宇宙船と並んで、もうひとつ別のタイプの巨大な宇宙船があった。

それは、中米のコスタリカから南米のコロンビア、ベネズエラ、エクアドル、ペルーに 到る地域から出土した大小二十数個(長さ三〜七センチ程度)の奇妙な黄金製品の研究か ら明らかになったものである。

発見当初、これらの黄金製品は"魚"の模型か何かと考えられていた。

これらのうちのいくつかは、"動物形態品"としてコロンビアの首都ボゴタの国立銀行に 保管されているが、一九五四年にニューヨークのメトロポリタン美術館などで一般公開さ れた。

このときレプリカ(プラスティックの複製品)の鋳型を造った宝石商のエマヌエル・M・スタウブが、これを動物学者で考古学者でもあるイギリス海軍情報部の元将校アイヴァン・サンダーソン博士に見せて以来、これは魚ではなくて"飛行機械"ではないか、それも超高速のジェット機であり、今よりも進んだ潜水可能なジェット機ではないかと言われるよ



中南米から出土した、奇妙な 黄金製品。動物形態品として コロンビアで保管されていた (写真提供/南山宏)

中南米から出土した、奇妙な 黄金製品。動物形態品として コロンビアで保管されていた

うになったのである。

この"動物形態品"のレプリカをはじめて手にしたサンダーソンは、最初のうち、これを「エイ」の一種ではないかと考えた。しかし、よく観察しているうちに、尾びれにあたる部分がどうも奇妙だと思うようになった。第]、エイであればこのような尾びれがついているはずがない。不審に思って尾びれをよく見直すと、何と左は側面に [ という記号のようなものが刻まれているではないか。

家?神々の家?とすると、これは古代の飛行機械ではないか。サンダーソンははやる心を抑えながら全体の特徴をじっくり見直してみた。すると、この「魚」か「鳥」の頭にあたる部分は四分の三ほど切り取られていて、首のつけ根には「風防ガラス」のような突出部がある。もし動物の模型であるなら、何もわざわざそのような奇怪な形を手間ひまかけて純金で作るとは考えられない。

しかも、胴のうしろから突き出た"ひれ"は端が四角くなっていて、「昇降舵」のようだ。



尾びれに刻まれた記号。 サンダーソンは、初期 のヘブライ語で「家」を 表す"B<sub>w</sub>と考えたが… (写真提供/南山宏)

尾びれに刻まれた記号。 サンダーソンは、初期 のヘブライ語で「家」を 表す"B"と考えたが… (写真提供/南山宏)

また、胴から左右に向かって広がる三角形の翼は、わずかながら下にカーブしている。翼の縁はきわめて直線的であり、その重心は通常の飛行動物よりかなりうしろについている。彼は考えた。もし仮にこれが三角翼のジェット機であるとしたら、このような特徴は航空力学的にどんな意味をもっているのか、あるいは何の意味もないのか、と。この奇妙な形をした黄金製品が古代の航空機の模型ではないかとまでは推測したものの、その時点ではそれ以上くわしいことはわからなかった。

しかし、そこはすでにコクレ文化(パナマ地峡中部でコロンビアのキンバヤ文化と同じ時代に栄えた征服期以前の黄金文化)の"ジャガー"が古代の掘削機の模型であることを明らかにしたほどの実力者サンダーソン。これが古代の飛行機の模型であることを確信していた。

#### 古代の飛行機は水中も航行できた!?

が、このことは話さず、問題のレプリカを数人の航空関係専門家に別々に見せて、それ ぞれの立場からの意見を求めた。

その結果は彼の予想通りだった。長年航空雑誌の編集に携わってきた一人の専門家は、 これを"今までにない新型の垂直離着陸機"と考えた。

また、ベル・ヘリコプターの設計者として知られるアーサー・ヤングは、この物体がま ちがいなく飛行機であることを保証し、元の飛行機は全体のバランスからみて、バック・ タイプ(胴体後部)のエンジンを搭載していたのではないかと考えた。

さらに世界最初のロケット・パイロットであるドイツの専門家ジャック・A・ウルリッヒは、この物体の翼が三角形で、両端が下向きにカーブしていることは、何よりこれが超音速機であったことを物語っているとし、胴の形から判断すると、それはターボ・ジェットかそれ以上の推進システムをもっていただろうと指摘したのである。

ウルリッヒはこのモデルを見たとき、すぐに F102 型戦闘機に似ていると思ったが、 後部の「昇降舵」とみられるものは、むしろ最新型の SAAB 機と同じスピード・ブレー キ(減速装置)の働きをしたかもしれないと考えた。

これらの航空専門家はいずれも、サンダーソンの推測を裏づけてくれた。が、彼にとって予想外の驚きだったのは、この模型が一九六六年にカリフォルニア沖でテストされた ONR(アメリカ海軍技術研究所)の設計した潜水飛行機と同じ特徴をもっていることを知ったときだった。

"フライング.フィッシュ(飛びうお)"と名づけられたその飛行機は、実験の数年前にハワイのある技術者が開発し、海軍の監督下でダグラス社が製造したものであるが、圧力を加えたフレオン・ガスを動力として、カリフォルニアのサンディエゴとハワイを結ぶ約四〇〇〇キロの距離を飛行し、その間に四回ほど海中に潜っては空中に飛び出す予定になっていた

かつてアメリカ空軍の補給部隊に在籍し、特許局でさえびっくりするような驚異的なエンジンを考案した技術者として知られるアドルフ・ヒューアー。彼は何の説明も受けないでコロンビアの"魚"に関する意見を求められたとき、この"魚"は三角翼の飛行機をあらわしたもので、水中を航行できるものだ、と答えた。

ヒューアーによれば、「この模型の元になった飛行機は途方もないスピードで宇宙空間に 飛び出すことができるだけでなく、水中に急速度で飛びこみ、空中と変わらない状態で飛 行できたはずである」ということだった。

ヒューアーは最後にこうつけ加えている。

「こういった機能をもつ飛行機をすでにわれわれは製造している。しかも単に設計段階に あるというのではなく、実際に保有しているのだ。」(アメリカの『ポピュラー・メカニッ クス』には、この飛行機に関するレポートも掲載されている)

ヒューアーの語った設計段階にあるという飛行機は、一九六六年のテスト飛行には失敗 したが、その後、翼の両端の下向き具合に関していくつかの必要な調整がなされた結果、 →九七○年までに第二回目のモデルは目的どおり飛行に成功したという。

#### 模型とスペース・シャトルの形の類似は偶然の一致か?

コロンビアの黄金の"魚"について、サンダーソンが最終的に達した結論は、次のようなものだった。

「こうしてわれわれは空中から海中へ、海中から空中へスキップし、ジャンプできる貴重な飛行機械が昔あったことを確認した……この飛行機械が地球の一万メートルの海底まで潜ることができたのであれば、それは確実にどのような密度をもった大気の中でも航行できたであろう。そして、この飛行機械はわれわれが宇宙と呼んでいるはてしない空間へ進み、そこでわれわれの宇宙船と同じような機能を効果的にはたすことができたはずである」アイヴァン・サンダーソンやアドルフ・ヒューアー、ジャック・ウルリッヒ、アーサー・ヤングといった第一級の学者や専門家たちが鑑定した結果を信じるかぎり、古代中南米の飛行機械は現在のスペース・シャトルよりはるかに高度な性能をもった宇宙船だったとみられる。

この点に関してはニューヨーク航空学研究所のアーサー・ポイスリー博士も同様の意見をもっており、彼のスタッフは一九七〇年代の初期に、厳密な風洞実験によって、コロンビアの"魚 " が飛行可能な物体の模型であることを証明した。

そればかりではない。彼らはこのタイプの宇宙船を技術的に完成させることが、アポロ 以後の宇宙開発計画に欠かせないと考えたのである。

われわれは一九八一年になって、宇宙空間と地上を往復できる初のスペース・シャトル "コロンビア号"の姿を目撃するようになった。が、その名称が"コロンビア"となってい るだけでなく、その形が"コロンビアの宇宙船"の模型のひとつによく似ていることは決し て偶然ではない。

スイスの作家デニケンが、コロンビア号の着陸したカリフォルニアのモハーヴェ砂漠の標識線とナスカ"宇宙港"の線がよく似ている点を指摘するまでもなく、NASAの科学者たちはランドサット衛星の写真を分析してこのことに気づいており、古代中南米の宇宙船がナスカに着陸したことを非公式に認めているのである。

アーサー・ヤングがその後、コロンビアの飛行機械は"着陸船"というべきで、離陸するときは V 字形のくぽみ部分を折り曲げて、機首を胴体下部に移すことができる"コンバーチブル・タイプ"の宇宙船だったと考えたのは、古代の飛行機械技師がすでに宇宙ステーションと地上の基地を結ぶ"コロンビア号"よりはるかに進んだ連絡船をもっていたこ

とを認めたからである。

おそらく NASA の科学者たちは、古代インドの天才技術者マヤが設計した宇宙ステーションが月と地球の重力均衡点であるラグランジュ・ポイントに設けられ、ここからマヤやヴィシュヴァカルマンの宇宙船が月や地球の宇宙港に着陸したことを知っているのだろう。

私は、このような宇宙船について書かれた古代中国の記録を思い出した。

有名な『荘子』逍遥遊に引用された『斉諧さいかい』という書物によれば、古代の中国で"鵬"

と呼ばれた鳥は、海中にあっては"鯤ェル"と呼ばれ、「つむじ風にまたがって飛びあがること 九万里、飛びだしてから六か月ものあいだ、ひと休みもせず」と伝えられた豪快な鳥だっ た。

鵬の航続距離が九万里(約一三万キロメートル)ということは、地球と月の間の距離(平均三八万キロメートル)の三分の一に相当する。ということは、この"鳥"が途中でエネルギー補給をしなくても、ラグランジュ・ポイントのひとつ(L5)までいっきに到達できたことを意味しているのである。

その"鵬"と同じタイプの宇宙船を古代中南米の人々がもっていたことを、アメリカの 最先端の科学者たちはすでに知っていて、コロンビアの黄金模型から未来の星間宇宙船に 関する情報を引き出そうとしていることは十分に考えられるのだ。

# 尾翼には"クルの宝"を解き明かすヒントが刻まれていた

クルの宝が太古の飛行物体ではなかったかと見当をつけた私は、そのことを明らかにしたいと思い、世界各地に伝わる古文献や神話・伝説などをできるかぎり調べてみた。 その結果は右に紹介したとおり、私の想像をはるかに上回る手がかりを得ることができた。

中でも、今世紀のコロンビア黄金ジェット機のレプリカの発見と、それに関する第一級 航空関係者の鑑定結果は、クルの宝捜しにおいて重大な意味をもつものである。

ここで読者にぜひ紹介しておきたいのは、先のコロンビアのジェット機の尾翼に刻まれていた文字のことである。

アンダーソンはそれをヘブライ文字の B(家)と読んだが、実はこれは日本のトヨクニ 文字で「マニ」と読めるのだ。「マニ」とはインドのサンスクリット語で「宝珠」、すなわ ち「光り輝く珠玉のような宝」という意味を表す。これはチベット人が"空飛ぶ真珠"と 形容した神々の乗りもののことでもある。

つまり、コロンビアの黄金ジェット機は、まちがいなく太古の日本人クル族の神々が空を飛ぶときに使った飛行物体だったことを、この「マニ」という言葉が示しているのだ。 コロンビアの黄金ジェット機に代表される太古日本の宇宙船(ヴィマナ)こそが、クル の宝の正体だったのである。

としたら……その実物は今もなお、南米の地下都市に眠っている可能性がある。 そのありかはどこか?どうしたら、われわれはそのありかをつきとめることができる だろうか。

コロンビアの宇宙船模型に刻まれた文字が日本に伝わるクル族の文字で読めたということは、クルの宝のありかをつきとめる鍵が、日本の神代文字にあるということを意味していないだろうか。

# 第七の扉

### 鍵は古代文字------謎は解けた!

### 光

日本の古代文字で解ける、各地に残された 謎の碑文。今、ここに初めて明らかにされる、 抹殺された民族の愛と哀しみの記憶。

### ◇神代文字がわかれば"クルの宝"はその姿を現す

コロンビアの黄金ジェット機の尾翼に刻まれた古代クル族の文字。それは日本の神代文字で「マニ(宝)」と読めた。

このことは、われわれにとって非常に重要な意味をもっている。

それは第一に、もしもわれわれがクル族の古代文字をマスターするなら、太古日本のムー文明、つまり日本人の祖先クル族(カラ族)が築き上げた古代宇宙文明の記録を読み解くことができるということだ。

また第二に、われわれの祖先クル族がかつてアメリカ大陸の各地に地下都市を建設した -------その地下都市のありかが日本の神代文字を手がかりとしてつきとめられるということ を意味している。

そして第三に、われわれはそれらの地下都市に今も隠されている太古日本のクルの宝、 すなわち紀元前の日本の神々がわれわれ日本人のために残してくれた古代宇宙文明の遺産、 ヴィマナを現実に手に入れることができるということだ。

クルの宝が太古日本の宇宙船だとすると、その時代の全貌を知るためには日本の神代文字の知識が欠かせない。

つまり、失われた日本と世界の太古の歴史に隠された秘密を解き明かす鍵-----それが日本の神代文字というわけだ。

私は読者に約束してもよい------もしも読者が日本の古代文字の知識を身につければ、誰でも世界各地に残されたクル族の碑文を次々に解読できるであろう。そうすれば、クルの宝がわれわれの前にその姿を現す日が必ず来る、と。

日本に古くから伝わる古代文字とはいったいどんな文字なのか。では、さっそく見てみよう。

「文字かもしれない」が、いきなり「いつわりの文字」に

日本に遠い神代の昔から文字があったことを知らない人は多い。無理もないことだ。誰

もが歴史の教科書で、五世紀の初めに漢字が中国からもたらされるまでは、日本に文字は なかったと教えられてきたのだから。

日本の神代文字について少し知っている人は、私の話を聞くと、ああ、あのいかがわしい古代文字のことか、と眉まゅをひそめる。が、彼らは自分で実際に確かめてそう言っているわけではない。

神代文字に関する研究をふり返ってみると、戦前は、「疑うらくは、これ文字か」ということで、「擬銘」とか「擬字」と言われてきたのだが、戦後、皇国史観を非難された学会の権威が、占領軍の圧力を受けて、「擬字」をあえて、「偽字」と書きかえてしまった。そのため偏見が生じてしまったのである。つまり、戦前までは、「文字かもしれない」という捉え方をされていた神代文字が、戦後、いきなり「いつわりの文字」だと宣伝されるようになったのである。

しかし、実際にはこれから見るように、日本には縄文の昔から、日本固有の文字があった。

読者もご存じの通り、近年の考古学の成果によって、各地の遺跡から出土した鏡や甕棺、 古鏡、石板などに漢字以外の文字(神代文字)が刻まれている実例が次々と見つかってい る。そして神社の磐座いわくらや洞窟の壁などに刻まれた数千年前の文字も発見されている のだ。

### 古代文字研究に致命傷を与えた本居宣長のひと言

神代文字で刻まれた遺物の実例を紹介する前に、日本には漢字伝来以前にれっきとした 固有の文字があったこ之を示しておこうと思う。

事実、そのことを証明する文献はいくつもある。たとえば、『古事記』とともに日本の正 史とみなされている『日本書紀』の欽明天皇二年(五四一年)三月の条には、次のような 記述がある。

帝王本紀すめらみことふみに、多さはに古き字あり。撰集之人えらみさだむるひと、屢しばしば遷易うつりかふることを經たり。後の人習ひみて、意を

以て刊改けづりあらため、傳寫ったへうつすこと既に多く、遂に舛雜たがひまよふことを致せり。

つまり、由緒正しい『日本書紀』にははっきりと、古代日本に「たくさんの古い字があった」と記されているのだ。『日本書紀』が漢字で書かれた時点で「古き字」といわれたその字とは何か。いうまでもなく、漢字使用以前の日本の古代文字を意味している。

ここで神代文字研究をめぐる事情をかいつまんで説明すると、こうだ。

平安時代のはじめ(大同二年口八〇七年)に斎部広成いんべひろなり

が『古語捨遺』を著して、その序文の中で、「けだし聞く、上古の世いまだ文字ぁゃじ

あらず」と述べて以来、何と一二〇〇年近くも、日本は公の教育の場で、漢字や仮名以外の文字を教えてこなかった。

そして、江戸時代に本居宣長が広成の言葉を受けて、「上古文字もじなし」と"とどめ"をさして以来、日本では古代文字研究の道がほとんど絶たれてしまった。

宣長のこのひと言は、日本の碑文研究者にとって致命的だった。具体的に言うと、彼に よって、その後の碑文学の運命が決定づけられ、それはそのまま古代史研究の運命をも決 定づけることになったからだ。

宣長は日本の国学の発展に大いに貢献した人物として知られているが、その彼が皮肉に も、一国の民族の歴史を知るうえで非常に重要な意味をもつ碑文学と古史古伝の研究を大 幅に遅らせることになったのである。

碑文に当たらずして古代史研究は始まらない

「上古文字なし」と言い放った宣長であったが、実はそこには彼の大きな誤解があった。 広成の「いまだ文字あらず」という表現を、それこそ文字通り解釈して「上古には 文字がなかった」と公言したのであった.が、広成の意味した文字とは「文字ぁやじ」つまり 「漢字」のことだったのだ。

広成が活躍した平安時代の初期には、.漢字」のことを.「文字ぁゃじ」書き表していた。「文」と「漢」がともに、「あや」と読めることから、このような重大な誤解が生じてしまったのである。

宣長のひと言で、古代文字研究の道は絶たれてしまったか見えたが、その灯が完全に 消えたわけではない。

この間には国学者、平田篤胤ひらたあつたねの輝かしい業績があった。彼は『神字日文伝え』を著し、その中で何種類もの古代文字とその読み方を紹介した。

そこには古代文字で書かれたものを読み解く手がかりが記されていて、後世の研究には かり知れない貢献をしている。その意味でも、日本の碑文学はこの篤胤に始まったといえ るかもしれない。

が、宣長以後に篤胤が創始した碑文学は、すぐれた研究であったにもかかわらず、彼以降、五〇年間というもの、ほとんど進展しなかった。かろうじて明治初期に落合直澄ぉちぁいなぉずみが篤胤の研究をひき継ぎ、大正から昭和にかけて、吾郷清彦ぁごうきょひこほか少数の研究者が現れただけだった。

が、落合直澄は日本の各地からさらに多くの神代文字を集めた。なかでも北海道異体文字(通称アイヌ文字)とトヨクニ文字を集めたことは大きな業績である。

篤胤、直澄の成果を継承し、それを発展させていったのが吾郷清彦である。彼の功績は何といっても、神代文字で書かれた古文献、たとえば『上記ラネーウムーム』や『秀真伝ほつまったぇ』などを初めて現代の日本語に訳して紹介したことである。今日の古史古伝ブームの基礎は、彼によって築かれたといってよいだろう。

しかし、吾郷をはじめとするこれまでの研究者は、文献を徹底的に調べ、古代文字の研

究を継続・発展させてはきたが、あくまで文献に頼る研究で終わっている。実際に遺跡や遺物、あるいは神社の磐いわくら座や洞窟などで見つかった碑文に当たって、それらを読み解く作業をほとんどやってこなかった。

古いものであるだけに、どうしても実物に当たって考古学的な裏づけを取り、誰が見て も疑いようのない事実であることを証明することが必要だった。

私はいくら神代文字を解読し、それで書かれた古史古伝を現代語に直してみても、それが本当に古いものであることの証明がなければ十分でないと考えた。

そういうわけで、これまで現地調査を通して、できるだけ多くの実物に当たり、考古学者も認めざるを得ない多くの事実を調べてきた。

### 現代まで生き続ける伊勢神宮の古代文字

これから、神代文字で書かれた実例を検討するので、よく読んでほしい。

日本の古代文字が実際にはどのように使われていたかを示すひとつの好例は、伊勢神宮 の神宮文庫に収められている奉納文である(図 5)。

これを見て、どこかで見かけたことがある、と思った人もいるかもしれない。そう、神 社のおみくじやお札、また、お守りなどに書かれている文字だ。

伊勢神宮に現存する奉納文は、これまで確認されたものだけでも九九点ある。その大部分は藤原鎌足や稗田阿礼ひえだのあれ、和気清麻呂わけのきょまろ、菅原道真、平将門、源義経、木曽義仲、後醍醐天

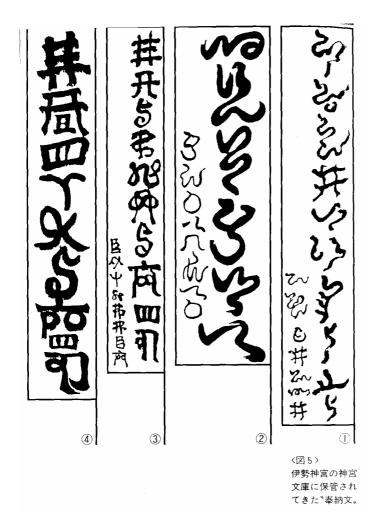
皇といった歴史上名高い人物で占められている。また、『古事記』をまとめた太安万侶おおのやすまろや『日本書紀』の編者の舎人とねり親王なども名を連ねている。

これらの奉納文は、奈良時代から江戸時代中期にかけて、およそ一〇〇〇年間にまたがり、それぞれの時代に伊勢神宮に参拝した著名な指導者たちが、さまざまな思いをこめて納めた大変貴重なものである。

漢字が使われていた時代にどうしてわざわざわかりにくい古代文字を使ったのか不思議に思われるところだが、ある宮司によると、太古日本の神々は、外来の宗教と外来の文字を嫌われたので、神前への奉納文は神々の好まれる神字(神代文字)で書かれるのが慣例だったという。

それはともかく、これらの奉納文は、神宮文庫が「かみのみたから」として大切に保管してきたもので、現存のものは明治初年まで伝えられた原本の写しを下敷きにして、朝彦親王殿下のスタッフが新しい美濃紙に、その輪郭をていねいに写し取ったものといわれている。写しだからホンモノではないと言ってしまえば、『古事記』や『日本書紀』をはじめ、およそ写し取って保管されてきた古文書の類は、すべてニセモノということになってしまうだろう。

〈図 5>



伊勢神宮の神宮

文庫に保管され

てきた"奉納文。

伊勢神宮の奉納文は、アヒルクサ文字とイヅモ文字で書かれたものを主体とするが、この他にもトヨクニ文字や北海道異体文字として学会に報告された古代文字がある。 各地の古墳や甕棺から出土した鏡や刀剣、縄文時代の土器、土面、石造物の表面に刻まれた文字のうち、私自身が紀元前の時代から日本で使われていた文字として確認しているのは、アヒルクサ文字、イヅモ文字、トヨクニ文字、北海道異体文字などの数種類に限られている。

これらの文字が『古事記』以前の時代にどのような形で使われていたのか、さっそく実物を見ていくことにしよう。

# アヒルクサ文字は甲骨文字の草書体

まずはリハーサルである。先の伊勢神宮の奉納文には、何が書かれているのだろうか。 読んでみよう。 奉納文を文字表とつき合わせてみると、読者は①と②がアヒルクサ文字、③と④がイヅ モ文字で書かれていることにすぐ気がつかれるだろう。その解読結果は次の通りだ。

①アマテラスオホミカミ

フシハラアヒラ

- ②ヒツキミコト
- ミナモトヨリトモ
- ③アマノウスメノミコト
- フシハラタタフミ
- ④アマツコヤネノミコト

すなわち漢字で表すとこうなる・

- ①天照大御神 藤原不比等
- ②日継尊 源頼朝
- ③天宇受売命 藤原忠文
- ④天児屋根命

一つ一つの文字を文字表とつき合わせてあてはめていく作業は、難解な謎解きゲームに似ている。困難ではあるが、文字が読み解けたときの喜びは大きい。そうやってつないでいった文字が意味をなす文として目の前に現れたときの喜びはことさらだ。

アヒルクサ文字は、伊勢神宮、出雲大社などの由緒ある神社や旧家に古くから伝わる神 代文字のひとつである。

この文字は、九州の阿比留あひる家に伝わるアヒル文字の草書体と考えられたことから、江 戸時代の国学者・平田篤胤によって、「アヒルクサ文字」と命名された。

しかし、私はこれを今から三〇〇〇年前までさかのぼるとみられている中国股いん 時代の甲骨文字と比較して、両者のつながりを調べた結果、アヒルクサ文字は甲骨文字の 草書体である、という結論に達した(拙著『謎の新撰姓氏録』参照)。

172

# 縄文晩期の土器に描かれた文様は古代人の文字遊び?

最近、日本の縄文遺跡から甲骨文字とみられる文字を刻んだ遺物が次々に見つかり始めていることを考えると、アヒルクサ文字の歴史もまた、縄文時代までさかのぼることは確実だ。



と甲骨文字(左)

アヒルクサ文字(右

と甲骨文字(左)

図 6 は、青森県津軽半島の亀ヶ岡遺跡から出土した縄文晩期(紀元前三世紀ごろ)の土 面の図解である。この土面をよく見ていただきたい。

一見、この土面にはどこにも文字らしいものは書かれていないように見える。あるのは、

類からあごにかけて刻まれた何本かの曲線だけである。その曲線がヒゲを表したものか、 それともシワを表したものかはよくわからない。

これまでこの土面を見た研究者は、これを古代の呪術と結びついた"文様"か.入れ墨ずみ "だろうと考えるだけだった。

しかし目をこらしてよく見ると、そこには特定の意味をもつ古代文字が浮かび上ってく る。この文字はアヒルクサ文字である。

図解を見ながら、なぞってほしい。

アレヲバマツレ

アエヲバマツレ

ここには「吾ぁれ

をばまつれ」「饗ぁぇをばまつれ」と刻まれていたのである。

文字を使って人の顔を描く遊びは、われわれも子供のころ→度や二度は経験している。 文字を使ってこの土面にメッセージを盛りこんだ古代人のセンスと遊び心にカンパイ!と いうところだろうか。

### 病気を治す呪力をもっていたイヅモ文字

伊勢神宮の奉納文に使われたもうひとつの文字が、これから見るイヅモ文字だ。この文字は、出雲大社の近くにある書嶋ふみしまの石窟の壁に刻まれていたところから、イヅモ文字と呼ばれている。

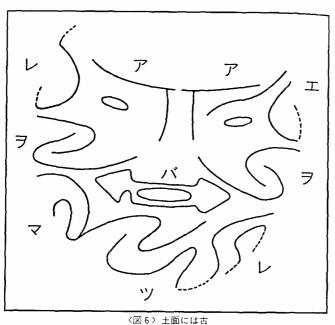
発見地の出雲の書嶋石窟の所在については謎の部分もあるが、イヅモ文字は厳然として 伝えられ、代表的な古代文字のひとつとして重視されている。

古い文献によると、イヅモ文字は病気を治す力をもった"マジナヒ(呪い)"用の神字としても使われていたようだ。このことからも、イヅモ文字が人々の生活の中に広く行きわたっていたことがうかがわれる。

なお、イヅモ文字は紀元前八世紀ごろ、トヨクモノ天皇によって作られたため、「トヨノ



青森・亀ケ岡遺跡から出 土した、縄文晩期の土面 (資料提供/成田祐之氏)



〈図 6〉 土面には古 代文字で「吾をばま つれ」というメッセ ージが隠されている

文字」とも呼ばれている。

ではさっそく、イヅモ文字で書かれたものを実際に読んでみることにしよう。

図7の鏡は、明治以来の研究者によって「単圏銘帯鏡たんけんめいたいきょう

」と呼ばれてきた直径五センチの小さな鏡の模写だ。中国前漢時代に漢人が作ったものとされている。出土地は不明である。

この鏡には、ご覧のように、八つの渦巻文の間に八個の文字らしきものが刻まれている。これを古鏡の権威といわれる学者たちは、今まで次のように読んできた。











下并 大① 明上

#### (樋口隆康『古鏡』新潮社刊・一一五頁参照)

だが、これはいったいどういう意味なのか?読者はおわかりだろうか。上から二番目の文字は「日」と読めなくはない。が、それ以外の文字はどうしてこんな漢字を当てはめたのかサッパリわからない。

私は、古代中国にそんな漢字もあったのかと思って、唐代から漢代にさかのぼり、漢字の書体の移り変わりを調べてみた。しかし、これらの文字に対応するものは何ひとつ見つ



『神字日文伝』の中にある イヅモ文字(トヨノ文字)

『神字日文伝』の中にある イヅモ文字(トヨノ文字) からなかった。

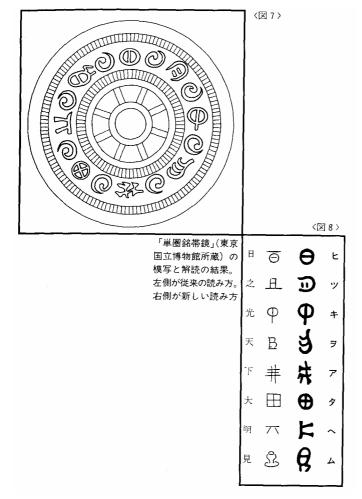
そこで私は、この鏡の銘文も伊勢神宮の古代文字で読めるのではないかと考えた。その 根拠は、二番目の文字が漢字で「日」と読めるだけでなく、イヅモ文字でも「ヒ」と読め るからだ。読者も文字表で確認してほしい。

従来の研究者は読みはじめの文字をまちがえていた。子aの位置にあたる②の文字から 読むのが正しいことは、読者もあとですぐに確認できる。

図8を参照しながら読むと、次のようになる。

#### ②ヒ (イヅモ文字)

- ③ツ (イヅモ文字-----横向きの草書体)
- ④ キ(イヅモ文字)
- ⑤ヲ(イヅモ文字ー裏返しの変形文字)
- ⑥) ア(イヅモ文字)
- ⑦タ(トヨクニ古体が丸味をおびた字
- ⑧へ(トヨクニ新体ー横向き)



〈図 7>

#### く図8>

「単圏銘帯鏡」(東京

国立博物館所蔵〉の

模写と解読の結果。

左側が従来の読み方。

右側が新しい読み方

① 「ム」「トヨクニ古体------底部が欠けた形つまり、この鏡には次のような銘文が刻まれているのだ。ヒツキヲアタヘム

(日継ひつぎを與あたへむ)

ヒツキとは、伊勢神宮に納められた源頼朝の奉納文にみえるヒツキミコト(日継尊)の 「日継」と同じで、古代人の太陽・月信仰に根ざした王位・王権を表す言葉である。 「日継を與へむ」と記されているということは、この鏡が古代の日本を治めた大王によって、各地の諸侯にその支配権を保証するものとして与えられたことを意味している。

### トヨクニ文字はカタカナの原型だった?

次はトヨクニ文字だ。この文字は、大分県の県立図書館に保管されている『上記ゥぇつふみ』の記録用の文字として用いられた神代文字である。

トヨタニ文字の古体象字は、「象形神字カタカナ」といわれ、ご覧のように事物そのものをズバリ



トヨクニ文字の古体象字(左)と新体象字(右)

トヨクニ文字の古体象

字(左) と新体象字(右)

図案化したもので、文字発生の第一段階を示している。

文章を書くとき、この文字を一字一字書いていたのでは、とてもわずらわしく、時間も かかる。そこで簡素化されたものが新体象字である。『上記』は、この間の経過をくわしく 伝えている。

新体象字は、よく見ると、今のカタカナと似たものがかなりある。カタカナを作ったのは吉備真備きびのまきびといわれているが、彼が『上記』を研究し、それを参考にしたことも十分に考えられる。

では、トョタニ文字で書かれたものを実際に読んでみよう。ここに格好の例がある。それは山梨県坂井遺跡から出土した、縄文中期(C14 法で今から約五 $\bigcirc\bigcirc\bigcirc$ 年前)の釣手土器である。

よく見ると、両方の釣手に文様らしきものが刻まれているのがわかる。それを写しとって、トョタニ文字で読み解いたプロセスが図9である。

向かって右側、次に左側を読んでみると、

ミヤヲマツリ

ニヘヲマツラム

(宮を〔己屋みや〕を祀まつり

(贄〔御供〕を奉らむ)

と刻まれていることがわかる。

今から五○○○年前までさかのぼる縄文中期に、すでに神代文字が使われていたことは、 この例からみても疑いようのない事実である。

トヨクニ文字で書かれた例をもうひとつ紹介しよう。図 10 は、宮崎県の天岩戸神社境内から出土した岩戸蓋石の表面に刻まれたものの模写である。やや長い文だが、これを一字一句読み解いていくと、次のように書かれていることがわかる。

祖母そぼゆ開かれつる神避かみさるケ戸を掘り

これに無戸籠うつくまる

火明ほのあかりの御代みよに天之岩戸あめのいわとへ籠りこも

ます

時に阿蘇火あそびのそば地震なるへわたり

タカヒメの祖をやツカヤリは

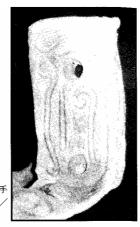
皇祖すめをやゆかりの蓋つくりて



縄文中期の釣手土器(山 梨・坂井考古館所蔵 写 真提供/木沢隆次)



▼左側の釣手 (写真提供/ 木沢隆次)



▶右側の釣手 (写真提供/ 木沢隆次)

			〈図9〉解読プロセス
	€		=
0	0 00	Π	へ ヲ マ
C			ッ
o	0		ラ
_ }	Z		۵

ぐ左側の釣手

(写真提供/

木沢隆次)

〉右側の釣手

(写真提供/

木沢隆次〉

#### 〈図9〉解読プロセス

縄文中期の釣手土器(山

梨·坂井考古館所蔵写

真提供/木沢隆次)

天之岩戸へ逃れき 地怒り稔っなるを 天之岩屋殿籠とのごもり 枚へ岩守りて生きながらへたり 由来いはれを吐けり

これを読み解くにはかなり訓練が必要であるが、努力すればそれも夢ではない。

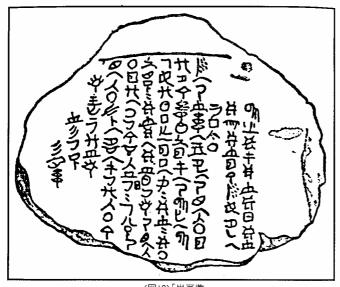
### 世界各地で使われていた北海道異体文字

最後にもうひとつ重要な文字がある。北海道異体文字だ。

この文字は、明治二〇年(一八八七年)に、アイヌ・コロポックル論争で有名な東京帝 大の坪井正五郎博士が『東京人類学会誌』で発表したものだ。

この文字は北海道の各地から出土したことが確認されているだけでなく、日本の各地、さらには世界の各地で使われていた可能性を秘めた注目すべき古代文字である。

落合直澄は11のような文字表を復元し、この文字を「アイノ文字(アイヌ文字)」と名づけた。



〈図10〉「岩戸蓋 石碑文」の模写 (吾郷清彦著『日 本神代文字』大 陸書房より)

〈図 10〉「岩戸蓋

石碑文」の模写

(吾郷清彦著『日

本神代文字』大

陸書房より)

古代のアイヌが実際に日本の各地でこの文字を使っていたかどうかは、学者によって意見が分かれる。が、この文字は南アフリカのドリーコプス・アイラントの文字や、イースター島のロンゴロンゴ文字と多くの共通点をもっている。

今ではこのような文字があったことを知る人もほとんどいなくなり、明治初期の出土品 のゆくえさえわからなくなってしまった。

しかし、この文字の読み方を身につけると、日本だけでなく、世界各地の岩絵のそばに 書かれた謎の記号や、イースター島の碑文まで読めるのだ。

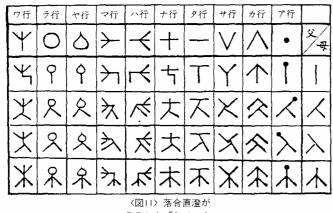
では、さっそく、この文字を使った実例で解読トレーニングをしてみよう。

図 12 の文字群は、北海道の小樽市郊外にあるフゴッペ洞窟で昭和二五年(一九五〇年) に見つかったものである。

ここに描かれた記号らしきものは、図 11 の文字表と見比べてみると、ただちに「イイシシライ」と読める。「イイシシ」とは食肉獣を表す。つまり、古代の日本語で「食肉獣ィィシ

シら居ィ(イノシシやシカなどの食用動物がいる)」と書いてあるのだ。

図 13 は図 12 のそばに描かれたものだが、これを読むにはちょっとした美的センスが要求 される。



〈図II〉落合直澄が 復元した「アイノ文 字(アイヌ文字)」表

〈図13〉右図の文字 の近くに描かれてい た記号らしきもの



〈図12〉フゴッペ洞 窟で発見された刻画 (上)と、アイヌ文字



<図 II>落合直澄が復元した「アイノ文字(アイヌ文字)」表

〈図 13>右図の文字の近くに描かれていた記号らしきもの

〈図 12〉フゴッペ洞窟で発見された刻画 (上)と、アイヌ文字

①は誰でも「サカナ」と読めるだろう。だが②はそう簡単ではない。文字表を見て、これが「カ」と「ワ」の合体字であることに気づいた人は、古代文字解読の入門コース合格だ。③も同じように「ワキツ」または「ハキツ」と読める。

つまり図13は全体として「カワサカナハキツ(川魚は来つ)」ということになる。

するとどうだろう。図 12 と図 13 の解読結果をまとめると、フゴッペ洞窟の壁面には、古代のシャーマンが自然の豊かな恵みを願って「食肉獣ら居、川魚は来つ」と書いたことがわかるのだ。

フゴッペ洞窟の文字は、この北海道異体文字で書かれた例だけでなく、トョクニ文字で書かれた例もある。興味のある方は峰山巌と掛川源→郎が『フゴッペ洞窟』(六興出版)の中で紹介している文字の解読に挑戦してみられるとよい。

### 神代文字抹殺の秘密は『日本書紀』の中に隠されていた

さて、以上で見てきたように、古代の日本には漢字伝来以前に固有の文字があった。そ して、その伝統が今も生きているからこそ、私は由緒正しい伊勢神宮の奉納文や碑文も読 み解くことができたのである.

それなのに、どうして日本人の大部分が、日本には漢字以前の文字もなければ、漢字以外の文字もない、と思うようになったのだろうか。その歴史的背景をさぐる手がかりは・またしても先の『日本書紀』に求めることができる。

.日本書紀』の天智六年(六六七年)の条には、われわれから日本古来の文字文化の記憶を奪い、われわれの祖先から日本固有の文字とそれで書かれた文献を抹殺した人の正体を明らかにしている記述がある。それは次の通りだ。

十一月丁巳朔乙丑、百済鎮将劉仁願、熊津都督府、熊山縣令上柱國司馬法聰等を遣して、大山下境部連石積等を筑紫都督府に送らしむ。(傍線筆者)

少しむずかしい引用文だが、ここで注意してほしいのは傍線部の「<u>筑紫都督府</u>つくしととくふ」という語だ。うっかり見落としてしまいそうだが、これが非常に重大な意味をもっている。歴史の教科書で教わったように、日本は白村江はくすきのえの戦い(六六三年)敗れ、朝鮮半島から撤退した。が、教科書ではふれていない事実が『日本書紀』には記されている。それは、唐の軍隊によって、現在の福岡県太宰府市に「筑紫都督府」が設置され、それ

に伴って「漢字使用令」が出されたという記述である。 戦争に敗れた同が、上領軍によってその国の歴中に担ざせ豊重な遺産とないえる言葉の

戦争に敗れた国が、占領軍によってその国の歴史に根ざす貴重な遺産ともいえる言葉や 文字をはく奪された例はたくさんある。

そして、戦勝国の文字を押しつけられた国は、古今東西を問わず、多くの実例で確かめることができる。

しかし、である。まさかわれわれの国にもこのような屈辱的な歴史があったとは、読者 も夢にも思わなかったのではないだろうか。そう、日本は白村江の戦いに敗れて中国に占 領されたのだ。

『日本書紀』天智八年(六六九年)十二月の条には、さらにこう書いている。

また、大唐もろこし、郭務綜くわくむそう等二千余人を遣して来らしむ。

#### (傍線筆者)

つまり、この当時、占領軍司令部の要員とみられる二〇〇〇人もの唐の"使節団"が続々と日本に送りこまれたのだ。おそらく彼らは、敗戦日本の文化解体作業に従事するために派遣されたに違いない。

このことをはっきり示しているのが、九州の大宰府を「筑紫都督府」という呼び名に改めたという記述である。

この都督府という呼び名は、この時期に、朝鮮半島の高麗こまと百済くだらを占領した唐の軍隊が、それぞれの都を「平壌都督府」「熊津都督府」と称した例からもわかるように、唐の占領軍司令部が置かれた外国の都のことをさしている。

したがって、九州の大宰府が天智六年(六六七年)以前に中国の日本占領支配の拠点に なっていたことは明らかである。

### 高句麗"日本王国の解体をはかった漢人

中国の日本占領支配の実態は目にあまるものがあったと考えられる。

六七二年の「壬申の乱じんしんらん」に勝利して、中国の日本占領支配に一応の終止符を打った天武天皇も、国内の漢人あやひと

(インドから中国・日本に侵入したアーリヤ人)に対し、憤慨してこう述べている(『日本書紀』天武六年〈六七七年〉五月の条より)。

汝らのやからは、もとより七つのあしきことを犯せり------ [略]:… 常に汝らは謀りごとをもって事となす。

つまり、漢人がいつも陰謀を企て、国家の解体をはかってきたことを、天武天皇は糾弾 しているのである。

当時のこのような背景については、.こく少数の学者が、天智天皇は百済系で、天武天皇は高句麗系であったと述べている程度で、大化改新と白村江の戦いをきっかけに、漢人(アーリヤ人/アッシリヤ人)が日本列島から朝鮮半島、中国大陸東北部にまたがるかつての高句麗=日本王国を解体したことや、白村江の敗戦と壬申の乱を機に、それまでの高句麗領土内に渤海・新羅・日本の三つの国が、唐(アヤ人)の承認を必要とする形で成立したこと、などについては全く論じられていない。

占領時代に天智天皇が近江京に遷都したことや、天智天皇と天武天皇に代表される二大勢力が壬申の乱で激しくぶつかったことが国内的に論じられるだけで、近江遷都と壬申の乱を生み出した国際的背景や、皇室の菩提寺(京都の泉涌寺)に天武天皇の墓がないこと、などについてはこれまでほとんど論じられなかった。ここに歴史のひとつの盲点があったように思われるのである。

# 古事記』編纂に関与した稗田阿礼は神代文字の通訳だった

七世紀のはじめに、隋の煬帝が率いる一○○万の大軍と戦ってこれを退け、ついに隋を滅ぼすきっかけをつくったクル族の国·高句麗は、六六八年に唐に滅ぼされるまで七○○年以上もの歴史を誇ってきた。が、このように古い歴史をもつ国にさえ固有の文字で書かれた記録はなかったことになっている.これは実に奇妙妙というほかない

しかし、秦漢帝国以来の中国あやひと諸王朝が、周辺諸国にみずからの漢字文化を押しつけ・ 中国の宗主権を認めない国を侵略して、その国の文字文化を破壊してきたことははっきり している。

このことは、中国の史書の多くに、新しい王朝が古い王家の記録を没収し、書き改めた ことを示す記述が残っていることをみても明らかだ。

このような中国の支配者による歴史抹殺の手口、つまり漢字以外の文字で書かれた他民 族の記録を消し、そのことによって他民族を中華帝国に従属させていくやり方の最も有名 な例が、秦の始皇帝による焚書坑儒だ。

紀元前三世紀の秦の始箒の時代には、とにかく"坊主憎けりゃ、ケサまで憎い論法で、儒教に関する書はことごとく焼かれ、その教えを説く弟子たちはみな迫害された。

漢字文化を長い間誇っている中国ではあるが、漢字そのものの成り立ちを調べてみても、 その中には、漢字以前に大陸の各地で使われていた日本の古代文字を並べかえて、元の意 味を消し去るという手法で新たに作られた例があることも、すでにいくつか確認されてい る。日本の古代文字を元にして作った漢字があるということは、漢字以前に神代文字があったことの有力な証拠ではないか(拙著『太古日本の王は世界を治めた』参照)。

いずれにせよ、日本はかつて中国に占領された。そして、この悲劇のために、それ以前に使われていた日本の神代文字が消されてしまったことは明白である。

そればかりではない。『古事記』『日本書紀』もまた、それ以前にあった天皇紀、国記を 漢字に書き改めたものと思われる

稗田阿礼が誦ょみ、それを太安万侶が漢字で書きとめてつくられたといわれる『古事記』。 日本最初の正式な歴史書である『古事記』自体も、それ以前にあった日本の古代文字の記録を漢字に改めるよう圧力がかかった結果つくられたものではなかったか。

その証拠に、『古事記』には、稗田阿礼が古代文字で書かれた記録を読んだものを、安万 侶が漢字に改めていったという意味合いのことがはっきり書かれている。

たとえば、安万侶自身が『古事記』の序文で、次のように述べている。

くじ

そこで天皇(天武天皇のこと)は阿礼に命じて、帝皇の日継および先代旧辞を<u>誦み</u>習わせた:… 〔略〕……

ここに天皇(持統天皇のこと)は、帝紀及び旧辞の違いを正そうとして、臣、安万 侶に命じて、阿礼が諦むところの先帝(天武天皇)の御命令になられた旧辞くじ の類を撰録して差し出すようにと仰せられた……(傍線筆者)

つまり、安万侶は「阿礼が誦む(=読む)ところの帝紀・旧辞」を手がかりとして、古事記 を編纂したのである。もし帝紀や旧辞が漢字で書かれたものであるなら、漢文の達人だっ た安万侶がそれを自分で読めばすむことで、わざわざ阿礼の口を借りる必要はないはずだ。 これはどういうことを意味するのか。そうだ、『古事記』の元になった帝紀や旧辞は、阿 礼には読めても安万侶には読めない文字、つまり日本の古代文字で書かれていたのだ。そして、阿礼は神代文字で書かれた記録と漢文の橋渡し役、いわば通訳として安万侶のために働いた、ということではないか。

記憶力バツグンといわれた阿礼は、「読み習ったもの」を記憶した。しかしそれは、神代 文字で書かれていたものを読んで、それを記憶にとどめたということなのだ。

正史編纂という国家の重大事業にあたって、おそらく阿礼は、神代文字で書かれた帝紀 や旧辞を暗誦するくらい念入りに読み、それをていねいに安万侶に読んで聞かせたものと 思われる。

しかし、これほど日本の神代文字にくわしかった阿礼も、天武天皇亡きあと、何者かに よって抹殺されてしまった。私はすでにその決定的な証拠ともいえるものをつかんでいる。 次に示すのはそのひとつだ。

### 宮崎県の碑文「ヒエタノアレモコロサレキ」の謎

九州、宮崎県の山中に残る碑文は、これまで「ヒフミョイムナヤ……」と読まれてきた。 が、これでは何のことだかわからない。

しかし、私が一字一句正確に読んでみると、そこには、

ヒエタノアレモコロサレキ(稗田阿礼も殺されき)

という怖るべき一文が刻まれていたのだ。この短い碑文が何を物語っているのか。おそらく読者も気づかれたろう。

そうだ、この碑文が意味するところはこうだ。阿礼は漢字以外の文字の存在を知り、国記を書き改めた事情も熟知していた。それは占領軍と親唐派にとって、知られてはまずい重大な秘密だったのである。それを知った人間は生かしておくわけにはいかない。というわけで、唐の占領支配を継続しようとした刺客によって暗殺されてしまった、というわけである。

おそらく阿礼と同じような運命にあった者は一人や二人ではなかったろう。「稗田阿礼も…」という短い碑文からそれを察することができる。

この一例をとってみても、日本に固有の文字がなかったとか、縄文時代にさかのぽる古い文字記録がない、と言われてきたのは事実でないことがわかる。

# 神代文字抹殺の歴史を認めようとしない学者たち

こういったことをすべて考えあわせてみると、日本には漢字以外の文字はなかった、そ して漢字以前の文字もなかった、という前提に立って組み立てられてきたこれまでの歴史 はすべて虚構だったといわなければならない。

そもそも日本が中国に占領されたことが『日本書紀』にはっきり記されているにもかか わらず、これまでの学者がそのことを全く無視してきたのはなぜか。学者として怠慢だっ たと言われても、やむを得ないのではないか。あえて言うなら、この占領時代に日本古来 の文字が消され、『古事記』前の神代文字記録が消されてしまったことを認めない学者に、 日本の古代史を語る資格はない。

今から三〇〇〇年前に始まり、イスラエル〜エジプト〜インド〜中国を次々に支配下に 治めてきたアーリヤ人(アトランティス/アッシリヤ/アヤ人)。彼らの魔の手は、ついに 日本にまでのびてきて、古くから伝わる日本の文字記録を抹殺してしまったのである。 したがって、このような国際的・世界史的背景に目を向けない学者は、われわれを中国 漢字文化の奴隷として盲目にさせておくことに今も協力し続けていると言えるのだ。 われわれにとっては、もはやこのように日本の古代文字を否定し、日本古代史の復元を 妨げる学者たちに用はない。

われわれは日本の神代文字を武器として、失われた日本の古代史を明らかにし、世界各地に雄飛したクル族の歴史を明らかにしなければならない。

日本の神代文字を学ぼうとしない者には太古世界の真実はわからないし、"クルの栄光"は訪れないのである。

#### 秘密裏に繰り返し調査されているエクアドルの地下都市

さて、以上のようにわれわれは日本の古代文字にどんなものがあるか、日本の神代文字がなぜ消されてしまったかを見てきた。

それでは、これらの神代文字を使って、どんなにすばらしいことがわかるか、それを実 例によって確かめてみよう。

すでに読者は、欧米の秘密結社が捜し求めてきた南米カラ帝国の"七つの都"のうち、 第二の都に相当するエクアドルの地下都市ロス・タヨスがわれわれの知らない間に暴かれ たことを知っている。

そこに隠された日本人の祖先クル族の宝がどんなものであったか、われわれはその一部 をデニケンの報告書から知ったにすぎない。

しかし、このエクアドルの地下都市には、太古日本の本物の"円盤"が隠されていたのではないか。そしてここにあった円盤がアメリカのライト・パターソン空軍基地の秘密の地下基地に移され、UFO研究者の間で知られている「宇宙人から回収した円盤」として極秘のうちに研究されているのではないか、ということも考えられる。

とにかく、われわれはエクアドル地下都市の調査経過を知らされていないので、そこに 隠されていたクルの宝の全貌を知ることができないのだ。

最近になって、エクアドルの地下都市はようやくその一部が公開され始めている。ファン・モーリスがこの地下都市に入ったのは、デニケンによれば一九六五年のことだという。 その時からこの地下都市にわれわれが立ち入ることを許されるまで、三〇年近い時が経過している。

聞くところによれば、この地下都市はエクアドル政府によって調査されただけでなく、 アメリカの考古学者や物理学者、地質学者がそれぞれ秘密のうちに組織した探検隊によっ て、すでに何回も調査されているという。

このことは、エクアドルの地下都市に関する秘密が日本人をふくむ世界の一般大衆に知られる前に重要な遺物をそっくり別のところに移し、空飛ぶ円盤ヴィマナに関する情報を独占しようとした欧米指導部のねらいに基づいているのではないだろうか。

要するに、われわれの祖先イサクとヨセフがここに隠した"クルの宝"はごっそりどこかへ持ち去られ、今はすっかりもぬけの殻からになっているということだ。

#### 神代文字解読に必死で取り組む欧米の碑文学者たち

アメリカにいる私の友人は、これに関連して、次のようなおもしろい話をしてくれた。 「君はジョージ・ルーカスが作ったあの映画を見たかい。ニューヨークのど真ん中に空から落ちてきたアヒルが悪いやつらをやっつけるという映画さ。あの短足でお人好しのアヒルって、君たち日本人のことなんだよ。君にはもっと賢い"足長おじさん"でもやってもらいたいね。」

どうやらジョージ・ルーカスの関係者は、映画『スター・ウォーズ』や『レイダース』を作ったときから、南米の地下都市に隠されてきた秘密の一端を知っていたらしいのだ。その証拠に、NASAの関係者は、すでに一九七〇年代からアンデス山中に眠るロス・タョス以外の地下都市を必死で捜している。

ヨーロッパで出版された『アカコル年代記』という不思議な本には、南米にあるアカヒム、アカニス、アカコルという三つの地下都市にまつわる宇宙人の物語が書かれている。 六〇年代にアポロー3号の月着陸船を設計した NASA の開発部長ヨセフ・ブラムリッチ博士は、これら三つの地下都市のありかを知りたがっていたという。

私はこのような話を聞いたとき、まさかと思った。が、七○年代の後半にエクアドル黄金板の謎を解いてみて、なるほどと合点がてんがいった。

そうだ!「アカヒム」とは「アガキミ(吾が君)」イサクのことだ。「アカニス」とは「アガヌシ(吾が主)」ョセフのことだ。そして、「アカコル」とは「吾がクル」、つまり、われわれの祖先クル族のことではないか、と。

日本人はこの間に誰ひとり南米の地下都市のことも、そこに隠されたクルの宝のことも、 そこから出てきた秘密の文字板についても、具体的に知ろうとせず、何ひとつ実際的な調 査活動をしなかった。欧米の指導者とは雲泥の違いだ。

日本人はこれまで誰も真剣に日本の古代文字のことを勉強しようとしなかった。ところが、欧米の碑文学者は伊勢神宮の古代文字についてすでに知っており、東京のある会社に神代文字に関するビデオの制作を依頼し、二〇〇〇本も買い取って勉強しているという。日本の文部省と指導的な学者たちが今もあいかわらず神代文字のことを否定し続けている間に、欧米の碑文研究者は、南米の地下都市から出てきた大量の金属板文書を解読するため、日本の神代文字を研究しているのだ。こんなバカなことがあっていいのだろうか。われわれの祖先が残した貴重な記録をわれわれが知らず、日本人がかつて使っていた文

字を日本人が否定するという、こんな状態ではイサクやヨセフが嘆くというものだ。

### 今も南米の地下に眠る、手つかずの六つの都市

私は、古代カラ帝国の"七つの都"のうち、すでにひとつが暴かれただけでも残念に思う。けれども、われわれにはまだ六つの都市が手つかずのまま残されている。

そのうちのひとつは、ボリビアのティアワナコ遺跡のそばにある地下都市である。もう ひとつは、ブラジル東部のピアウイ州セテ・シダデスにある地下都市だ。

これらの地下都市はエクアドルの地下都市とトンネルで結ばれている。そこでもしかしたら、エクアドルの地下都市がファン・モーリスによって確認された時点で、これらの地下都市も調査されてしまったかもしれない。

が、われわれにはその他に四つの都市が残されている。その位置をすでに私は知っている。けれども、日本人と日本政府が古代カラ帝国の歴史とそこに隠された"クルの宝"の秘密を明らかにしようとしないかぎり、未来の宇宙文明に関する豊かな情報を秘めた南米の地下都市は、ひき続き欧米のエリートだけの独占物となるだろう。

われわれがこれから進める調査には、古代クル族の歴史と文字についての理解だけでな く、この調査を強力に推進するための広範な支援が求められているのである。

残る四つの都市のありかを示す碑文は、先に紹介したブラジル北部にあるカラ族の聖地、ペドラ・ピンタダの岩壁に描かれている。

そこに描かれた文字と謎の記号は、こう語っている。

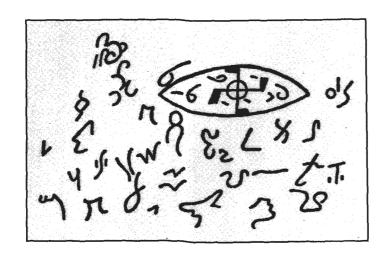
イサクとヨセフに船を降せる神を見よ

イサク、ヨセフとともにこれを手厚く守れ

今から二七〇〇年前にアッシリヤの侵入を受けて滅びた古代イスラエル王国の最後の王ホセア、すなわちわれらのイサクにクルの宝と呼ばれた宇宙船を与えて天界に去った私の兄弟は、こう言っている。

すべての日本人と日本の政府は、過去三〇〇〇年の間にこの地球上でくり広げられてきた覇王たちの戦いを終わらせるため、すみやかにクルの宝を見いだして世界平和に役立てよ。

このためにも、私はひとりでも多くの読者が この本に書かれたことをマスターして、世界に 雄飛してほしいと思っている。私は再びこう叫 びたいわれらクル族の未来に栄光あれ、と。



ペドラ・ピンタダ の岩絵と謎の文字

# あとがき

### 太古日本の王は世界を治めた

南米エクアドルの地下都市から出土した謎の黄金板とそこに記された"クルの宝"。 今から二七〇〇年前、アトランティス=アッシリヤに滅ぼされた日本人の祖先クル族の 王が世界を治めていた頃に、「王のしるし」として使われていた太古日本の宇宙船ムーヴィマナ。

私は、紀元前のはるか昔に栄えたムー文明の時代にわれわれの祖先が大切にしてきた"クルの宝"の正体を追求していくうちに、この本に述べたような信じられない世界に足をふみ入れてしまった。

そして私は、アッシリヤ人=アーリヤ人の手による抹殺をまぬがれて世界の各地に残されたクル族の碑文と古い記録を調べていくうちに、"クルの宝"と呼ばれた太古日本の宇宙船は、今も地球上のどこかに隠されていると思うようになった。

その場所は、チベットに古くから伝わる言い伝えによれば、紀元前八世紀にヒマラヤ山脈のカイラス山にある仙洞シャンバラから世界を治めた偉大なるクル王ドリタラーシュトラの息子たち、シバとクベーラの兄弟が"衛兵"を残して立ち去ったシャンバラ地下都市ネットワークのどこかだという。

また、今から一〇〇〇年ほど前、ユーラシア大陸で活躍した契丹人の『王家の書』(九四二年)に記された東大国とうたいこくティルムン(日本)の古い言い伝えによれば、"クルの宝"はスサダミコと呼ばれた東大国王ヨセフが世界の各地に築いた都市のどこかに隠した、と暗示されている。

私はすでに七〇年代に、そのありかのひとつが南米カラ帝国の『七つの都』にあることを知り、機会があればそこへ行ってみたいと思ってきた。が、そのような私の夢はいまだに実現していない。

しかし、この間に、私の古代文字解読作業は自分でも予想しなかったほど順調に進み、 太古日本の"クルの宝"に関係のあるいくつかの古い記録も手に入れることができた。 さきに紹介したエクアドルの黄金板やペドラ・ピンタダの碑文は、それらの資料のごく わずかな例であり、以下に取り上げる契丹人の古い記録もまた、私の仮説を裏づけてくれ る格好の資料となった。

私が胸をときめかせた東大国の伝説の都のありかを示す『王家の書』には、こう書かれている。

その昔、天界を治めた太陽女神であるわれらの日祖アメウシハクカルメ(アマテラス)は、シベリア南部のエニセイ川中流域に広がるミヌシンスク盆地に宇宙船で着陸し、盆地の南部から東部にかけてつらなるサヤン山脈のふもと、カーメンヌイで日孫につそん。

#### を産まれた。

のちに東大国主となられた日孫ヨセフは、またの名をアバカンといい、スサダミコ ともいう。

ミヌシンスク盆地の中心都市アバカンにその名をとどめる日孫に、日祖はみずから 乳を与え、彼が大きくなると、高天使鶏こまかけと呼ばれる空艇を与えて地上に降臨させた。 これがわれらの神祖ヨセフの誕生の由来である。

ョセフを神祖とあおぐわれらカラ族は、世界の各地で活躍した。カラ族の勇者はイースター島のラノ.ララクの南東にあるホツイチの霊廟にまつられ、各地のカラ族の都はいずれも高麗国こまやと呼ばれ、われらは国名をシウク、族名をシウカラ、国民をタカラと称し、国王をシウクシフとたたえた。

シウクとは東大国、シウカラとは東大神族、シウクシフとは東大国主という意味で ある。

神祖ヨセフの子供や孫が世界の各地でカラ族の国を受け継いだのは、ヨセフの時代にカラ族が世界的な規模で活躍したからである。

紀元前のわれらの祖先の活躍を記した書物のひとつには、こう記されている。すなわち、トコヨミカド(常夜帝=地下都市の王)と呼ばれた東大国王ヨセフは、初めオーストラリアのジランバンジに降臨し、次いでミヌシンスク盆地を見おろすアファナシェヴァの山に降臨した。

オーストラリアとシベリアの二か所にカラ族の二つの源があり、同じシウ氏を名乗る二つの宗族がいるのは、神祖ヨセフの右のような降臨にともなって、われらの祖先が現地にとどまったからである。

紀元前七世紀にカラ族の一員となったティルムンの人々はヨセフの子孫ではなく、 紀元前一五〇〇年頃の大洪水のあとティルムンの楽園に住んだウトナピシュティム(夏 王朝の創始者・禹)の子孫である。

アフリカのカラ族の王としてその名を世界中の人々に知られたエジプトのファラオ、タルハカ(前六九〇~前六六三年在位)があらわれたのは、ウトナピシュティムの時代より八〇〇年ほどあとのことである。

ウトナピシュティムやタルハカ、ヨセフの時代にわれらの祖先が世界の各地で活躍 したことを垣間見るにつけても惜しまれるのは、その後千数百年の間に、われらカラ 族のかつてのつながりが見失われ、祖先の貴重な記録がどこかへ消えてしまったこと である。

そこで私は、複雑にからみあった瓜うりのつるや綿糸のかたまりを解きほぐす思いでカラ族の失われた歴史を解き明かし、その昔、カラ族の祖先が今とはくらべものにならないほど広大な土地で活躍した時代があったことを明らかにしたいと思う。

以上のように、『王家の書』が垣間見せてくれる太古日本の歴史は、その内容があまりにも通説とかけ離れているため、これまで欧米や中国の学者が流布してきた歴史教科書の常識に従えば、全くの空想としか見えない。

が、『王家の書』によれば、われわれ日本人と契丹人の共通の祖先である東大神族シウカラの歴史は、過去三〇〇〇年にわたってエジプト、シュメール、インダス、黄河の地を次々に侵略してきたアッシリヤ人、アーリヤ人、アヤ人(漢人として知られる欧米. 中国の支配階級)の手で抹殺され、改ざんされてきたという。

つまり、われわれがこれまで教わってきた紀元前の日本と世界の歴史はすべて虚構であり、われわれの祖先の真実の歴史、カラ族(クル族)と呼ばれた東大神族がかつて地球のすみずみに築き上げてきた輝かしい都市文明の歴史は、漢人(アヤ人/アーリヤ人/アッシリヤ人)の手で巧妙に流布されてきた歴史の通説にひそむ大ウソを暴かなければ明らかにできない、ということを『王家の書』は訴えているのである。

『王家の書』に記された内容は、現在のわれわれにとって一見信じがたいものではあるが、 今となってはすっかり忘れ去られてしまった太古日本の歴史の真相を、かなり正確に伝え ている。

日本では、これまで、江戸時代に神代文字の存在を明らかにした平田篤胤の功績が学問的に根づかなかったため、過去二〇〇年間、欧米の考古学と言語学の発展に基礎資料を提供し、オリエント世界の古代史を解明するうえで決定的に重要な役割を果たしてきた碑文

学の伝統がなかった。

けれども、今やわれわれは、過去二〇年間にわたる国内・海外の調査によって、その正 しさが明らかになってきた古代クル族の神代文字を有力な武器として、世界各地に築かれ たクル文明の諸都市をさぐり当て、『王家の書』に記された東大国の都の位置や、高天使 鶏こまかけ

という空艇に乗って世界を駆けめぐったスサダミコ(ヨセフ)の足跡を発見できるように なった。

その高天使鶏とは、エクアドルの地下都市から出土した黄金板に記されている。"クルの宝"であった。この宝が、ヒトラーやルーズベルトの捜し求めた宇宙船ヴィマナそのものであることは読者もすでにおわかりだろう。

われわれが今その正体をつきとめようとしているこのヴィマナに関しては、インドに伝 わるクル族の伝説に数々のすばらしいことが言い伝えられている。

たとえば、紀元前八世紀のバーラタ核戦争で活躍した宇宙工学者マヤは、周囲一万キュービット(直径一・五キロ、円周四・七キロ)にも達する星間宇宙船を造っただけでなく、ガガナカーラ・サブハをはじめとするいくつかの巨大な宇宙都市や宇宙ステーションを造った。

また、ブラフマンはこの時代にヴィラヤ、カイラサ、プシュパカ、マニカ、トリビスタパと呼ばれる五つの宇宙都市を造ったが、このとき天界の王となったクル族の英雄クベーラとシバが所有したプシュパカ・ヴィマナは五五〇キロ×八〇〇キロという信じられないような規模をもち、銀河系でひときわ美しい輝きを放っていたといわれる(日本探検協会編『ムー大陸探検事典』廣済堂出版刊・参照)。

われわれの地球探検の旅は、今ようやくはじまったばかりである。これまで欧米人が進めてきた地理上の大発見時代はすでに終わりを告げ、これから一二世紀に入って、われわれ自身による歴史上の大発見時代がはじまろうとしている。

日本人の祖先であるクル族がかつてこの地球上に築きあげていたムー文明は、アーリヤ人の侵入にともなう大戦と異変によって、今から二七〇〇年前にことごとく滅び去った。けれども、われわれは現代のサイエンスとテクノロジーによって、当時のムー文明の輝きを再び取り戻そうとしている。

今やわれわれは、かつて天界に去った日本人の祖先が残したクルの宝、古代のシュメール語で「ムー」と呼ばれたヴィマナの秘密をつきとめることによって、かけがえのない地球を再び美しい星につくりかえる責任と使命を担っているのである。

宇宙からのメッセージは、われわれに告げている。

#### クル王をまつりなば来る

われわれは今や、天の兄弟たちとともに新しいクルの宇宙文明を創造する時代に生きて

いる。読者もまた、私とともに二一世紀日本の世界文明、未来の平和的な宇宙文明をつくりあげていくため、全力をつくそうではないか。

#### 参考文献

アレック.マクレラン「失われた地底世界アガルタ』(スーヴァニア・プレス社)

ハロルド. ウィルキンス『古代南アメリカの謎』(ライダー社)

ジョン. ロイド. ステファンス『チアパス・ユカタン事記』(ハーパーズ社)

H. P. ブラバツキー「ヴェールを脱いだイシスど(テオソフィカル・パブリケイションズ社)

E・V・デニケン『神々の黄金』(金森誠也訳・角川書店)

ブライアン. フォーセット『フォーセット探検隊』(ハッチンソン出版社)

レイモンド. バーナード「地下の世界』(ユニバーシティ・ブックス社)

ジェームズ・チャーチワード『ムー大陸の子孫たち』(小泉源太郎訳・大陸書房)

マルセル・オメ『太陽の息子たち』(小川伸訳・大陸書房)

イマヌエル・ヴェリコフスキー『混沌時代』(鈴木敬信訳・法政大学出版局)

マックレオド『日本古代史の縮図』(日乃出書房)

ョセフ.アイデルバーグ「大和民族はユダヤ人だった』(中川一夫訳・たま出版)

ヘロドトス『歴史」(松平千秋訳・岩波文庫)

G. R. ジョシュア 『ヴィマー一力・シャストラ』(国際サンスクリット・アカデミー)

チャンドラ・ロイ『マハーバーラタ』(カルカッタ)

カール. ベツォルト「ケブラ・ナーガスト』(バイエルン王立科学アカデミー)

南山宏『宇宙から来た遺跡」(講談社)

峰山巌・掛川源一郎『フゴッペ洞窟」(六興出版)

岡崎文喜『縄文土器の謎』(大陸書房)

吾郷清彦『日本神代文字』(大陸書房)

樋口隆康「古鏡』(新潮社)

川守田英二『ヘブル詩歌の研究』(八幡書店)

泉靖一『インカ帝国』(岩波新書)

高橋良典『大予言事典・悪魔の黙示666』(学研・ムーブックス)

高橋良典「人類は核戦争で「度滅んだ」(学研・ムーブックス. 監修)

高橋良典『諸世紀の秘密』(自由国民社)

高橋良典「日本とユダヤ謎の三千年史』(自由国民社)

高橋良典『謎のアガルタ宇宙文明』(自由国民社・監修)

高橋良典『太古日本の王は世界を治めた」(徳問書店)

高橋良典「謎の新撰姓氏録』(徳間書店)

高橋良典『ムー大陸探検事典』(廣済堂出版・監修) 高橋良典『謎の古代文字と古史古伝」(日本探検協会) 高橋良典「失われた古代文字総覧』(日本探検協会) 別冊歴史読本1993年4月号『古代日本人の大航海と謎の未解読文字』(新人物往来社) 歴史EYE-993年8月号『ムー大陸はどこへ消えた?』(日本文芸社) 歴史EYE-993年12月号『幻の中国超古代王朝』(日本文芸社)

#### 〈著者紹介〉

高橋良典(たかはし・よしのり) 地球文化研究所所長/日本探検協会 会長

東京大学経済学部を卒業後、世界各 地の神話・伝説・叙事詩の比較研究 を進め、太古日本の宇宙文明が実在 したことを証明するため、地下都市 と占代文字の解明に取り組んでいる。 考占学・碑文学の新しい分野を開拓 して海外からも注目を浴びている。 1992年11月より、東京国凱博物 館大講堂で地球探検・公開シンポジ ウム「占代日本人の大航海時代」「日 本人のル~ッを探る」を主催。 著書は『大予一..R事典」(学研・ムーブ ックス)『ムー大陸探検事典』(廣済 堂出版). 謎の新撰姓氏録』『太古H 本の王は世界を治めた』(以上、徳間 書店)など多数。

太古日本・驚異の秘宝いま開かれる七つの扉 一九九四年五月二十七目第一刷発行

著者 高橋良典

発行者 野間佐和子

#### 発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 販売部03-5395-3622

製作部03-5395-3615

編集 株式会社講談社ペック

代表山口勘蔵

東京都干代田区麹町四-三宮ビル〒[〇二

電話〇三一三二三四一二一七一

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所株式会社若林製本工場

yoshinori takahashi 1994 printed japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは講談社ペック宛にお願いいたします。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

(定価はカバーに表示してあります)

ISBN4-06-206532-0(ペク)